

そ け い た て や ま  
磯鶏館山遺跡

発掘調査報告書

— 本 文 編 —

1995.3

岩手県宮古市教育委員会



そ け い た て や ま  
**磯鶏館山遺跡**

発掘調査報告書

— 本 文 編 —

1995.3

岩手県宮古市教育委員会



# 序 文

宮古市内では現在30ヶ所ほどの城館遺跡が、河川の流域や湾岸などで確認されております。城館遺跡は、<sup>べい</sup>閉伊、<sup>せんとく</sup>千徳、<sup>たぐきり</sup>田鎖などの古くから親しまれてきた地名を残している所や、地元の人が「<sup>たてやま</sup>館山」と呼んだりしている小高い山などにあります。それらの地名はもともとその地を開拓し、守ってきた豪族といわれた人々の名前だったのです。これらの人々の歴史を知らずして宮古の中世を語ることはできません。

宮古市で城館遺跡が調査されたのは、現在老人福祉センターになっている金浜館跡の調査が初めてのことであり、今回の港湾埋め立ての土砂採取用地として開発の対象となった磯鶏館山遺跡が二例目であります。金浜館跡では、空堀跡やほぼ完形の天目茶碗が出土するなど中世がそのまま残されたような遺跡でしたが、磯鶏館山遺跡では、中世のみならず古代から近世にかけての遺構、遺物が大量に出土しております。このことは磯鶏館山が実に長きにわたって人々の生活の舞台となってきたことを物語っております。

三年に及ぶ調査の成果がこうしてまとめられ、欠けがえのない貴重な資料として公開できることを喜ばしく思うとともに、これが広く活用され埋蔵文化財に対する理解の一助となることを願っております。

長期にわたる調査のなかで実に多くの方々から御指導、御協力を戴きました。心より感謝申し上げます。

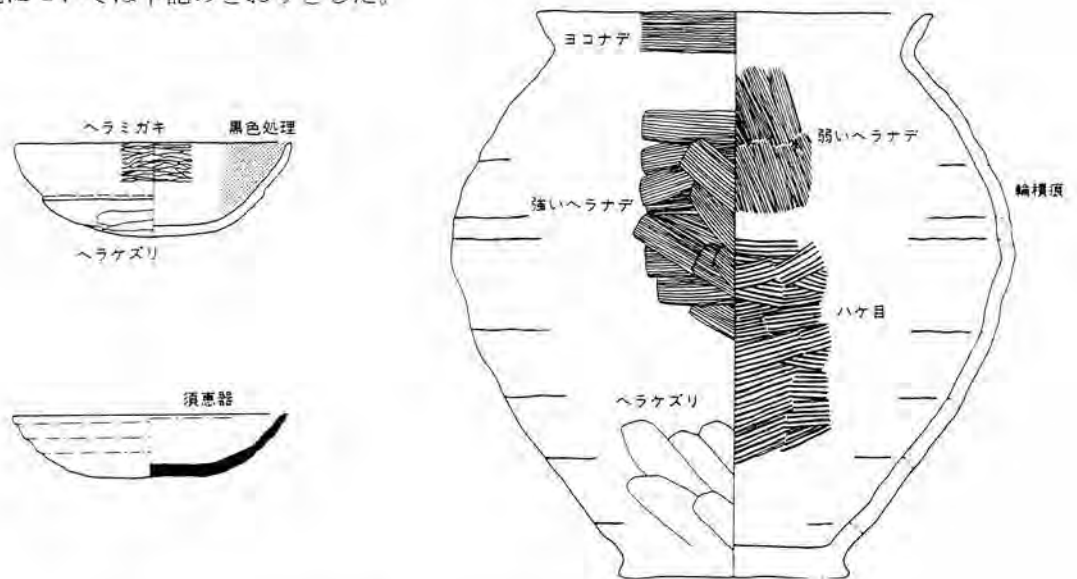
宮古市教育委員会  
教育長 佐藤勇逸



# 例 言

- 1 本書は昭和59年9月18日から昭和62年1月10日まで実施した、磯鷄館山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査の主体は宮古市教育委員会である。発掘調査は、武田、高橋、鎌田が担当した。本書の執筆は、竹下、高橋、鎌田、阿部が分担し、橋本、三浦、工藤がこれを補佐した。執筆分担は次のとおりである。  

第Ⅰ章、第Ⅱ章……阿部 豊	第Ⅳ章第2節……鎌田祐二
第Ⅲ章……竹下将男	第Ⅴ章第1節……竹下将男
第Ⅳ章第1節……竹下将男（遺構）、 高橋憲太郎、阿部 豊（遺物）	第Ⅴ章第2節1、2……鎌田祐二 第Ⅴ章第2節3……高橋憲太郎
- 3 調査座標は、平面直角座標第X系を座標変換して使用した。また調査用の局地的な座標系であることを明示するためRを冠して表示した。  
 座標軸方向 ～ 第X系に準じる  
 調査座標原点 ～ X -41,600,000 Y +96,600,000
- 4 高さは標高値をそのまま使用した。
- 5 遺物の表現については下記のとおりとした。



- 6 土層観察に際しては、『新版標準土帖』(1967, 小山正忠, 竹原秀雄)を参考とした。
- 7 発掘調査および遺物の整理、報告書の作成にあたり次の方々から御教示、御指導を頂いた。記して感謝申し上げます。（順不同）  
 愛知県陶磁資料館 井上喜久男氏 常滑市民俗資料館 中野晴久氏  
 東北歴史資料館 藤沼邦彦氏 岩手県教育委員会 相原康二氏 昆野靖氏  
 北上市立博物館 本堂寿一氏 盛岡市教育委員会 原田秀文氏  
 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 高橋與右衛門氏
- 8 出土した遺物、実測図、写真など調査にかかわる資料は、一括して宮古市教育委員会で保管している。
- 9 本文中の引用文献は次のとおり略記した。  
 1983～86『宮古市分布調査報告書1～4』 武田将男一『分布調査1～4』  
 1986『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田将男一『分布図86』





# 本文編 目次

序 文  
例 言  
目 次  
挿入目次

第 I 章 調査の経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査要旨	1
3 調査体制	1
第 II 章 遺跡をとりまく環境	3
第 III 章 中世の遺構と遺物	6
第 1 節 遺 構	6
(1) 空掘跡西部	6
(2) 空掘跡南西部	7
(3) K 1、K 2 地区	8
(4) K 3 地区	8
(5) K 4 地区	9
(6) K 5 地区	10
(7) Y 1 地区	10
(8) 空掘跡南部	13
(9) K 6 地区	14
(10) Y 2 地区	14
(11) K 7 地区	17
(12) K 7 V 地区	18
(13) 空掘跡東部・土橋	18
(14) 空掘跡北部	19
(15) K 11 地区	20
(16) K 12 地区	20
(17) Y 3 地区	20
(18) 中央地区	22
第 2 節 遺 物	24
1 陶 磁 器	24
(1) 青 磁	24
(2) 常 滑	25
(3) 播 鉢	26
(4) 瀬 戸	27

2 鉄製品	28
(1) 釣針	28
(2) 刀子	28
(3) 火打金	28
(4) 鉄鏝	28
(5) 鉸具	28
(6) 釘類	29
(7) その他の鉄製品	29
(8) 鎧金具小札	29
3 銭貨	30
第3節 周辺地区 (A・B・F地区)	33
1 A地区	33
(1) N区	33
(2) S区	34
(3) まとめ	34
2 B地区	35
(1) 基本層序	35
(2) 遺構	35
(3) 遺物	35
(4) まとめ	36
3 F地区	36
(1) 基本層序	36
(2) 遺構	37
(3) 遺物	39
(4) まとめ	42
第IV章 古代の遺構と遺物	43
第1節 西地区	43
1 W1区	43
(1) HH01 竪穴住居跡	43
(2) HH02 竪穴住居跡	44
(3) HH03 竪穴住居跡	45
(4) HH04 竪穴住居跡	46
(5) HH05 竪穴住居跡	47
(6) HH06 竪穴住居跡	48
(7) HK01 土坑	48
(8) HH07 竪穴住居跡	48
(9) HH08 竪穴住居跡	49

2	W 2 地区	50
(1)	HH 0 9 豎穴住居跡	50
(2)	HH 1 0 豎穴住居跡	51
(3)	HH 1 1 豎穴住居跡	52
(4)	HH 1 2 豎穴住居跡	53
(5)	HH 1 3 豎穴住居跡	54
(6)	HH 1 4 豎穴住居跡	55
(7)	道狀遺構	55
(8)	石 列	55
(9)	S X 0 5	56
(10)	S X 0 6	56
3	W 3 区	56
(1)	HH 1 5 豎穴住居跡	56
(2)	SK 0 1 土 坑	57
4	W 4 区、W 5 区	57
(1)	S X 0 7	57
(2)	S X 0 8	58
5	W 6 区	59
(1)	SH 0 2 豎穴住居跡	59
(2)	SH 0 3 豎穴住居跡	59
(3)	H X 0 1	60
(4)	H X 0 2	60
(5)	HH 1 6 豎穴住居跡	61
(6)	HH 1 7 豎穴住居跡	63
第2節 東地区		66
1	豎穴住居跡	66
(1)	HH 1 8 豎穴住居跡	66
(2)	HH 1 9 豎穴住居跡	67
(3)	HH 2 0 豎穴住居跡	67
(4)	HH 2 1 豎穴住居跡	70
(5)	HH 2 2 豎穴住居跡	71
(6)	HH 2 3 豎穴住居跡	72
(7)	HH 2 4 豎穴住居跡	73
(8)	HH 2 5 豎穴住居跡	74
(9)	HH 2 6 豎穴住居跡	75
(10)	HH 2 7 豎穴住居跡	76
2	土坑跡	77
(1)	HK 0 2 土坑跡	77

(2) HK 0 3 土坑跡	77
(3) HK 0 4 土坑跡	78
(4) HK 0 5 土坑跡	82
(5) HK 0 6 土坑跡	83
(6) HK 0 7 土坑跡	83
(7) HK 0 8 土坑跡	84
(8) HK 0 9 土坑跡	85
(9) HK 1 1 土坑跡	85
(10) HK 1 2 土坑跡	85
(11) HK 1 3 土坑跡	85
(12) HK 1 4 土坑跡	86
(13) HK 1 5 土坑跡	86
(14) HK 1 8 土坑跡	86
3 東地区遺構外出土遺物	86
第V章 まとめ	89
第1節 中 世	89
1 建物跡	89
2 空堀跡	90
3 切 岸	90
4 陶磁器	90
5 銭貨	91
6 遺構の年代	91
第2節 古 代	93
1 遺 構	93
(1) 竪穴住居跡について	93
(2) 土坑跡について	95
2 動物遺存体・植物遺存体	96
(1) 動物遺存体について	96
(2) 植物遺存体について	100
3 土器群の分類と編年について	101
(1) 器形分類	101
(2) 土器群の類型化について	103
(3) 土器群の編年的位置づけについて	105
分析同定結果	113
1 磯鷄館山遺跡土坑内検出種子の同定	113
2 磯鷄館山遺跡出土鉄器の金属学的解析	116
3 磯鷄館山遺跡出土砂鉄の成分分析	118
報告書抄録	119

## 挿 図 目 次

第1図	MB 0 1 建物跡	11
第2図	MB 0 2 - A、B 建物跡	12
第3図	MB 0 3 - A 建物跡	15
第4図	MB 0 3 - B、C 建物跡	16
第5図	MB 0 4 建物跡	17
第6図	MB 0 5 建物跡	21
第7図	MB 0 6 建物跡	21
第8図	MB 0 7 建物跡	22
第9図	MB 0 8 建物跡	38
第10図	中世陶磁器集成図	92
第11図	古代集落遺構編遷図	97
第12図	土器分類図	102
第13図	土器集成図(1)	110
第14図	土器集成図(2)	111
第15図	土器集成図(3)	112

## 付 表 目 次

第1表	城館主体部出土銭貨の銭種、枚数	31
第2表	HK 0 3 土坑跡出土動物遺存体一覧表	78
第3表	HK 0 4 土坑跡層位関係表	79
第4表	HK 0 4 土坑跡出土動物遺存体一覧表	80
第5表	HK 0 7 土坑跡出土動物遺存体一覧表	84



# 第I章 調査の経過

## 1 調査に至る経過

磯鷄館山遺跡は、地元の人々から「館山」と呼ばれて親しまれ、中腹に祠が祀られたりしていたが、城館遺跡であることを示す古文献や調査記録はなかった。

宮古市教育委員会では、昭和58年岩手県教育委員会文化課文化財主査と共に現地踏査を行った結果、腰郭などが確認され、「八木沢地区の館跡と関連を有する城館遺跡」という所見を得た。これを受けて、遺跡分布調査報告書に城館遺跡として記載された(遺跡コードLG34-2155)。

しかし同年本遺跡は、宮古地区土地開発公社による湾岸埋め立て事業の土砂採取用地となることが決定された。その後開発公社と協議を行い、記録保存を目的とした緊急調査を実施するに至った。

## 2 調査要旨

開発主体者	宮古地区土地開発公社
遺跡名	磯鷄館山遺跡 <sup>すけいたてやま</sup>
遺跡所在地	宮古市大字磯鷄第8地割字中谷地 " 第11地割字岸ノ前
調査期間	野外調査 昭和59年9月18日～昭和62年1月10日
調査対象面積	88,000㎡
検出遺構	平安時代 竪穴住居跡 27棟、土坑跡 18基、道状遺構等 中世 掘立柱建物跡 11棟、空掘跡 1条、土橋跡 1基、 耕作痕 1、井戸跡 1基
出土遺物	須恵器坏、同甕、同長頸瓶、土師器坏、同甕、あかやき土器坏、刀子等の鉄器類、炉壁、フイゴ羽口、鉄滓、銭貨、中国産青磁、渥美、常滑、瀬戸灰釉陶器、肥前染付磁器、刀、狩股、紡垂車、穂摘具、鍍金具小札

## 3 調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査委託者	宮古地区土地開発公社
調査主体	野口 健造 宮古市教育委員会教育長(昭和59年12月まで) 小野寺 聡 " (昭和63年12月まで)
調査総括	藤田 利美 宮古市教育委員会社会教育課課長(昭和60年3月まで) 北山 浩 "
事務担当	佐々木孝夫 宮古市教育委員会社会教育課係長
調査員	武田 将男 宮古市教育委員会社会教育課主事 高橋憲太郎 " 鎌田 祐二 "

調査の実施にあたり、次の各位から多大な御協力をいただいた。記して感謝申しあげる(敬称略)

〈発掘調査〉 佐々木朋子、岩船操、成ヶ澤英一郎、大上政信、中村仁司、鈴木孝行、佐々木千加子、  
齊藤久子、吉田昭、古館友三、刈屋昭三、金森三郎、木村秀男、北村忠治、船越久五  
郎、清水一、三浦貴志、澤田政行、前川友宏、石引克己、山内忠雄、伊藤禮一、乙戸  
武男、永井義雄、小堀内八蔵、大久保三郎、中村福右ヱ門、小成裕信、山崎林之、金  
沢マサ子、金沢ミヤ、伊藤富夫、川戸博、阿部豊、佐伯裕則、佐々木博之、小笠原義  
子、佐々木順子、田崎昭吾、武田末人、佐々木茂、山本寛、大棒一枝、中居磯雄、北  
村昭一、森田隆、関川興治、大森洋、石館満也、佐々木正、佐々木重幸、鈴木善秋、  
瀬浪正昭、山口勉、鈴木勝好、加藤孝兵、上野昇、坂本卓己、吉田稔、杉田功、杉田  
克、信夫甚吉

〈整理作業〉 佐々木ヨシ子、味噌作宜子、田中初子、大棒一枝、畠中育子

出土遺物の保存処理、分析等については次の機関に委託した。

- ・鉄製品保存処理 新日本製鐵株式会社釜石製鐵所 釜石文化財保存処理センター
- ・砂鉄の成分分析 " 釜石分析センター
- ・種子の同定 パリノ・サーヴェイ株式会社
- ・鉄器の金属学的解析 岩手県立博物館



## 第II章 遺跡をとりまく環境

宮古市は岩手県沿岸のほぼ中央に位置し、海岸線は宮古市を境として大きく景観を異にしている。北には海岸段丘の発達した隆起性の海岸線が連なり、かなり険しい表情を見せる。南はリアス式海岸となり、沈降性の海岸が続いて大小の湾を形成している。また、変化に富んだ景色を見せているだけでなく貝塚の多いことでも知られている。

太平洋に突き出している重茂半島は本州最東端に位置し、西側に宮古湾を形成している。重茂半島は大部分が、海拔731mの十二神山の山塊に占められており、半島の遺跡は縁辺部に形成された丘陵地に集中している。

西からは早地峰山を頂点とする北上山地の山々が延々と海岸まで迫り、黒森<sup>くろもり</sup>山地、花輪<sup>はなわ</sup>山地となり、さらに市街地を囲む丘陵地を形成する。丘陵地は北から小本<sup>おもと</sup>丘陵、千徳<sup>せんとく</sup>丘陵、八木沢<sup>やまざわ</sup>丘陵、豊間<sup>とよま</sup>根<sup>ね</sup>丘陵と連なる。

これらの山地、丘陵を開切しながら流下し、宮古湾に注ぐ大小の河川があり、東流する閉伊川と北流する津軽石川<sup>つがるいし</sup>が代表的な河川である。現在の市街地は閉伊川の沖積平野に形成されており、宮古市で確認されている400余りの遺跡は、これらの丘陵部と河川の流域に分布している。また市内の城館遺跡は大部分が、閉伊川、津軽石川の流域と宮古湾岸に分布している。

これまでの発掘調査の成果と、関連する文献(註1)を参考としながら市内の古代から中世の遺跡を概観してみたい。

宮古市の城館遺跡は、鎌倉時代末期に当地方に移り住んだといわれる豪族閉伊氏と深く関わりを持つものがほとんどである。閉伊氏はその勢力を伸ばしていくなかで、14世紀初めに閉伊川を境にして河北閉伊氏と河南閉伊氏に分裂している。市内の城館はこのいずれかの系統に属している。

閉伊川流域の代表的な城館遺跡は、千徳丘陵に位置する千徳城遺跡群である。閉伊川の北岸に位置する河北閉伊氏の本城で、城主は仙徳氏<sup>せんとく</sup>である。千徳城は14世紀の築城といわれ、中世の城の体裁を備えた市内で最大規模の城館遺跡である。遺跡群は千徳城、堀合館、千徳古城から構成されている。

昭和54年には現在西ヶ丘団地となっている地域の調査が行われ、中世の鉄製炉などが検出されている(註2)。平成2年の千徳城遺跡群西端部の調査では、堀跡、道路状遺構などが検出されている(註3)。また昭和62年の堀合館の調査では段状遺構が検出されている(註4)。

河北閉伊氏の城館は閉伊川河口に向かって笠間館、黒田館と続き、宮古湾を臨む鯨ヶ崎館に至る。鯨ヶ崎館の北に位置する熊野町遺跡では、昭和63年の調査で16世紀後半の竪穴住居跡、舶載青磁、天目茶碗、鉄砲玉などが出土している。北方を見張る番所の役目を持つ、鯨ヶ崎館に伴った遺構と想定されている(註5)。

閉伊川に北から流れ込む支流の流域にも河北閉伊氏系統の城館跡がある。近内川<sup>ちかない</sup>の流域には近内館があり、館主は近内氏である。山口川には館主が小笠原氏の山口館がある。

城館跡の分布する丘陵地は古代の集落跡などの分布域でもあり、平成5年には近内館と谷一つを隔てた尾根部分の調査が行われ、平安時代の集落跡が検出されている。

閉伊川を西に溯っていくと北岸に根市館<sup>ねいち</sup>がある。閉伊氏が宮古地方に移り住んだ最初の居館といわれており、その際閉伊氏が本格的な山城を築いたのが根城である。閉伊川南岸の急峻な地形を利用し

て築いたもので、「無双の要塞」といわれたという。南北朝時代初期の築城といわれている。

閉伊氏が根城から移った城が田鎖館である。閉伊川と長沢川の合流点を望む地点にあり、河南閉伊氏の本城である。田鎖館を所有し、閉伊氏の牧場経営に深く関わった館といわれる。田鎖館から長沢川を遡っていくと、花輪館、長沢館と続く。いずれも河南閉伊氏の系統に連なる館である。

田鎖館の対岸には、出雲地方から移り住んだ白根氏が築いたという松山館があり、南岸を遡ると鱒沢館、折壁館と続く。折壁館の館主は、伊豆から移ってきた伊藤氏と伝えられている。

花輪館のすぐ南の尾根に位置する鰐沢遺跡では平成2年に調査が行われ、鉄製の馬具を伴った奈良～平安時代の集落跡が見つまっている(註6)。

津軽石川流域では、河北閉伊氏の系統をひく津軽石氏の居城である沼里館、弘川館などが代表的な館である。対岸の赤前館は閉伊氏から室町初期に分立した赤前氏の居館といわれる。赤前氏も津軽石川の河川敷を利用した牧場、藤畑牧を所有し牧場経営にあたったという。

津軽石川流域にもやはり古代遺跡が広く分布し、平成2年の弘川遺跡の調査では、奈良時代の竪穴住居跡、中世の陶器片が出土している(註7)。また昭和54年、57年の赤前遺跡群の調査では、羽口や鉄滓が伴った平安時代の竪穴住居の他に天目茶碗などが出土している(註8)。

海を展望する位置にある館も確認されている。重茂半島の東岸で太平洋を臨む重茂館、宮古湾の湾奥東岸に位置する金浜館である。重茂館の館主は、やはり閉伊氏の流れをくむ重茂氏といわれる。金浜館は昭和55年に調査が実施され、空堀跡、堀立柱建物跡が確認され、天目茶碗、青磁輪花皿などが出土した(註9)。

磯鷄館山遺跡は、八木沢川の沖積平野に島状に張り出した八木沢丘陵の末端部に位置し、閉伊川河口から南に2 km、宮古湾東岸から約500mの位置にある。周囲三方は標高3～6 mの低湿平野に囲まれており、主郭最上部(標高53m)からは、八木沢地区、磯鷄地区、そして宮古湾の湾口部から中ほどまで見渡すことができる。

遺跡の周辺には縄文時代から中世にかけての遺跡が分布している。南西の八木沢地区には、八木沢川をはさんで八木沢新館と八木沢古館が向かい合っている。八木沢氏については新旧の八木沢氏があり、新八木沢氏が一戸系千徳氏の系統であったということ以外はわかっていない。『東奥一戸系譜略』には、「元の館は湯舟ヶ沢の上にあり、のち嶋田の前の山に移って、今でもここを新館と云う」とあり、また新館の館崎八幡には応永八年(1401年)の棟札があり、「弥木沢氏檀那たる由書きたり」としている。一戸系八木沢氏が八木沢に定着するのは16世紀頃と考えられており、応永八年の棟札については、これに先行する前期弥八木沢氏に由来するものとみられ、これが八木沢新館・古館を築いたものと考えられている(註1)。前述したように磯鷄館山遺跡については文献資料もなく、踏査によって確認された館跡であるが、その際に八木沢館との関連が推測されている。なお、明治8年の磯鷄村地割分繪図には本遺跡の部分に「館山」の名が記されている。(photo. 284)

八木沢丘陵にも、磯鷄館山遺跡をはじめ古代の遺跡が分布している。昭和59年の島田遺跡の調査では、鍛冶炉を伴った平安時代の竪穴住居跡が検出され、(註10)平成2年の仏沢遺跡の調査でもやはり製鉄関連の遺構を伴った平安時代の集落跡が確認されている。また昭和62年の上村貝塚の調査では、縄文、弥生時代の遺構の他に奈良～平安時代の竪穴住居跡が検出されている(註11)。

平成元年の磯鷄館山遺跡の西部緩斜面での調査(第2次調査)では、羽口片などを伴った平安時代の竪穴住居跡1棟が検出されたことが報告されている(註12)。

磯鷄館山遺跡は、沖積平野に張り出した島状の丘陵という自然地形を巧みに生かした城館遺跡である。遺跡の周囲三方はかつての低湿地に囲まれ、城館主体部は急峻な斜面によって守られている。南には八木沢、高浜に通じる尾根が連なり、山中への往路として好地形である。本遺跡のすぐ南の丘陵上にも平場の作り出しが見られ、遺跡の範囲にはこの地区も含まれる。主要部分は、丘陵最上部、西に開く馬蹄形の尾根およびこれに囲まれる洞状の地形を生かして作り出されている。

註1 田村 忠博：1986『古城物語』文化印刷 文献に関する記述は本書に基づいたものである。

2 宮古市教委：1980『宮古市千徳遺跡発掘調査概報』

3 宮古市教委：1991『青猿Ⅰ遺跡・千徳城遺跡群』 宮古市埋蔵文化財調査報告書27

4 宮古市教委：1988『千徳城遺跡群（堀合館）』 " 14

5 宮古市教委：1990『熊野町遺跡』 " 26

6 宮古市教委：1992『鯉沢遺跡』 " 34

7 宮古市教委：1991『弘川Ⅰ遺跡』 " 29

8 宮古市教委：1984『赤前遺跡群』 " 5

9 宮古市教委：1985『金浜館』 " 7

10 上野 猛：1986『中谷地・島田遺跡報告書』 宮古市教育委員会

11 小田野・高橋：1990『上村貝塚発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財センター 第158集

12 宮古市教委：1990『磯鷄館山遺跡』(第2次調査報告書) 宮古市埋蔵文化財調査報告書24

## 第Ⅲ章 中世の遺構と遺物

発掘調査によって、縄文時代から古代、中世、近世にいたる多数の遺物が出土し、また平安時代の集落跡および中世の建物跡、空堀跡など各種の遺構の存在が確認された。平安時代の遺構は、遺跡西半部と東端部に見られ、中世の遺構は遺跡のほぼ中央部および南端部のF地区に検出されている。(第6図)

中世の遺構は、丘陵頂部の三箇所(三箇所)の平場に検出された「建物跡」、そしてこれらを取り囲むように廻る「空堀跡」、さらにこの外周に見られる「切岸」によって構成されている。

ここでは検出された中世遺構について、調査地区の北西部から順次南西部、北東部にかけて地区ごとに記述する。遺構に伴って出土した遺物についてはその概略を記し、詳細は第2節で述べることとする。なおF地区の中世遺構および遺物については第3節周辺地区で記述する。

### 第1節 遺 構

中世の遺構は丘陵頂部を中心に東西170m、北南220mの範囲に見られる。縄張は、外周部に切岸、その内側に空堀、これに取り囲まれた頂部平場には建物、そして中央部の緩斜面部分という構成になっている。(第7図)

各地区の名称は、中央の緩斜面部分を中央地区、頂部平場をY1、Y2、Y3地区、外周部を西からK1～K12地区とした。空堀跡については、北西部、南西部など部分の方位を付して地区名とした。

#### (1) 空堀跡北西部(第8～12図、photo. 20～27)

調査前の状況は、Y1地区の西側を取り巻くように、幅7m前後の帯状の平場が見られた。これはY2、Y3地区の外側斜面にも続いており、調査前は帯郭としてとらえていたものである。調査の結果この部分には空堀跡が検出され、この空堀は北西の急斜面を除き主体部全体を取り囲んでいることがわかった。

空堀跡は、Y1地区の西から北北西に斜面を下り、標高40m付近からは北東に向きを変える。標高30mほどで空堀末端となり、北西斜面の谷に抜けている。空堀の深さは検出面から1.1～1.4mで、末端部に向かい徐々に浅くなる。幅は3～5.6mで斜面下方でやや広がる。北東方向へ向きを変えるあたりからは、堀の東側の堀込み肩は不明確となり、斜面がそのまま堀底に続く状態となっている。堀底面の幅は25～60cmで、横断方向ではほぼ平坦である。

堀底から堀肩に至る傾斜角度は、断面図での計測では堀外側(西側)で17°～33°となっており、Sec.6の17°を除くと30°前後の角度である。堀内側(東側)では30°～46°であるが、空堀末端に近いSec.1、3では堀肩が見られず、ここで見られる40°、46°の角度はY1地区に続く斜面の角度となっている。この他のSec.6～8では30°～41°である。堀底面は斜面に沿って傾斜しており、縦断方向の傾斜は20°前後である。

また空堀跡の西側では、堀肩から幅の狭い平坦部を経て西斜面に至る。これは空堀跡に沿って細長く続き、この地区では最も幅の広い部分で2.8mあり、斜面を下るに従って細くなっている。

空堀跡北西部ではSec. 1～9の縦断および横断面によって埋土が観察されており、各横断面相互の層位関係はこれをつなぐ縦断面で確認されている。

埋土は大別三層に分けられ、空堀埋没当初の埋土C層、埋土の主体を占めるB層、最上層のA層から成る。C層は空堀の末端部では埋土の主体を成しており、層厚も最大60cmほどになっているが(C 5～C 11層)、徐々に薄くなって空堀の屈曲部付近 (Sec. 4～6) では堆積が見られなくなる。Sec. 9の縦断面では再びC層(C 2～C 4層)が見られ、層厚50cm前後で続いている。B層は、最も厚い部分で1mほどの堆積が見られ、空堀がややくぼみとして認識される程度までこれを埋没させている。A層は堀跡の最終埋没土で厚さ30cmほどの堆積が見られ、これにより空堀はほぼ平準化されている。

## (2) 空堀跡南西部 (第13～17図、photo. 28～37)

調査前は、K 4地区北東部分の平坦部は畑地として利用されており、帯郭と見られていた部分のなかでも特に幅の広いの部分で、南北12mほどの幅で平坦面が見られた。

北北西から続く空堀跡はY 1地区の南西部で大きく湾曲し、東南東に続いている。空堀の深さは、湾曲部のSec. 13付近で0.6mと浅くなり、北西部分では1.3m、東部分で1.2m前後である。堀幅は湾曲部付近で狭くなり、最も狭い部分で1.2m、そのほかの部分では4～5mである。堀底面は北西部分では明確な底面をもたず葉研状であるが、東部分では幅45cm前後の底面が見られる。

堀底から堀肩に至る傾斜角度は、断面図での計測では空堀外側で30°～48°、内側で36°～55°となっており、内側で傾斜がきつい傾向がある。空堀底面の標高は湾曲部のSec. 12付近で最も高く47.3mで、ここから北西および東方向に傾斜し、Sec. 18では42.9mとなる。

空堀の外側には平坦面が見られ、北西部分では幅2m前後であるが、東部分では5～8mと広がっている。

埋土の大別層は、空堀跡北西部の項で述べた分層に準じて層名を付してある。Sec. 10では、C層の黄褐色土が空堀の内側からの流入を示す状況で見られ、この上にB層が堆積し空堀をほぼ埋没させている。B層ではB 10層とB 4層の上面で堆積状況の変化が見られ、堆積土流入の変化もしくは人為的な関与のあった可能性が考えられる。K層は空堀外側の遺構面を形成する土層で、黄褐色土と褐色土を主体とする土層で構成され、空堀掘削時の排土層とみられる。

Sec. 11の南付近の埋土中から、北宋銭等が20枚一括出土している。出土層位はB 2層で、空堀がほぼ埋まりかけている段階の面から出土したものである。出土状況については第2節遺物の項で詳述する。

Sec. 13ではB層がⅢ a層に切られており、空堀埋没後に人為的な手が加えられたことが考えられる。Sec. 14、16、18ではB層上面で堆積状況の変化が見られる。いずれもB層が空堀内側からの流入であるのに対し、A層の堆積は外側の堀肩を埋める状態で堆積している。

Sec. 17、18では空堀外側の遺構面を形成するK層の堆積が見られる。Sec. 17では黄褐色土層のK 4、K 7、K 10層が、褐色ないし暗褐色土層の間にあり、K 1～K 3、K 5、K 6層にも黄褐色砂壤土が含まれる。Sec. 18ではK 2、K 4、K 8が黄褐色土層で、この間の褐色ないし暗褐色土層にも黄褐色砂壤土が含まれる。Sec. 17のK 4、K 10、K 11層は、それぞれSec. 18のK 4、K 8、K 9層に対応し、K層はいずれも旧表土を覆っている。これらの黄褐色土は地山の花崗岩風化土を起源とするもので、K層は空堀掘削時の排土を旧地表の斜面部分に盛った土層と考えられる。

### (3) K 1, K 2 地区 (第18～23図, photo. 38～43)

空堀跡北西部の西に位置し、空堀外周の標高35～42mの地区である。調査前の状況は、空堀跡の検出面から斜面を西へ下った部分に腰郭状の断続した緩斜面ないし平坦部が見られ、何らかの遺構が存在する可能性が考えられた。K 1 地区は空堀跡末端部の北西斜面に見られる緩斜面部分で、明確な平坦面は形成されていなかったが、自然地形とは異なる状況を示していた。K 2 地区は西に張り出した平坦部となっており、遺構の存在が考えられた。

#### 1 K 1 地区

表土を除去した面で検出作業を行ったが、遺構は確認されなかった。検出面では空堀跡の外縁部から標高36m前後の部分にかけて、黄褐色土を混ざる土層の広がりが見られた。これは空堀形成時の排土と見られるもので、これにより旧地形が変化したと考えられる。

#### 2 K 2 地区

K 1 地区の南に位置し、現況地形から遺構の存在が予想された地区である。調査の結果、空堀の西斜面を長さ14～16m、幅5mほどの範囲で削平し、掘削土を斜面下方に排土した状況が確認された。斜面の切土は、ほぼ等高線に沿って長さ14mにわたって見られ、削平面から約53°の角度で立ち上げられた急斜面は、北端で1.5m、南端で2.2m、中央部で0.8mの落差をもつ。このさらに上方の部分に削り取られた形跡が見られる( Sec. 3～5)。切土部分は斜面下方で長さ16mとなって削平面に接し、南東側は67°の角度で急に立ち上がる。

削平面にはSec. 6で見られるように20cmほどの段差があり、ここから北の部分では東側がやや低くなっており、平坦ではない。また削平面からは柱穴などの遺構は検出されていない。

埋土のA～D層はほぼ黄褐色砂壤土を主体とする土層で構成され、堆積状況は自然堆積と考えられる。斜面下方に見られるM、N層では、褐色土層の間に黄褐色土層が入り込んだ状態が見られる。これは人為的な堆積状況を示しており、掘削した切土を斜面部に排土したものと考えられる。排土は南西方向の斜面を中心に広がっていると見られる。

この遺構の状況をまとめると次のとおりになる。

- ・空堀跡の外側斜面に位置し、これとほぼ平行して切土が行われている
- ・削平面の一部に段が見られる
- ・削平面に遺構は見られない

これらの点から、削平された平坦面は建物などの施設を造るために造成されたものではなく、斜面の掘削の結果できたものであり、したがってこの斜面掘削は、切岸を造るために行われたものと考えられる。ただしこの切岸は完成されたものではなく、その機能を果たす形状を成す前に、何らかの原因で造成が行われなくなったものと推測される。つまり完成状態の切岸ではなく、造成過程の切岸遺構であるとみられるものである。

### (4) K 3 地区 (第24, 25図, photo. 44～46)

K 3 地区は、空堀跡南西部の湾曲部分の外側斜面に位置し、北西に35mほどでK 2 地区、また東方約40mでK 4 地区に至る。調査前は南西向きの緩斜面となっており、遺構の存在が予想された。

調査の結果、斜面を掘削した部分が二か所で検出され、K 2 地区と類似した遺構の在り方が見られた。北西の掘削部は南北5mの幅で斜面を切土しており、一部は南へ続いている。底面には高さ50cm

ほどの段が見られ、高さの異なる二面が遺構面となっている。埋土状況から見てこの二面には時期差は認められない。北側部分が低い面で、ここでは削平面から約 $50^{\circ}$ の角度で急斜面が立ち上がり、落差は1.8mとなっている。また底面は立ち上がり部分に向かって低くなっている。南側の面では立ち上がりの落差は50cmほどである。

東側の掘削部は等高線に平行して10.7m、北西部で斜面方向に5.9mの範囲で見られる。底面は立ち上がり部分に向かって低くなっており、 $10^{\circ}$ の角度で傾斜している。底面から約 $60^{\circ}$ の角度で急斜面が立ち上がり、そのまま空堀跡の斜面に続く。急斜面部分の落差は1.4mで、ここから約 $40^{\circ}$ の角度の斜面を4mほど上ると空堀跡に至る。埋土はほとんどが明黄褐色砂壤土で、斜面上向から流入している。

これらの遺構はSec. 1、3の断面で見える限り、切岸としてとらえることができる。しかし平面形状を見ると切岸は完結した形状を成しておらず、その機能を果たすに至っていない。掘削部の平面的な在り方から見てK2地区と同様の、造成途中の切岸遺構と考えられる。

#### (5) K4地区 (第26～28図、photo. 47～54)

K4地区はK3地区の東40mほどにあり、空堀跡がY1地区とY2地区の間で北側に入り込む部分の外側に位置する。調査前は畑として使われており、 $20 \times 30$ mほどの広がりをもつ平場であった。当初この面に遺構があるのではないかと考えられたが、表土を除去すると北西部分に黒色土が見られ、この内側に黄褐色土の落ち込みが確認された。この面では耕作時の攪乱があるのみで、他に遺構は見られなかったことから、この落ち込みを精査するに至った。

調査の結果この落ち込みは、空堀跡にほぼ平行し長さ20mにわたって緩斜面部分を掘削した切岸であることが確認された。切岸の立ち上がりは $60^{\circ}$ 前後の角度を測り、最も急な部分では $65^{\circ}$ となっている。また、高さは1.7～2.1mである。削平面はほぼ平坦であるが、立ち上がりに近い部分でやや低くなり傾斜している。これはK2、K3地区で見られた切岸と同様の状態である。

切岸の掘込面は、Sec. 1、5で見られるように最終的には現表土により切られており、切岸造成時点での状態は残されていない。ただし、切岸の立ち上がりは、Sec. 1～4のK層を切って造られている。このK層は空堀掘削時の盛土層で、K4-Sec. 1のK1層は空堀跡のMD01-Sec. 17のK10層、K4-Sec. 3のK1、K2層はMD01-Sec. 18のK8、K9層に対応する。つまり切岸は空堀造成後に造られたものであると考えらる。Sec. 6の西側に見られるK1、K2層も空堀掘削時の排土の流入したもので、これらの土層断面で見られるK層の下面が、空堀造成前の旧地形の状態を示している。

Sec. 1 Lに示すように、空堀掘削時の盛土層は現在の斜面で切られており、これは後世に手が加えられてできた部分である。また切岸の急斜面より上に見られる平坦部も後世に手が加えられてできた部分で、切岸造成時の形状を示すものではない。盛土層は旧斜面に沿って谷状の部分に排土され、切岸はこの盛土を切って造成されている。切岸の立ち上がりは、この盛土層の上面に続いていたとみられる。

Sec. 7、8に見られるK、L層は切岸造成に伴い旧表土上に排土された盛土層で、この部分で1.4mほどの盛土となっている。L層下面が切岸造成前の旧表土面で、Sec. 7部分では旧地形が谷状になっていたことがわかる。つまり切岸南西部分の削平面は切岸造成時の盛土K、L層で形成されていることになる。

Sec. 1 Lに見られるK層下面の旧表土の傾斜については、Sec. 7で見られる旧地表面の標高をSec.

1 Lにあてはめてみると、空堀跡掘削時盛土下面の旧地表の傾斜の延長線上に位置することがわかる。つまりこのSec. 1 Lの断面部分では、旧地表面が空堀跡付近からほぼ一定の傾斜で南西に下がっていたことになり、これから推定すると39.6mの等高線から下方の南西部分は、切岸造成時の盛土層で構成される面とみられる。

切岸の埋土は大別五層に分けられる。Sec. 1～4のE層は切岸埋没当初の堆積層で、一部で水成堆積の状態が見られる。D層はかなり複雑な層相を示しており人為的関与のあった堆積層と考えられ、切岸の立ち上がり部分を埋没させている。C層は面的に広がりをもつ層で、斜面方向から流入した堆積層である。

B 2層は暗褐色土で黄褐色土を含まず、他の埋土層と色調を異にする。堆積はこの面で一時安定し暗褐色土を形成したものとみられる。A層は表土下にみられる堆積層で、南西部で厚く堆積し現地形を形成している。

遺構面からは鉄製釣針および火打金が出土しており、C 1層からも鉄製釣針、A 2からは釘が出土している。

#### (6) K 5 地区 (第29～32図、photo. 55～58)

丘陵部の最も南に位置し、八木沢丘陵につながる鞍部に至る部分である。Y 2地区から南西に張り出す尾根部分で、調査前には尾根筋を通してK 4地区周辺の畑に至る路があった。尾根基部は浅く切られ、先端部斜面にも緩傾斜の部分が見られた。

調査の結果、尾根斜面の西から南にかけて通路とみられる遺構が検出された。これはK 4地区南端部の標高40mほどの地点から、ほぼ等高線に沿って尾根先端部の緩斜面部分に向かうものである。路幅は0.5～1 mほどで、斜面を削り出しその排土を下方に盛って造られている。盛土K層は黄褐色土で地山を削り出した排土で、斜面下方の遺構面を構成する。埋土は明黄褐色土、黄褐色土ないし褐色土で、地山砂粒を含んでいる。第II層は尾根頂部を除く斜面部分に見られ、遺構埋土およびK層はこの層で覆われている。I b層は東斜面の一部と先端部の緩斜面部分に見られる。

尾根基部では、K 4地区からK 6地区に至る部分で尾根筋が浅く削られており鞍部を成している。鞍部底面はSec. 7に示すように1.2mほどの幅で平坦になっている。埋土は底面を埋めるF層が黄褐色土、上半のE層は黒褐色土である。

城館の造営に際しては、そこに至る通路が必要であったと考えられる。その痕跡が調査で確認できる程度のものかどうかは別にしても、その存在は不可欠であったと考えられる。ここで検出された路については、その形成時期を裏付ける出土遺物がなく、中世に属する遺構であるか否かは不明であるが、この地区が南の丘陵につながる鞍部に至る部分であること、また他の地区にこのような遺構が検出されていないことからすると、城館造営に伴う通路の一部である可能性は否定できない。ただしY 2地区の北に土橋が位置していることから、これとは別の通路が存在していたことも考えられる。

#### (7) Y 1 地区 (第33～38図、photo. 59～64)

丘陵頂部に見られる平場のうちで最も西に位置する地区である。平場の標高は53mで、遺跡の中で最も高い部分である。西および南側は空堀に囲まれ、北東側は幅5 m前後の腰郭状の部分を経て中央地区に至る。この腰郭状の部分はY 1地区平場の北側を弧状に囲んでいる。



## 1 MX01

平場の北東部に検出され、長さ11m、幅4mの範囲で削平されている。削平面は建物跡検出面から70mほど低く、北東方向にやや傾斜している。この面では、焼土およびピットが見られた。

埋土は削平面の南西側の壁下付近にQ層が見られ、この上に埋土の主体を成す褐色土のP層が堆積し、ほぼ削平面を埋没させている。最上層は黄褐色土のO層で覆われており、各層には塊状の混入土が含まれている。これらの埋土は立地から見ても自然堆積の流入土とは考えずらく、褐色土のP層の上に地山土を主体とする黄褐色土層が見られることなどから、平場の造成時に埋められた人為的な堆積土と考えられる。したがってMX01は建物跡より古く、平場造成前の遺構とみられる。

## 2 MX02

平場北東の腰郭状の部分に検出された遺構で、長さ11m、幅2.5mほどの範囲にわたって削平され、この面に溝、土坑などが見られる。埋土は最下層に溝と土坑を埋めるB、C層が見られ、この上に埋土の主体を成す褐色ないし暗褐色土のA層が堆積する。遺構の性格は不明であるが、A層および遺構面から北宋銭、唐銭が出土している。

## 3 MB01 建物跡

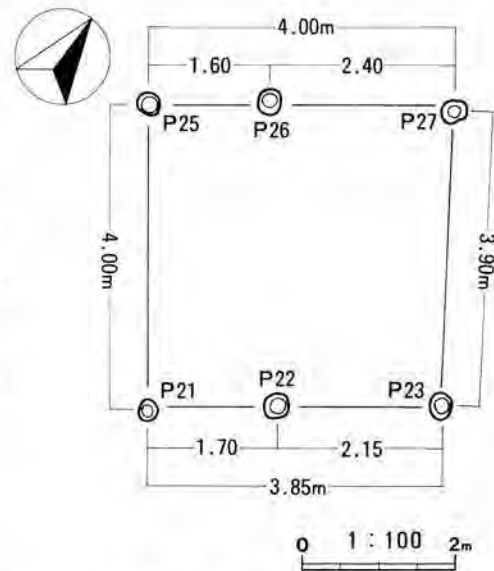
MB01 建物跡は平場の北側に検出され、P21、P23、P25、P27を隅柱にもつ建物跡である。東西桁行4.00m(13.2尺)2間、南北梁行4.00m(13.2尺)1間の方形の建物跡で、桁行軸線方向はE-34°-Nである。

桁行柱間は、北側柱(P25~P27)では西から1.60m(P25-P26)、2.40m(P26-P27)で、それぞれ5.3尺、7.9尺の柱間を示す。南側柱(P21~P23)では桁行が3.85m(12.7尺)となっており、柱間は西から1.70m(P21-P22)、2.15m(P22-P23)で、それぞれ5.6尺、7.1尺の柱間を示す。桁行での柱間は建物の東西で5尺代と7尺代に別れる。

梁行柱間は、西側柱(P21-P25)で4.00m(13.2尺)、東側柱で3.90m(12.9尺)となっている。柱穴は径30cm前後の円形で、重複は見られない。検出面からの深さは34~51cmで、P25がやや浅くその他は50cm前後である。柱穴底面のレベルは、南側柱のP21、P22、P23で標高52.25mのほぼ同一レベルを示し、北側柱では標高52.05~52.18mとなっている。柱痕はP21、P22、P23、P26で見られ、柱痕径は10~15cmである。この建物跡の北東に検出されたP24、P28は、深さ12cm前後で前述の柱穴に較べかなり浅く、柱痕も見られないことから建物跡の柱穴とは見なさなかった。

## 4 MB02 建物跡

MB01 建物跡の南西には、柱穴がほぼ3列にわたって二十穴検出されている。これらの柱穴自体には重複は見られないが、柱穴の配置からみて二棟の建物跡が存在していたと考えられる。新旧関係は明らかではないが、ここではこれらの建物跡を、MB02-A建物跡およびMB02-B建物跡として説明する。



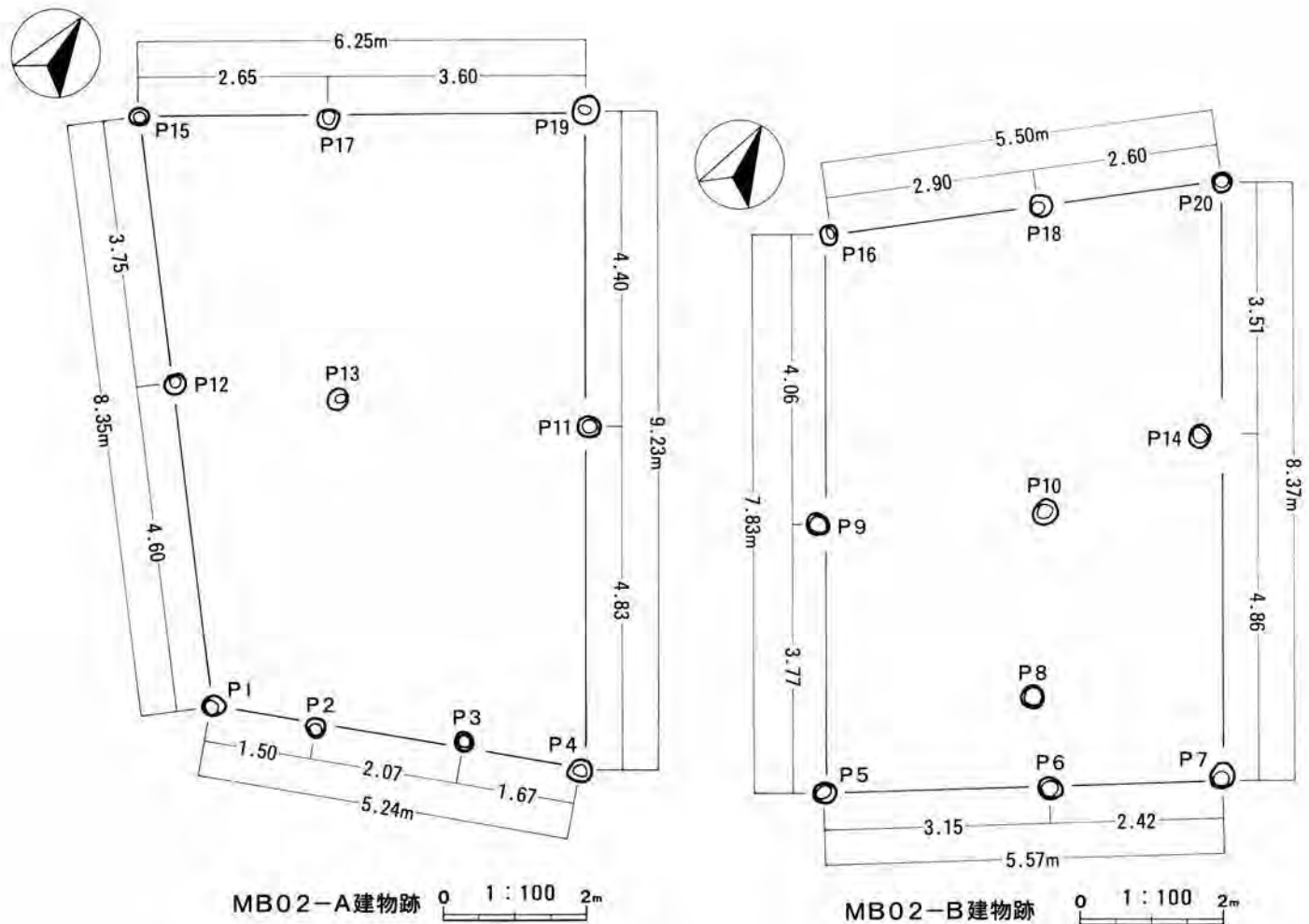
第1図 MB01建物跡

MB02-Aとした建物跡はP1、P4、P15、P19を隅柱とする南北棟である。桁行9.23m(30.5尺)、梁行6.25m(20.6尺)の規模をもち、建物軸線はN-35°-Wの方向を示す。

桁行は2間で、西側柱(P1~P15)では8.35m(27.6尺)となっている。柱間は南から4.60m(P1-P12)、3.75m(P12-P15)で、それぞれ15.2尺、12.4尺の柱間を示す。東側柱(P4~P19)では、柱間は南から4.83m(P4-P11)、4.40m(P11-P19)で、それぞれ15.9尺、14.5尺の柱間を示す。

梁行は北側柱(P15~P19)は2間で6.25m(20.6尺)あり、柱間は西から2.65m(P15-P17)、3.60m(P17-P19)で、それぞれ8.7尺、11.9尺の柱間を示す。南側柱(P1~P4)は4間で5.24m(17.3尺)となっており、柱間は西から1.50m(P1-P2)、2.07m(P2-P3)、1.67m(P3-P4)で、それぞれ5.0尺、6.8尺、5.5尺を示す。

柱穴掘方はいずれも径30~40cmのほぼ円形で、検出面からの深さは25~55cmを測る。柱穴底面の高さは、梁行の北側柱(P15~P19)で52.5m前後、中央柱列(P11~P13)で52.8~52.9m、南側柱(P1~P4)では52.9~53.1mとなっている。柱痕はP12を除くすべてに見られ、柱痕径は5~15cmである。



第2図 MB02-A、B建物跡

MB02-B建物跡はP5、P7、P16、P20を隅柱とする南北棟である。桁行2間8.37m(27.6尺)、梁行2間5.57m(18.4尺)の規模をもち、建物軸線はN-30°-Wの方向を示す。

桁行柱間は西側柱(P5~P16)で、3.77m(P5-P9)、4.06m(P9-P16)で、それぞれ12.4尺、13.4尺を示す。東側柱(P7-P20)では、柱間は4.86m(P7-P14)、3.57m(P14-P20)で、それぞれ16.0尺、11.6尺である。

梁行柱間は北側柱(P16~P20)では、西から2.90m(P16-P18)、2.60m(P18-P20)で、それぞれ9.6尺、8.6尺を示す。南側柱(P5~P7)は、西から3.15m(P5-P6)、2.42m(P6-P7)で、それぞれ10.4尺、8.0尺となっている。

柱穴の掘方は径25~40cmのほぼ円形で、検出面からの深さは22~46cmを測る。柱穴底面の高さは、北側のP14、P16、P18、P20で52.4~52.6m、P8、P10で52.9m、南側柱(P5~P7)では53.0m前後となっている。柱痕はすべての柱穴に見られ、柱痕径は8~15cmである。

P20はMX01の中に見られる柱穴である。土層断面ではこれらの時期差は確認されていないが、柱穴の深さがMX01の面から10cmほどしかなく、柱穴底面のレベルがP18と一致することなどから、この柱穴はMX01の埋土を切って掘り込まれたものとみられる。したがってMB02-B建物跡はMX01を埋め、整地した後に建てられたものと考えられる。

MB02-AおよびBの建物跡はいずれもやや不整形な南北棟で、梁行の北側柱をほぼ同一線上に置き、軸線の向きを5°変えて建て替えられている。桁行は12尺ないし15尺前後、梁行は8.0~11.9尺となっている。柱穴の切り合いはなく新旧は不明である。

遺物は建物跡検出面から、青磁、瀬戸灰釉陶器、北宋銭が出土している。

#### (8) 空堀跡南部(第39~44図、photo. 65~69)

空堀跡はY2地区を取り囲むように南に張り出し、東側で大きく湾曲して北に向かい土橋に至る。北西から堀幅5mほどで続いてきた空堀は、Y2地区周辺で堀幅を狭め、南斜面では最も狭い部分で1.4mほどの堀幅になっている。Y2地区を取り巻いて北に向かうあたりから幅は広くなり、4~5mとなる。

空堀跡断面Sec.19周辺では、K4地区の斜面によって空堀跡外側の肩が切られている。Sec.19では埋土B層はIIb層により削られており、空堀埋没後に手が増えられた状態が見られる。この部分ではY2地区から続く斜面途中から、45°ほどの角度で60cm掘り下げ空堀内側の急斜面としている。空堀底面は幅は70cmでほぼ平坦である。空堀外側では立ち上がりは見られず、底面から10°の角度で緩やかに外側に向かいK4地区の斜面に切られている。この部分では空堀跡の他の部分と異なる形状を示している。

Sec.20では堀幅3.6m、深さは堀外側の検出面から1.4mで、堀底の平坦部は見られず薬研状になっている。堀斜面の立ち上がりは内側で30°、外側は34°を測る。Sec.21では堀幅3.4m、深さは堀外側の検出面から0.95mで、堀底の平坦部は見られない。堀斜面の立ち上がりは内側で35°、外側は30°となっている。Sec.22では堀内側の立ち上がりはY2地区に至る斜面に続いており、堀の外側はK6地区北側の斜面となっている。深さは70cmと浅く、堀幅も狭くなっている。Sec.23ではY2地区の東斜面がそのまま堀底に続き、外側は約30°の角度で立ち上がる薬研状になっている。深さは1.6mで、堀幅も広がっている。

空堀跡埋土は、斜面方向からの流入による自然堆積とみられる層相を示している。C層は黄褐色土ないし明黄褐色土、B層は埋土の主体を成す層で1 m前後の層厚を示し、褐色土ないし黄褐色土の堆積層である。A層は褐色土を主体とする土層で、Sec.20、21では見られないが、他の部分では埋土最上層を成し、空堀跡をほぼ平準化している。Sec.19のA層には黄褐色土層、暗褐色土層が見られ、これらは面的に断続した層から成っており、他の埋土の層相と異なっている。

第43、44図は空堀跡埋土中に見られた焼土および炉跡である。焼土はY2地区東の空堀跡が南に向きを変える部分に検出されており、埋土B5層に相当する面に見られるものである。焼土は50×80cmほどの範囲に薄く見られ、周囲には木炭、礫が伴っている。空堀跡がまだ窪みとして残っている状態での生活痕跡である。

炉跡は空堀跡が東に張り出した部分、Sec.23の北4 mほどの地点で検出されている。炉は長さ76cm、幅20cmで南側中央に張り出しをもつ。中央に深さ16cmの凹部があり全体に鉄滓が付着しており、周囲もかなり焼けた状態が見られた。炉の南西側は幅80cmほどの範囲でやや窪んでおり、この周辺から鉄滓が出土している。この遺構は空堀跡がほぼ埋まった段階で形成されたもので、何らかの鍛冶遺構と考えられる。これらの遺構は、空堀跡埋没過程の終盤段階において、この地区で人為的関与が成されていたことを示すものである。

#### (9) K6地区 (第45、46図、photo. 70~72)

Y2地区の南に位置し、空堀跡からさらに斜面を下った帯郭状の部分である。調査の結果、K5地区の尾根基部から空堀跡に沿ってK7地区に至る切岸が検出された。削平面は幅3~5 mで、K6地区の中央部で広く7 mとなっている。この面から空堀跡検出面までの標高差は5~6 mである。切岸は削平面から57°前後の急角度で立ち上がり、空堀跡下方の斜面に続く。この立ち上がりの角度はこの地区内ではほぼ一定している。削平面にはSec.8の西に見られるような溝状の落ち込みが検出されている。これは切岸と直行する方向に見られ、幅1.8m、深さ30cmで、底面は平坦である。この面に溝の必要性は考えにくく、切岸の造成作業段階の何らかの痕跡と推測される。

切岸下方の南向き斜面には旧表土L層の上に、褐色土と黄褐色土から成るK層が見られる。黄褐色土層は地山土を主体とするもので、空堀、切岸等の造成により掘り出された土砂が斜面に排土されて形成された堆積層と考えらる。層厚は厚い部分で1 mを越し、K6地区南斜面のかなり広い範囲にわたって見られる。

切岸の埋土は暗褐色土のA層と黄褐色土を主体とするB層に大別され、いずれも斜面方向からの流入により形成されている。

#### (10) Y2地区 (第47~50図、photo. 73~79)

丘陵頂部に見られる平場のうちで最も南に位置する地区で、Y1地区の南南東60m、Y3地区の南90mの位置関係にある。平場の規模は南北20m、東西23mで東に大きく張り出しており、北側を除く三方を空堀と切岸で囲まれている。標高は50m前後で、空堀跡の面からは約6 m、切岸からは11mほどの標高差をもつ。ここでは建物跡、土坑、弧状の溝跡が検出されている。

##### 1 SX01~04溝跡

平場の南縁に沿って弧状の溝跡が4基検出されている。SX01溝跡は弧状の東西が2.6m、南北は

0.95mを測り、弧の現存部延長は3mである。溝の幅は50cm、深さは10cmほどで浅く、この円弧から推定される円の直径は約2.7mである。弧状の溝に囲まれた部分およびその周辺からは、これに伴う遺構、遺物は見られなかった。SX02、03、04についても同様で、現存部の弧状の東西がそれぞれ2.4m、2.2m、1.7m、南北は50cm、65cm、50cmとなっており、推定される円の直径はSX01よりもやや大きく3m前後とみられる。

第40図のSec. 3、4にSX02、03溝跡の土層断面を示す。N1層上面からは小札及び北宋銭が出土しており、この面が平場形成時の遺構面と考えられる。これらの溝跡はN層を埋土としていることから平場形成以前の遺構とみられる。溝の形状からは、周溝とする可能性も考えられるが、その性格を裏付ける判断材料は、この調査では見い出されていない。

## 2 MK01土坑

長さ2m、幅1.25mの東西に長軸をもつ長方形の土坑で、深さは30cm、底面は平坦で壁はやや斜めに立ち上がる。埋土上位のC層は暗褐色土、下位のD層は褐色土で、いずれも面的に連続しない凹凸のある堆積状況を示している。遺物は出土していない。

## 3 MK02土坑

MK01土坑の東に検出されたほぼ方形の土坑である。東西2.2m、南北1.9m、深さは35~40cmで底面は平坦で、壁は南側を除き急角度に立ち上がる。埋土は褐色土ないし暗褐色土のA層と、褐色土、暗褐色土および黒褐色土の堆積を見るB層に大別され、B4層以外は面的な広がりをもたない部分的な堆積層である。A2層からは「開元通寶」が出土している。

## 4 MK03土坑

Y2地区平場の北端に検出された南北方向に長軸をもつ長方形の土坑である。南北3.1m、東西1.7m、深さは40cmで、底面は平坦で、壁は北側を除き急に立ち上がる。埋土は褐色土ないし暗褐色土で構成され、各層の上面は凹凸が見られる。埋土中からの出土遺物はない。

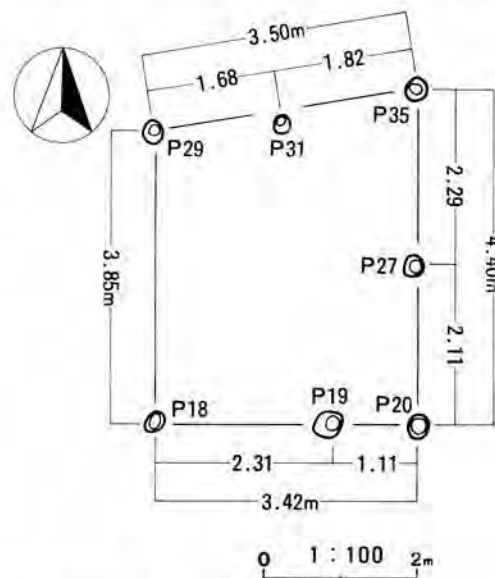
これらの土坑は、方形ないし長方形の平面形状をもち、軸線は南北あるいは東西方向に向いている。深さは30~40cmで、埋土は人為的な堆積状況を示している。遺構の性格については、これを確定する資料は見い出されなかった。また建物跡柱穴P3にMK02が切られていることから、建物跡より古いことがわかる。

## 5 MB03建物跡

平場北半部の柱穴で構成される建物跡をMB03とした。柱穴は一部で切り合いが見られ、建物跡の重複がある。柱穴の配置、切り合いから三棟の建物跡の存在が考えられ、これらの建物跡をMB03-A、MB03-B、MB03-C建物跡とした。建物跡BとCでは柱穴の切り合いからCが新、Bが旧である。これらと建物跡Aとの関係は不明である。

### ・MB03-A建物跡

P18、P20、P29、P35を隅柱とする南北棟で、桁行4.40m(14.5尺)、梁行3.42m(11.3尺)の規模をもち、建物軸線はN-1°-Wの方向を示す。



第3図 MB03-A建物跡

桁行は西側柱(P18-P29)で1間3.85m(12.7尺)、東側柱(P20~P35)で2間4.40m(14.5尺)、柱間は南から2.11m(P20-P27)、2.29m(P27-P35)で、それぞれ6.9尺、7.6尺となっている。

梁行は2間で、北側柱(P29~P35)が3.50m(11.6尺)、柱間は西から1.68m(P29-P31)、1.82m(P31-P35)で、それぞれ5.6尺、6.0尺を示す。南側柱(P18~P20)では梁行3.42m(11.3尺)で、柱間は西から2.31m(P18-P19)、1.11m(P19-P20)で、それぞれ7.6尺、3.7尺である。

柱穴掘方はいずれも径25~40cmのほぼ円形で、検出面からの深さは22~50cmを測り、すべてに柱痕が見られる。

・MB03-B建物跡

P23、P24、P34、P40、P39、P38、P33で構成される東西棟建物跡で、桁行4.66m(15.4尺)、梁行4.16m(13.7尺)の規模をもち、建物軸線はE-5°-Nの方向を示す。

桁行柱間は、北側柱(P38~P40)で西から1.33m(P38-P39)、3.33m(P39-P40)で、それぞれ4.4尺、11.0尺となっている。

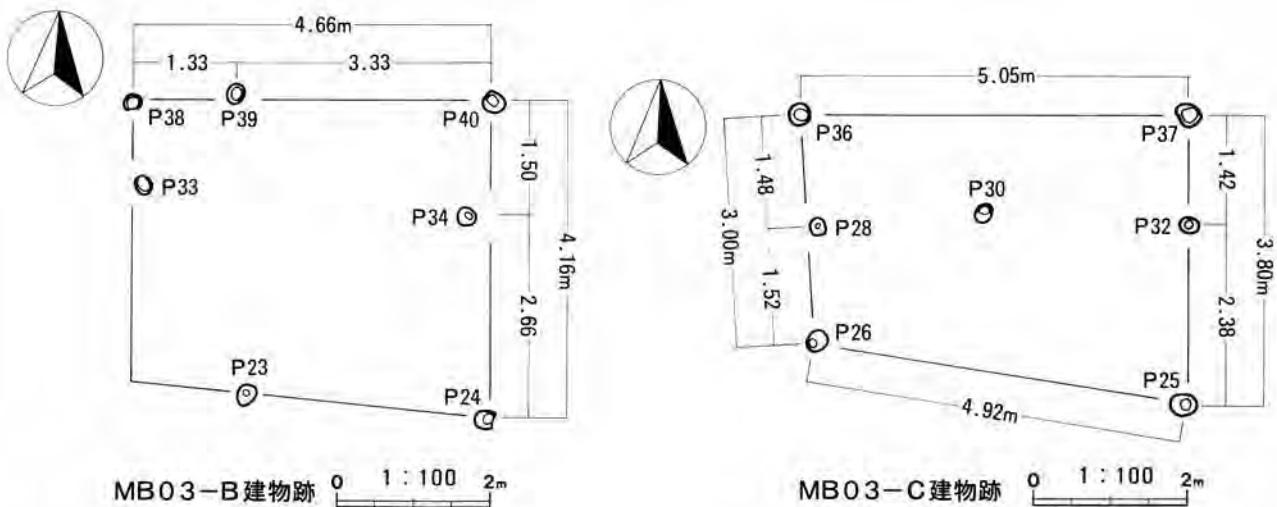
梁行柱間は南から2.66m(P24-P34)、1.50m(P34-P40)で、それぞれ8.8尺、4.9尺を示す。柱穴掘方はいずれも径14~18cmのほぼ円形で、検出面からの深さは24~35cmを測り、P34、P38を除く柱穴に柱痕が見られる。

・MB03-C建物跡

P25、P26、P36、P37を隅柱とする東西棟で、桁行5.05m(16.7尺)、梁行3.80m(12.5尺)の規模をもち、建物軸線はE-3°-Nの方向を示す。

桁行は北側柱(P36-P37)で1間5.05m(16.7尺)、南側柱(P25-P26)で1間4.92m(16.2尺)である。梁行は2間で、西側柱(P26-P36)が3.00m(9.9尺)、柱間は南から1.52m(P26-P28)、1.48m(P28-P36)で、それぞれ5.0尺、4.9尺を示す。東側柱(P25-P37)では梁行3.80m(12.5尺)で、柱間は南から2.38m(P25-P32)、1.42m(P32-P37)で、それぞれ7.8尺、4.7尺である。

柱穴掘方はいずれも径25~35cmのほぼ円形で、検出面からの深さは22~57cmを測り、すべてに柱痕が見られる。



第4図 MB03-B、C建物跡

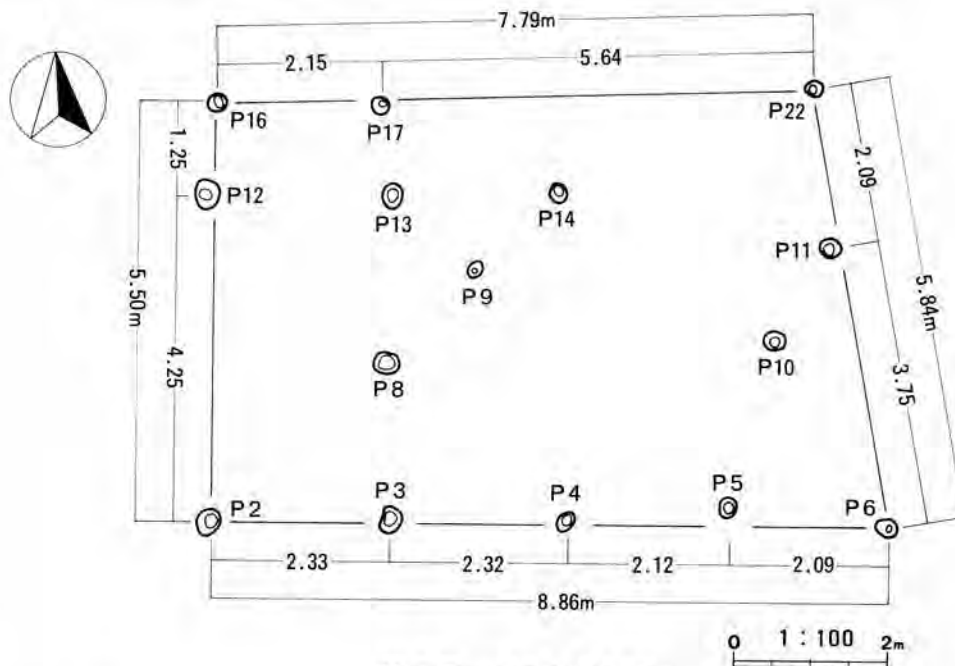
## 6 MB04建物跡

平場の南半部に検出された柱穴で構成される建物跡で、柱穴の切り合いはなく単期の建物跡である。これはP2、P6、P16、P22を隅柱とする東西棟で、桁行8.86m(29.2尺)、梁行5.50m(18.1尺)の規模をもち、建物軸線はE-4°-Nの方向を示す。

桁行は北側柱(P16~P22)で2間7.79m(25.7尺)、柱間は西から2.15m(P16-P17)、5.64m(P17-P22)で、それぞれ7.1尺、18.6尺を示す。南側柱(P5~P6)では4間8.86m(29.2尺)で、柱間は西から2.33m(P2-P3)、2.32m(P3-P4)、2.12m(P4-P5)、2.09m(P5-P6)で、それぞれ7.7尺、7.6尺、7.0尺、6.9尺を示す。

梁行は2間で、西側柱(P2~P16)が5.50m(18.1尺)、柱間は南から4.25m(P2-P12)、1.25m(P12-P16)で、それぞれ14.0尺、4.1尺を示す。東側柱(P6~P22)では梁行5.84m(19.3尺)で、柱間は南から3.75m(P6-P11)、2.09m(P11-P22)で、それぞれ12.4尺、6.9尺である。

柱穴掘方はいずれも径20~40cmのほぼ円形で、検出面からの深さは12~60cmを測る。P3、P9、P22を除く柱穴に柱痕が見られる。



第5図 MB04建物跡

## 7 柱 列

建物跡から東に7mほどの張り出し部に見られる柱列で、P41、P42、P43で構成される。柱列の方向は北西でN-27°-Wとなっている。柱列は長さ3.59m(11.8尺)、柱間は南から1.91m(6.3尺)、1.68m(5.5尺)である。柱穴掘方は径22~30cmのほぼ円形で、検出面からの深さは12~21cmで浅く、柱痕は見られない。

### (II) K7地区 (第51~54図、photo. 80~84)

K7地区は、Y2地区から東に張り出す尾根の周辺地区で、K6地区から続く切岸が検出されている。切岸は東向きに30mほど張り出す尾根の周囲を取り囲むように配され、尾根の南側から先端部を周り北側へ続いている。この尾根は南北基底幅15~17m、尾根上は2.7~5.8mの幅でやや東に傾斜す

る。切岸削平面からの比高は先端部で3.8m、基部で6.8mとなっている。尾根斜面の平均斜度は、南北斜面で41°前後、先端部で29°～37°である。

Sec. 1 では、ほぼ水平な削平面から67°の角度で切岸を立ち上げ、尾根斜面に至っている。尾根の斜度は42°、尾根上までの比高は6.8mである。切岸の南側斜面では、黒褐色の旧表土H層の上に地山土を含むK層が堆積しており、切岸掘削時の土砂を斜面に排土したものと考えられる。切岸埋土は黄褐色土層の一部に褐色土層を含むB層が主体を占め、暗褐色土のA層が平坦面付近に堆積している。

Sec. 2 でも同様な形状が見られ、切岸立ち上げの角度は57°、削平面は切岸に向かってやや傾斜している。尾根の斜面角度は42°、尾根上までの比高は5.6mである。埋土状況もSec. 1 と同様である。

Sec. 3 では削平面は切岸に向かってやや傾斜しており、切岸の立ち上げ角度は57°である。立ち上がり部分から上はやや傾斜を変え、削り取られたような状態になっている。埋土状況は褐色土層を間に含んだ黄褐色土を主体としたB層で切岸がほぼ埋没しており、この上に暗褐色土のA層が見られる。

Sec. 4～9 は尾根先端部の切岸の状況を示している。ここでは切岸の立ち上がりの下の部分に溝状の凹部が見られる。Sec. 4、5 では立ち上がりの50cmほど手前から斜めに掘り下げられており、Sec. 5～9 では深さ10～20cmの溝となっている。切岸の立ち上がりは45°～72°の角度で一定していない。埋土は前述の部分とほぼ同様であるが、Sec. 5 では褐色土層がB層の主体を成している。

切岸削平面の南中央部に溝状の落ち込みMX 0 4 が検出されている。深さ25cm、幅は2.2mで、切岸に直行する方向に伸びている。底面は南に向かって徐々に浅くなり削平面につながる。この落ち込みのほとんどを埋めているJ 2層には、大量の礫が含まれている。同様な遺構はここから24mほど西の地点にも見られるが、このような礫は検出されていない。

## (12) K 7 V 地区 (第55図、photo. 85～87)

K 7 地区の北東に位置する谷部分で、ここには四段に分かれた緩斜面が見られた。また谷の上には神社が祀られており、谷中央部にはこれに至る路があった。

調査の結果、これらの面には遺構は見られなかった。緩斜面は、暗褐色土ないし黒褐色土から成る第Ⅱ層により形成されており、斜面下方に盛土をして平坦化している。これらの層からは近世に属する遺物が出土しており、緩斜面は近世以降の形成と考えられる。

K 7 V 地区の上にあった神社には、鞘堂の中に三つの祠があり、中央には八幡大菩薩、左右にはそれぞれ志和稲荷、牛頭天皇が祀られていた。左右の祠には大正、昭和時代の棟札があり、中央の祠には、八幡大菩薩堂宇建立等の棟札が6枚見られた。これらの中で最も古い棟札は明和4年(1767年)のもので、この祠が18世紀中頃には祀られていたことを示している。

## (13) 空堀跡東部・土橋 (第56、57図、photo. 88～91)

空堀跡はY 2 地区を取り囲んで大きく湾曲し、北東に向かい土橋に至る。土橋はY 2 地区から北東に伸びる空堀跡直状部分の中央に設けられ、K 7 V 地区と中央地区を結ぶ線上に位置する。現況の地形からはここに土橋があることは予測されなかった。

土橋は地山を掘り残して形成されたもので、橋の幅は検出面で2.5m、堀底での基底幅が5.5mである。土橋両側での堀幅は4.5mで、南側の堀底は土橋わきでやや深くなり検出面からの深さは1.4mを測り、堀底から43°の角度で立ち上がり土橋南肩に至る。土橋北側では堀底は検出面から1.7mの深さ



をもち、48°の角度で立ち上がり土橋北肩に至る。土橋両脇での堀底の高さは異なり、北側が50cmほど低くなっている。土橋付近での平坦面の幅は8m足らずで、西側は高さ2mほどのやや急な斜面になっており、東側も5mほどで斜面に至る。

土橋両脇での空堀埋土は、南側では埋土上位にシルト質の褐色土ないし黒褐色土のA層が見られ、下半には礫を含むB3、B5層、堀底には黄褐色土のB7、B8層が堆積している。北側では埋土上位に南側と同様にシルト質の褐色土ないし黒褐色土のA層が見られ、A5層には礫および木炭が含まれる。この下にはシルト質の暗褐色土ないし褐色土の土層(B9、B11、B12層)があり、この間に黄褐色土のB10層を挟んでいる。堀底には南側と同様に黄褐色土層が堆積している。南北の堆積状況は、A層および堀底の埋没当初の土層については対応関係が見られる。

Sec.25は土橋から北東20mほどの位置の空堀跡の埋土状況である。A層は土橋付近で見られた埋土上位のA層に類似し、B層は褐色砂壤土となっている。堀幅は2.7m、深さは1.2mで堀底面は30cmほどの幅で平坦である。堀底から堀肩に至る角度は堀外側で31°、堀内側で48°となっている。堀の外側では4mほどの平坦面を経て斜面となっている。

#### (14) 空堀跡北部 (第58~60図、photo. 92~99)

空堀跡は土橋の北東25mほどの部分から向きを変え、Y3地区の北東部に至る。ここでは空堀跡は溝状になり一部で途切れている。Y3地区の北側では再び空堀跡の形状に復し、北西側の急斜面に抜けその末端となる。

空堀跡はSec.26では幅2.2m、深さは40cmほどになっており、この部分ではすでに溝状の形態に変化している。Sec.27では幅1.5m、深さ40cm、Sec.28では幅70cm、深さ10cmで、徐々に幅が狭くなり浅くなっていく。埋土も褐色土が主体となり、従来の空堀跡の埋土と異なっている。Sec.28から2mほど北西で、この溝も見られなくなり、Sec.29に示すようにY3地区の斜面はなだらかに平坦面に続いている。浅い溝はこの間9.5mほど途切れている。

Sec.30では浅い窪みとして溝が見られ、ここから60cmほど下がって平坦面となっている。平坦面の北東部は、旧斜面への盛土とみられる暗褐色土および黄褐色土のK層で構成されている。この面には褐色土のC層が堆積し、その後斜面と溝部分にB層が入り、これらの層をA層が覆っている。A2層は黄褐色砂壤土を主体とする土層で、人為的な関与が考えられる堆積層である。

Sec.31では溝は見られず、斜面は屈曲して平坦面に続く。ここはK11地区とK12地区との間の谷が入り込んでいる部分で、平坦面のほとんどの部分がこの谷に堆積したK層によって構成されている。K層は褐色土層中に黄褐色土層、黒褐色土層を挟み込んでおり、Y3地区の遺構形成時の排土と考えられる。この面には自然堆積層とみられる褐色土B層が覆っており、この上に不規則な層理面を呈し黄褐色土層を含むA層が堆積している。

Sec.32では深さ12cmほどの浅い窪み状の溝が見られる。埋土は暗褐色土B層が溝部分に堆積し、褐色土および暗褐色土のA層がこの上を覆っている。

Sec.33は北東に張り出す尾根部分の土層断面である。ここでは深さ70cm、幅2.6mの葉研状の空堀跡の形状を示している。堀底から堀肩に至る角度は内側で50°、外側で32°を測る。この周辺では10mほどの長さにわたって空堀跡を検出しており、その範囲では同様な規模、形状を保っている。

空堀跡は北西の急斜面に抜けて末端となっている。

#### (15) K11地区 (第61図、photo.100)

K11地区はY3地区の北東に位置し、空堀跡下位の標高34m前後の地区である。Y3地区平場との比高は13m、空堀跡の検出面からは7mの標高差がある。調査前の状況は、この地区の西20mほどの地点から、幅約4mの細長い帯状の平場が見られ、これはK11地区で南に向きを変えK7V地区の北に続いていた。この面は標高34~35mで、ほぼ平坦である。この調査区は、Y3地区から北東に伸びる尾根筋部分に位置し、帯状の細長い平場が尾根を切っている状態が見られた。

調査の結果、ここでは尾根方向に直行して幅3.7mの削平面が見られ、北東側では40cmほど立ち上がり尾根に続いている。南東側では約55°の角度で立ち上がり、空堀跡下方の斜面に続いている。

埋土状況はA層の褐色土が斜面方向から流入し削平面が埋まり、この上に黒褐色土の第Ⅲ層が堆積しこの部分をほぼ平準化している。

空堀跡検出面から一段下がった外周部分には、K2からK7地区で見られたように切岸が形成されている。K11地区もこれらに相当する面であり、形状から見てもここで検出された遺構は切岸と考えられる。ただしここでは尾根に位置するため、削平面は結果的に尾根筋を切る堀状の形態となったものとみられる。

#### (16) K12地区 (第62図、photo. 101)

Y3地区から北東に伸びる尾根の空堀跡下方に位置する。標高は33m前後で、空堀跡検出面およびY3地区平場との比高はそれぞれ6.4m、15mである。調査前は尾根筋に、腰郭状の平坦部が見られた。

調査の結果、尾根筋方向に7mほどの範囲で削平面が見られ、この面から急斜面が立ち上がっている状態が確認された。削平面は水平で、この面から46°の角度で急斜面が立ち上がり空堀下の斜面に続いている。埋土は黄褐色土A層が斜面上方から流入した状態を示している。

この地区はK11地区と同一面で、空堀跡外周の切岸が形成される面に相当している。また形状から見てもここで検出された遺構は切岸と考えられる。

#### (17) Y3地区 (第63~67図、photo. 102~105)

丘陵頂部の平場のうちで最も北に位置する地区で、Y1地区の北東80m、Y2地区の北90mの位置にある。平場は南東から北西に細長く広がり、長さ46m、幅11mを測る。北西斜面には空堀と切岸が見られる。標高は47mほどで、空堀跡からは7m、切岸からは12mの比高がある。ここでは建物跡3棟が検出されている。

##### 1 MB05建物跡

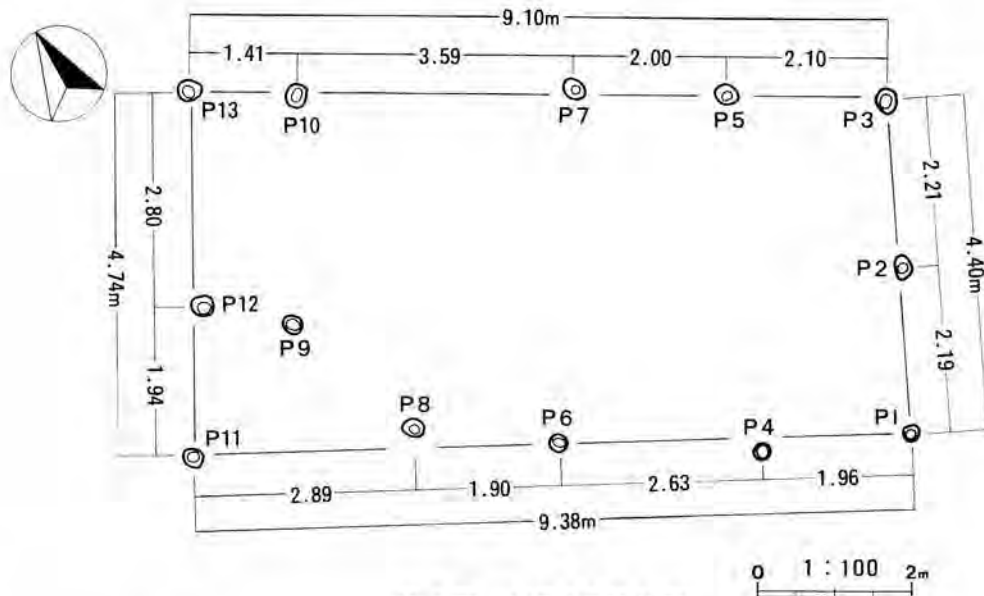
平場の南東部に検出された建物跡で、桁行9.10m(30.0尺)4間、梁行4.74m(15.6尺)2間の規模をもち、棟方向はE-30°-Sである。

桁行は、北側柱(P3~P13)で4間9.10m(30.0尺)で、柱間は西から1.41m(P13-P10)、3.59m(P10-P7)、2.00m(P7-P5)、2.10m(P5-P3)となっており、それぞれ4.7尺、11.8尺、6.6尺、6.9尺の間尺を示す。南側柱(P1~P11)は4間9.38m(31.0尺)で、柱間は西から2.89m(P11-P8)、1.90m(P8-P6)、2.63m(P6-P4)、1.96m(P4-P1)となっており、それぞれ9.5尺、6.3尺、8.7尺、6.5尺の間尺を示す。

梁行は、西側柱(P11~P13)で2間4.74m(15.6尺)で、柱間は南から1.94m(P11-P12)、2.80m

(P12-P13)となっており、それぞれ6.4尺、9.2尺の間尺を示す。東側柱(P1-P11)は2間4.40m(14.5尺)で、柱間は南から2.19m(P1-P2)、2.21m(P2-P3)となっており、それぞれ7.2尺、7.3尺の間尺を示す。

柱穴の重複はなく、柱穴掘り方はいずれも20~40cmのほぼ円形で、深さは19~56cmである。P1からP13のすべての柱穴に柱痕が見られ、柱痕の太さは8~16cmとなっている。

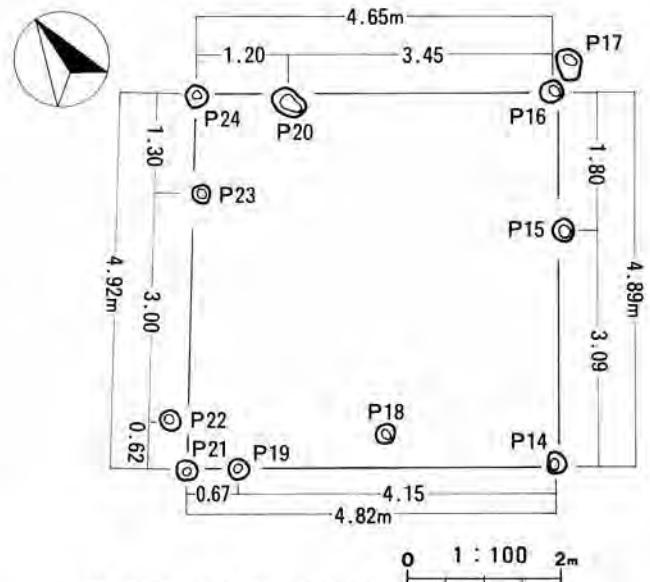


第6図 MB05建物跡

## 2 MB06建物跡

MB05建物跡の西4mに隣接する建物跡で、平場の中央東寄りに位置する。南北桁行4.92m(16.2尺)2間、東西梁行4.65m(15.3尺)のほぼ方形の建物跡で、棟方向はN-34°-Eである。

桁行は、西側柱(P21~P24)で2間4.92m(16.2尺)で、柱間は南から3.62m(P21-P23)、1.30m(P23-P24)となっており、それぞれ11.9尺、4.3尺の間尺を示す。東側柱(P14~P16)は2間4.89m(16.1尺)で、柱間は南から3.09m(P14-P15)、1.80m(P15-P16)となっており、それぞれ10.2尺、5.9尺の間尺を示す。



第7図 MB06建物跡

梁行は、北側柱(P16~P24)で4.65m(15.3尺)、南側柱(P14~P21)は4.82m(15.9尺)である。柱穴の重複はなく、柱穴掘り方は20~45cmの円形ないし楕円形で、深さは14~44cmである。P19、P21、P24を除くすべての柱穴に柱痕が見られ、柱痕の太さは8~12cmとなっている。

## 3 MB07建物跡

平場の北西部に検出された建物跡で、桁行5.41m(17.9尺)3間、梁行5.08m(16.8尺)3間の規模を

もち、棟方向はE-34°-Sである。

桁行は、北側柱(P29~P41)で3間5.41m(17.9尺)で、柱間は西から1.67m(P41-P37)、2.11m(P37-P33)、1.63m(P33-P29)となっており、それぞれ5.5尺、7.0尺、5.4尺の間尺を示す。

南側柱(P26~P38)は3間5.32m(17.6尺)で、柱間は西から2.21m(P38-P34)、1.78m(P34-P30)、1.33m(P30-P26)となっており、それぞれ7.3尺、5.9尺、4.4尺の間尺を示す。

また桁行柱筋P28~P40の柱間は、西から1.66m(P40-P36)、2.26m(P36-P32)、1.75m(P32-P28)となっており、それぞれ5.5尺、7.5尺、5.8尺の間尺を示す。同じくP27~P39の柱間は、西から1.74m(P39-P35)、2.02m(P35-P31)、1.58m(P31-P27)となっており、それぞれ5.7尺、6.7尺、5.2尺の間尺を示す。

梁行は、西側柱(P38~P41)で3間5.08m(16.8尺)で、柱間は南から1.42m(P38-P39)、1.72m(P39-P40)、1.94m(P40-P41)となっており、それぞれ4.7尺、5.7尺、6.4尺の間尺を示す。東側柱(P26~P29)は3間4.84m(16.0尺)で、柱間は南から1.46m(P26-P27)、1.60m(P27-P28)、1.78m(P28-P29)となっており、それぞれ4.8尺、5.3尺、5.9尺の間尺を示す。

また梁行柱筋P34~P37の柱間は、南から1.30m(P34-P35)、1.67m(P35-P36)、1.84m(P36-P37)となっており、それぞれ4.3尺、5.5尺、6.1尺の間尺を示す。同じくP30~P33の柱間は、南から1.40m(P30-P31)、2.00m(P31-P32)、1.68m(P32-P33)となっており、それぞれ4.6尺、6.6尺、5.5尺の間尺を示す。

この建物跡は、各柱筋の交点に柱穴が見られる総柱の建物跡である。柱穴の重複はなく、柱穴掘り方はいずれも20~40cmのほぼ円形で、深さは15~65cmである。P34、P40を除くすべての柱穴に柱痕が見られ、柱痕の太さは10~15cmとなっている。

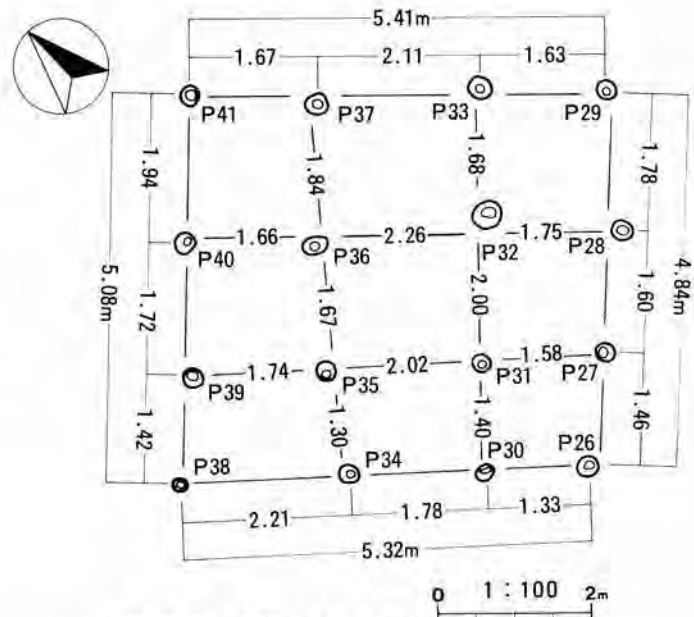
この地区ではこれらの建物跡の他に性格不明の落ち込みが検出されている。MB06建物跡の北には、東西6m、南北3mほどの範囲で、不整形の浅い落ち込みが見られた。底面はやや凹凸があり、埋土は暗褐色土および褐色土である。またMB07建物跡の南東には、長さ5m、幅0.9~1.7mの溝と長さ4m、幅2.5mの長方形の落ち込みが見られた。いずれも性格、時期は不明である。

出土遺物では常滑の甕破片が見られ、特にMB06建物跡の周辺から多く出土している。

### (18) 中央地区 (第68~72図、photo, 106~113)

遺跡の中央部に位置し、丘陵頂部のY1、Y2、Y3地区に囲まれた部分である。標高36m~45mの北西向きの緩斜面で、縄張の中では最も広い面積を占める地区である。

基本層序は、第I層が褐色土の表土、第II層は暗褐色土層でこの地区の中央部分を広く覆っている。



第8図 MB07建物跡

A1～A3層は褐色土層ないし暗褐色土層で、東半部に見られる堆積層である。層厚は最も厚い部分で50cmほどになっている。A4層は西端部に見られる褐色土層で、面的な広がりはない。B1層は広範囲にわたって見られる暗褐色土層で、青磁、北宋銭、常滑等の中世に属する遺物を含んでいる。C層は北東部に堆積する土層で、Y3地区の方向から流入したとみられる堆積状況を示している。

検出された遺構は、SE01井戸跡、SH01竪穴およびMX03整地部である。

### 1 SE01井戸跡

中央地区の最も標高の低い北西部に検出されたもので、直径3.6m、深さ1.5mの擂鉢状の掘り込みをもつ素掘り井戸である。調査時にも湧水が見られ、地形的に選択して掘られたものと考えられる。

埋土は下位に暗褐色土のW2層、上位には褐色土のW1層が堆積し、この上面で井戸はほぼ埋没した状態となる。層理面は自然傾斜を成し、混入土にも人為的な関与を裏付けるものはない。井戸底面からの遺物は見られなかったが、W1層からは14世紀末から15世紀初頭とみられる瀬戸灰釉三足盤の口縁部破片が出土している。

### 2 SH01竪穴

井戸跡の北3mほどの地点に検出された竪穴で、長辺3m、短辺2.3mの長方形を呈する。検出面から床面までの深さは30cmで、床面はほぼ平坦である。北壁と東壁近くに径20cmほどの柱穴P1、P2が見られ、深さはそれぞれ16cm、25cmを測る。

埋土は床面および壁を埋める褐色土のH2層と、その上位に堆積する暗褐色土のH1層により構成されている。P1、P2の埋土a層はH2層と基本土を同一にする褐色土である。埋土および床面からの遺物は見られなかった。

### 3 MX03整地部

中央地区の東半部に検出された遺構で、東西15m、南北9mの範囲にわたり斜面を掘削し平坦面を造り出している。削平面からの立ち上がりは、ほぼ30°の角度を成し、落差は0.8m～1.3mである。

この面には、立ち上がりに沿って幅50cm前後、深さ20cmほどの溝があり、これに直交する方向に二条の溝状の凹部が見られた。これとともに、この凹部と同じ方向に広がる畝状の浅い凹凸も数条見られた。この面からは北宋銭が2枚出土している。

埋土のC10～C15層は黄褐色土を主体とする土層で、この上位に見られるA層、B層とは異なる堆積状況を示しており、人為的な関与が考えられる堆積層である。

この整地部については、畝状の痕跡が検出されるのみで、建物跡等の遺構は見られなかった。その他の部分についても、この調査地区では建物跡の存在は確認されていない。

## 第2節 遺物

磯鷄館山遺跡からは、青磁、常滑、瀬戸灰釉陶器等の陶磁器類、北宋銭などの銭貨類および鉄製品等の中世遺物が出土している。陶磁器類については、すべて破片として出土したもので完形品はない。

青磁は小破片まで含め12点あり、このうち7点が中央地区から出土している。常滑は、甕胴部破片を主体に小破片まで含め115点出土しており、Y3地区では69点、中央地区からは37点出土し、これらの地区からの出土量が多い。また後述するF地区からも常滑の胴部、口縁部の小破片が8点出土している。

鉄製品については鎧金具の小札14点のほか、釘、釣針、火打金等が見られ、釘類が主体を占める。このうち小札については、Y2地区から9点一括で出土している。銭貨類については、丘陵上の城館主体部から36点、F地区から6点の中世銭貨が出土しており、これらの多くが北宋銭である。

### 1 陶磁器

#### (1) 青磁 (第73図、photo.6, 114)

口縁部破片2点、高台部破片4点、胴部破片が6点あり、いずれも小破片で器形を完全に復原できるものはない。

1は大きく外反した口縁部の破片で、器厚は口縁端部で7.5mm、くびれ部分でやや薄くなり、口頸部に至る破片端部で6.2mmである。釉調は明緑灰色を呈しているが、大きく発泡しており部分的に剥落し、器面はかなりざらついている。二次的に火を受けた可能性がある。推定される口径は118mmで、器種は花生または瓶と考えられる。

2は空堀跡(Y1地区南部分)の埋土上部から出土したもので、鎬蓮弁文小碗の口縁部破片である。器厚は口縁部で2.7mm、胴部にかけて厚くなり破片端部で5.2mmである。釉調は明緑灰色を呈し、最も厚い部分で1mmほどの厚さで釉が施されている。微小な気泡が見られ、外面には小貫入がある。口径は10cm前後と推定され、14世紀代の龍泉窯系青磁と考えられる。

3は高台部破片で、Y1地区建物跡の北西斜面から出土した高台脇の小破片と、同建物跡の北東に位置するMX02の埋土下部から出土した高台部が接合したものである。器厚は6.3~7.3mmで、底部最大厚は13mmとなっている。高台脇の高さは9mmで、高台径は54mmと推定される。釉は緑灰色で、微小気泡を含み、貫入は見られない。胎土は灰白色(5Y7/1)ないし灰色(5Y6/1)で、ややくすんだ色調を呈している。

4はK6地区の切岸削平面直上から出土した青磁小碗の高台部である。器厚は5.7mmで、底部中央では7.7mmを測り、高台径は33mmである。釉調は不透明な緑灰色を呈し、貫入が見られる。施釉は全体に厚く見込部分で1mmほどあり、高台端のみ露胎である。胎土は、にぶい橙色ないし褐灰色を呈し、露胎部分にもぶい橙色である。上述の青磁とは釉調、胎土の色調が異なる。

5は双魚文鉢の見込部分破片である。器厚は3.8~4.7mmで、破片外面端部で高台に至る湾曲が僅かに見られる。魚文は長さ30mm、胴の幅13mmほどの浮文で施されており、鱗は径1mm前後の円形の浮文で表現されている。浮文部最大厚は6.4mmである。釉調は明緑灰色を呈し、微小気泡が僅かに含まれ、高台内では貫入が見られる。高台内径は60~70mmほどと推定される。13世紀前半の龍泉窯系青磁と考えられる。

6は内面に鑄文をもつ小破片で、端部で僅かに屈曲している。釉は明緑灰色を呈し、微小気泡が含まれ貫入は見られない。

7はY1地区建物跡検出面北端部から出土したもので、片面が剥離している。破片には湾曲部が見られず、見込部分の小片と考えられる。釉はオリーブ灰色で微小気泡が僅かに含まれる。

8は内面が無釉で、僅かに外反する。釉は明緑灰色で、微小気泡を僅かに含み貫入が見られる。

9～12は中央地区B1層から出土した小破片で、釉はいずれも明緑灰色で、微小気泡を含み貫入は見られない。10は屈曲外反部分、その他は僅かに湾曲する破片である。

以上12点の青磁小破片を比較すると、釉調においては2、5、9～12が類似している。胎土では4が特に異なり、また3も他のものに比べややくすんだ色調を呈している

## (2) 常滑 (第74, 75, 77図、photo.7, 115)

丘陵上の城館主体部からは小破片を含め115点の常滑陶器が出土している。各地区での出土点数は、Y3地区69点、中央地区37点、空堀跡5点、Y1地区2点、K4地区南斜面1点、K7V地区1点となっている。半数以上がY3地区からの出土で、特にMB06建物跡周辺での分布が濃密であった。これらはほとんどが甕胴部破片で、そのほかに縁部、肩部、底部破片も数点見られる。また、押印の施されたものが5点出土している

### 縁部

1は口縁部破片で、いわゆるN字状口縁の縁部部分である。口頸部に至る部分で割れており、縁部下端はやや外へ反り出している。縁部の幅は57mmで、厚さは中央部で17.2mm、下端で9mmとなっている。縁部内面では、下端から13mm前後の部分で3～5mmの幅で口頸部に接していた痕跡が見られる。器面は、にぶい赤褐色(5YR4/3)ないし黒褐色(5YR3/2)、縁部内面は口頸部に接する部分より上にぶい赤褐色(5YR5/4)、これより下の部分でにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈する。胎土色調は、器面に近い部分で褐灰色(10YR6/1～10YR4/1)、中心部で浅黄褐色(10YR8/3)となっている。また、胎土には1～3mmの黄白色の粗粒砂が含まれる。縁部の形状から、15世紀前半(94赤羽・中野編年の常滑9段階)のものと考えられる。

2～4は縁部の下端部分である。形状、胎土等から見て、1と同一個体の破片と思われる。

### 斜格子紋押印

5は甕胴部下半の破片で、斜格子紋の押印が施されている。押印は上部が欠損しているが、左右幅23mm、上下21mmの範囲で見られる。右端部分では押印端部と思われる比較的明瞭な凹部が観察されるが、左方では押印が徐々に浅くなり斜格子紋が消えている。幅2～3mmの斜方向の凸線が3条交差しており、これに囲まれた縦に長い菱形の凹部は一辺4.9×5.4mmとなっている。

外面は、にぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、平滑に調整されている。内面は灰黄褐色(10YR6/2)で、成形時の凹凸が残っており、破片上部で粘土積み上げの痕跡が見られる。

6は甕胴部の破片で、斜格子紋の押印が見られる。押印は36×14mmの範囲で観察され、幅1.5mmの斜方向の凸線が2条交差し、これに挟まれた凹部の幅は5.7mmとなっている。器厚は16.4～18.8mmと比較的厚いが、胎土、色調などは5と類似している。

7は中央地区B1層から出土したもので、斜格子紋押印が見られる。右側部分は欠損しているが、左方、上下は押印が完結している。左右34mm、上下幅28mmの範囲に押印が見られ、縦長の菱形が上下

に2列連続して並ぶ斜格子紋であることがわかる。幅1.3~2.0mmの斜方向の凸線が3条交差しており、これに囲まれた縦に長い菱形の凹部は一辺4.8~5.2mm×4.9~5.4mmとなっている。器面色調は、外面灰黄色(2.5Y7/2)、内面灰褐色(5YR5/2)で、他の破片とは異なっているが、胎土は類似している。甕肩部の破片の可能性も考えられる。

8は甕肩部から胴部にかけての大破片で、胴部に横長の斜格子紋押印が見られる。右端は欠損しているが、左方、上下は押印が完結している。左右63mm、上下幅28mmの範囲に押印が見られ、幅0.8~2.6mmの斜方向の凸線が7条交差しており、これに囲まれた縦に長い菱形の凹部は一辺4.4~5.4mm×4.5~5.5mmとなっている。斜格子紋は、7と同様のパターンを示し、胎土、色調は1~6に類似する。肩部の曲率から推定される直径は90cm前後で、大型の甕の破片と考えられる。

9は小破片であるが、一部に斜格子紋押印が見られる。押印の左右および上部が欠損しており、下縁部のみ完結している。幅1.0~1.5mmの斜方向の凸線が3条交差しており、これに囲まれた縦に長い菱形の凹部は一辺5.2mm×5.4mmとなっている。

斜格子紋押印が見られる破片が以上の5点出土しており、これらの押印を第77図に示してある。押印のパターンは、斜方向の凸線によって囲まれた縦長の菱形の凹部が縦に2列交互に並び、上下端には三角形の凹部が連続するものである。凸線の幅は0.8~3.0mm、菱形の一辺は4.4~5.4mmで、押印の範囲は上下幅28mm、左右長さは完結したものがなく明らかではないが、63mm以上である。

斜格子紋を比較すると、6、7、8の資料で斜格子文が合致するとみられる部分があり、同一の型で施文された可能性が高いと考えられる。

5~9の資料は13世紀後半(94赤羽・中野編年の常滑一6段階)の常滑と考えられる。

#### 肩部、胴部

10~13はY3地区から出土したもので、甕の肩部から胴部にかけての破片である。押印は見られず、胎土、器面色調等類似したものである。

#### 底部

14は底部破片で、器厚は底面で14~15mm、胴部への立ち上がり部分で21mmとなっている。推定される底径は、18.4cmである。

以上、出土した常滑破片の中から特徴的なものを取り上げ示してきたが、胎土、色調等が類似する破片があり、8に示したような大型の甕があることから、破片数に比べ個体数は極めて少ないものと考えられる。

#### (3) 播 鉢 (第75図)

15は口縁部破片で、外面に口縁部に沿って幅10mm、深さ2mmの凹部が見られる。器厚は体部で8.9~10.4mm、口唇部で13.2mmである。釉は施されておらず、内面は平滑である。器面色調は外面が橙色(5YR6/6)、内面はにぶい赤褐色(5YR5/4)、また胎土は橙色(7.5YR5/4)を呈する。推定口径は35~40cmと考えられる。

16は底部から体部にかけての破片で、胎土、色調から見て15の口縁部と同一個体と考えられる。器厚は体部で10~12.3mm、底面は欠損しているが、破片端部で著しく薄くなっており4~6mmとなっている。色調は内外面ともに橙色(5YR6/6)で、底部外面では浅黄色(10YR8/4)である。胎土は橙色(5YR6/6)で、一部に浅黄色(10YR8/4)の土が層状に含まれている。体部は、底部からほぼ40°の角度



で立ち上がり、推定される底径は11.5cmである。内面は極めて滑らかで、底面から高さ2cmほどの部分が摩滅しており、浅い凹部となっている。破片割口の一部に、暗褐色(10Y R3/3)の付着物が見られる。これは破片の接合の痕跡と考えられ、割れた播鉢を粘着質の物質で接着、修復したものとみられる。

17は底部から体部下半の破片で、全面に薄く鉄釉が施されている。器面は灰褐色(5Y R5/2)、胎土は浅黄色(2.5Y7/3)を呈する。器厚は8.9~13.4mm、底部は摩滅しており8mmほどの厚さとなっている。体部は、底部からほぼ55°の角度で立ち上がり、推定される底径は13.2cmである。体部内面には、口縁部に向かって放射状の櫛目が引かれている。櫛目は一単位17条、幅43mmで、この破片では2単位観察される。条の幅は0.5~2mm、条間隔は2~3mmである。底部内面から立ち上がり部分にかけて著しく摩滅している。櫛目は、底面から高さ25mmほどの部分まで消えており、胎土部分が滑らかに摩滅している。底部外面にはロクロ右回転の糸切痕が見られる。

#### (4) 瀬戸 (第76図、photo.116)

18は中央地区SE01井戸跡の埋土上位W1層から出土したもので、瀬戸灰釉陶器の口縁部破片である。折縁状の口縁を成し、幅12mmの縁帯から内面に段を有し体部に至る。器厚は体部に至る破片端で8.6mm、縁帯中央で5.7mmである。釉は薄く、剥落している部分もあるが、口縁部外面の端部から5mmほどの部分を除き、全面に見られる。釉調は透明ないし浅黄色(7.5Y7/3)で、小貫入が見られ、胎土は淡黄色(2.5Y8/4)である。推定される口径は23.6cmで、14世紀末から15世紀初頭の瀬戸灰釉三足盤の口縁部と考えられる。

19は中央地区の第II層から出土した、同一個体と思われる4点の資料から復原したものである。口縁部形態は折縁状で、18と類似しており、口縁部から緩やかに湾曲する体部をもつ鉢型の陶器で、口径は30.5cmと推定される。縁帯幅15mm、器厚は5.4~8.3mmで、外面の体部下半はケズリ調整されている。釉はほとんどの部分で剥落しているが、ほぼ全面に僅かながらも釉が見られる。釉調は淡黄色(5Y8/3~7.5Y8/3)、釉剥落部分の器面は灰白色(N8/0~2.5GY8/0)で、胎土は淡黄色(5Y8/3)から灰白色(5Y8/2)を呈する。

20は獣足の付く三足盤の底部破片で、獣足の高さは16mm、推定される底径は19.2cmである。器厚は体部に至る破片端部で7.8mm、底部で10.6mmとなっている。釉はほとんど剥落しており、底部内外面の一部に遺存しているのみである。胎土および器面の色調は灰白色(2.5Y8/2)からにぶい黄橙色(10Y R7/2)を呈する。

21はY1地区建物跡の検出面から出土した皿底部の破片である。推定される高台径は68mmで、見込には直径57mmの円形の凹線が見られる。器厚は見込部分で8.9mm、腰部で6.8mmである。釉は明黄褐色(2.5Y7/6)を呈し、高台内から高台脇にかけての外面は露胎である。

22は折縁皿の口縁部から体部にかけての破片である。推定される口径は11.4cm、器厚は4.0~5.5mmとなっている。釉は浅黄色(2.5Y7/3)を呈し、腰部は露胎である。胎土は淡黄色(2.5Y8/3)を呈する。16世紀末の瀬戸灰釉折縁皿と考えられる。

23は器厚6.8~7.9mm、内面無釉の小片である。釉は、明黄褐色(2.5Y6/6)ないしオリーブ褐色(2.5Y4/3)、描線部分で黒褐色(2.5Y3/1)を呈する。胎土は淡黄色(2.5Y8/3)で、内面は無釉である。文様は梅唐草文で、14世紀中葉の瀬戸鉄釉と考えられる。

## 2 鉄製品 (第78, 79, 80, 81図, photo.117, 118)

鉄製品では釘類が最も多く見られるほか、釣針4点、火打金2点、鎧金具小札14点、刀子、鉄鏃、鉸具、その他用途不明の鉄製品が出土している。

### (1) 釣 針

1は先端部と軸頂部が欠損しているが、形状から見て釣針と考えられるものである。軸部径2.3mm、現存長24mm、幅14mmで、直状の軸部から屈曲して腰部、針部に至る。

2は末端部が錆びており、新しい折損面ではないが、1と同様、針部と軸頂部を欠損した釣針と考えられる鉄製品である。軸部径は2.2mm、現存長23mm、現存幅12mmで、軸部から緩やかに湾曲して腰部に至る。

3はK4地区切岸の遺構面から出土した完形品の釣針である。軸部径2.2mm、長さ28mm、幅13mm、重さは0.5グラムで、軸部からやや環状の腰部を経て針部に至る。針部は保存状態が良好で、鏝が明瞭に観察される。鏝から針先端までの長さは5.5mm、針先端方向は軸部とほぼ平行し、先端部は先鋭である。針部を前方にした側面方向から見ると、針先端部はやや左方に向いている。

4はK7地区切岸東端部の埋土上部A層から出土した釣針である。ほぼ完形品と考えられ、軸部径3.0mm、長さ41mm、幅16mmで、保存処理後の重量は1.7グラムである。直状の軸部から屈曲して腰部、針部に至る。鏝が見られ、鏝から針先端までの長さはほぼ7mmである。

### (2) 刀 子

5は、ほぼ完形品とみられる刀子で、下側縁の先端部から9cmほどの部分までが刃部となっている。幅は基部で13mm、峰厚は3.3mm、重さは13.4グラムである。

### (3) 火 打 金

6は長さ69mm、最大幅31mmで、上部中央に頂部をもつ山型の火打金である。頂部に径2.6mmの紐孔があり、下縁は中央部がやや凹んでいる。厚さはほぼ5mmで、頂部でやや薄く3.5mmとなっている。保存処理後の重量は23グラムである。

7は長さ53mm、幅18mmのほぼ長方形の火打金で、上縁中央に小さな山型の頂部が付く。頂部に径2.8～3.0mmの紐孔があり、下縁は中央部がやや凹んでいる。最大幅は20.5mm、厚さは4.3mmで、頂部でやや薄くなり紐孔部分では厚さ3mmとなっている。保存処理後の重量は18.2グラムである。

### (4) 鉄 鏃

9は尖頭部の長さ42mm、厚さが6.4mmで、茎部と尖頭部の一部が欠損した鏃である。茎部断面形は方形で、保存処理後の重量は22.1グラムである。

### (5) 鉸 具

10は幅84mm、刺金の長さ39mmの鉸具である。環上部の鉸具頭は断面が楕円形で、10×8mmとなっている。鉸具の下端は孔の部分から欠損しているが、本体および刺金部分は形状が保たれている。鉸具は馬具の一部と考えられ、一般的に鎧と力革の連結部分に用いられたものとされている。

## (6) 釘 類

11～16は上端部をほぼ直角に曲げ、頭部を平らにした平頭釘である。長さは3cmほどのものから、長いものでは16cmほどのものまで見られる。断面形は小型のものでは方形が多く、大型のものではほとんどが長方形である。

## (7) その他の鉄製品

8は短い管状の鉄製品である。長さは19mm、平面形は22×24mmの楕円形で、内径は22×17mmから13×9mmと一方でやや細くなっている。厚さは2～4mmで、ほぼ完形品と考えられるが、用途は不明である。

17は厚さ3.5mmほどの半円型の板状鉄製品で、下側縁の両端が折り曲げられている。18も同様の鉄製品で、折り曲げられた部分の長さは12mm、板状部分との間隔は3mmほどである。18では直状の下側縁部分が、厚さ0.5～1.2mmと薄くなっている。何らかのものを挟み込んで固定したのと考えられるが、釘孔等は見られず、付着物も観察されない。

19は一端に内径6.4×10mmの楕円形の環をもつ鉄製品である。長さは13cmで、一方はL字状に曲がり、末端は欠損している。太さは4～6mmで、断面形は方形～長方形を呈し、環部分はやや細く2.7～4mmで、断面形は円形である。轡金具の一部と考えられる。

20は中央部で段をもつ断面長方形の鉄製品である。長さ10cmで、先端の一部が欠損している。刃部と見られる部分はなく、先端部で板状に薄くなる。一方の端部は徐々に細くなり末端となっている。合釘とも考えられるが、段部分が小さく断定はできない。

## (8) 鍔金具小札

小札は小破片まで含め14点出土している。このうち10点はY2地区南斜面から、4点は空堀跡から出土したものである。1～9の小札は、図示したとおりに一括して出土したもので、出土地点はY2地区建物跡南西部のSX04溝跡の南約80cmの斜面部分で、出土層位はN1層上面(第40図Sec.4)である。最も上に1の小札があり、この下に2の小札、そして3～5さらに6～9の小札が、それぞれほぼ平行に重なって出土している。4～6は完形品、1、3、7は札足の一部が欠損、2、8、9は札頭ないし札足を欠いている。10はこれらの小札の東4m付近で、同一の層位から出土したものである。また一括出土の小札の近辺からは、ほぼ同一層位で「嘉祐元寶」、「元豐通寶」が出土している。

一括出土の小札は、札頭の中央部が若干挟れる弧状のもので、碁石頭の伊予札である。また、札の孔は2行14孔となっている。大きさは1を除く8点で、長さ65～67mm、幅20～23mmの範囲に収まり、形状のばらつきも少なく規格化されている。

1は一括出土の小札の中では札幅が広く、25～27mmとなっている。孔は2行14孔で、孔間隔の計測値Aは他の小札とほぼ同様の値となっているが、側縁と孔との間隔(計測値E、F)が他の小札に比べ広く、7.7、8.1mmとなっている。小札表面には、黒色でやや光沢のある付着物が部分的に見られ、また片面には明褐色で不正方向に広がる繊維状の付着物が22×13mmの範囲で観察される。

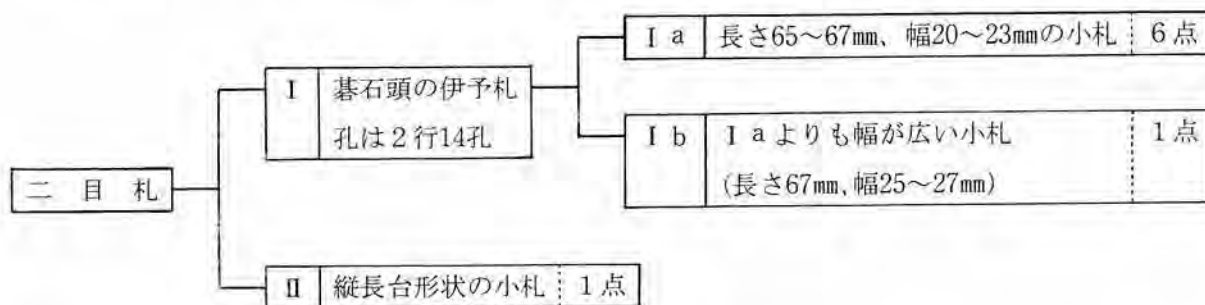
2は札頭側のほぼ半分が欠損しており、片面に繊維状の付着物が見られる。孔径が比較的大きく、最大値で3.6mmとなっている。4、6、7、8では札足に近い部分に褐色の付着物が見られる。

10は他の小札とは形状が異なり、頭部で狭い縦長の台形状の札で、札幅が足頭でそれぞれ34mm、24mmとなっている。孔は側縁に沿って2行に穿たれており、側縁と孔との間隔(計測値E、F)は5.2mm、

5.5mmで他の小札の値に近いものである。

11～14は空堀跡から出土したもので、11は完形品で、札足がやや弧状に膨らんでいるが、一括出土の小札と同様の碁石頭の伊予札である。孔は2行14孔で、長さ、幅とも一括出土のものと同規格である。

小破片も含め14点という少ない資料であるが、これらを分類整理すると次のようになる。



I類の計測値は、孔間隔Aが8.6～9.9mm、Bは8.0～8.8mm、札頭と孔の間隔Cは6.5～8.3mm、札足と孔の間隔Dは5.0～8.5mm、側縁と孔の間隔E、Fはそれぞれ3.8～7.7mm、5.5～8.1mmとなっている。計測値C、D、E、Fではその値にばらつきが見られるが、これに対し孔間隔A、Bは比較的近い値の中に収まっている。また計測値E、Fは、各小札相互での規格性は乏しいが、各々の小札ではE、Fが同様な値を示すものは少なく、相対的にE<Fの関係が見られる。つまり小札側縁と孔の間隔は左右で偏差があり、孔の縦列の配置は左右対象の位置ではなく、左右側縁からの間隔が僅かに異なるように穿たれたものと考えられる。

### 3 銭貨 (第82, 83, 84図, photo.119, 120, 121)

各地区での出土枚数は、空堀跡20枚、Y1地区8枚、中央地区4枚、Y2地区3枚、K7V地区1枚、計36枚である。空堀跡の20枚は、Y1地区南西部に設定したMD01-Sec.11(第13,14図)の南部分から一括出土したものである。(拓影17～36)銭貨はセクション面から南へ30cm、東西方向に20cmほどの範囲で、5地点に分かれて出土した。各地点での枚数は、9枚(17～25)、1枚(26)、7枚(27～33)、2枚(34,35)、1枚(36)で、出土層位は空堀埋土上半部のB2層である(photo.119)。

Y1地区では、建物跡MB01,02の検出面から2枚(1,2)、北東部のMX02遺構Sec.6周辺の埋土下部A1,A2層および遺構面から、6枚の銭貨が出土している(3～8)。Y2地区では、MK02土坑のA3層から「開元通寶」が1枚、南斜面からは、小札とほぼ同一層位で2枚の銭貨が出土している。中央地区ではMX03の遺構面から2枚の「元豊通寶」が出土している。

1の「皇宋通寶」は縁が狭く、面背ともに摩滅しており、薄く脆弱である。摩滅した銭文部で緑灰色(10G6/1)を呈する。2の「元符通寶」は「元」の第一画目が点になっている。縁には広狭があり、面はやや摩滅しているが、保存状態は良好で、色調は全体に暗緑灰色(10G4/1)を呈する。3は面背ともかなり摩滅しており平滑である。銭文は不鮮明であるが「開元通寶」と読める。縁は欠けており、穿は不整形である。4の「祥符元寶」は縁が広く、やや広狭がある。文字は小さく、色調は全体に緑灰色(10G5/1)を呈する。5の「景祐元寶」は保存状態が悪く脆弱で、縁は明緑灰色(7.5GY8/1)を呈する。6は楷書体の「熙寧元寶」で、縁の面側を磨いて角を落としている。

7の「元祐通寶」は文字が小さく「元」の字に特長がある。8は篆書体の「紹聖元寶」で、脆弱で輪側が欠けている。9は「開元通寶」で、保存状態が良好で銭文も鮮明である。背文はなく、「元」の第一画目が短く、第二画目が左ではねる。10は篆書体の「嘉祐元寶」で面が荒れており、文字もやや不鮮明である。11、12、13は草書体の「元豊通寶」である。12、13では「豊」の字のくずしが強く、13は外径がやや大きい。14の「熙寧元寶」は文字が大きく、穿が不整形である。15、16は「永樂通寶」で、15は薄手で文字も不鮮明である。鋳抜けも見られ鏹銭と考えられる。16は銭文は明瞭で、摩滅も少なく黒褐色(2.5Y3/1)を呈する。

17は「開元通寶」で、9と銭文は類似しているが、縁がやや狭く、緑青を帯びている。18～21は篆書体の「皇宋通寶」である。19と21の「寶」の貝は、下半が丸くなっている。穿は18と21は不整形である。22は銭文が不鮮明であるが、篆書体の「嘉祐通寶」と判読される。23は銭文がやや摩滅しているが、太文字の「熙寧元寶」である。24の「元豊通寶」は縁が広く「豊」の字が縁に接している。25は篆書体の「元祐通寶」で、「祐」と「寶」の字が縦に長い。面は明緑灰色(10G7/1)を呈する。26の「祥符通寶」は縁がかなり広く、「祥」が小さく、「符」と「寶」が縦長である。26は「開元通寶」で、銭文は9、17と類似している。28は「咸平元寶」で、「元」の字が小さく縁が広い。29は、面が緑青に覆われており銭文が不鮮明であるが、楷書体の「天聖元寶」と判読される。30は篆書体の「熙寧元寶」で、いわゆるカニ熙寧である。31は銭文が不鮮明であるが、草書体の「紹聖元寶」と判読され、縁が広い。32は篆書体の「政和通寶」で、縁がやや広い。「政」と「通」の字が崩れており、当二文銭を模した私鋳銭の可能性もある。33、34は楷書体の「嘉定通寶」で背に「七」の数字が見られる。35は楷書体の「治平通寶」で、「治」と「平」の字がやや小さい。36は篆書体の「皇宋通寶」で、18から21の「皇宋通寶」のいずれとも、銭文が若干異なる。

	銭 銘	初鋳年	時代	枚数	拓影番号	備 考
1	開元通寶	621	唐	4	3, 9, 17, 27	楷書体
2	咸平元寶	998	北宋	1	28	楷書体
3	祥符元寶	1008	北宋	1	4	楷書体
4	祥符通寶	1008	北宋	1	26	楷書体
5	天聖元寶	1023	北宋	1	29	楷書体
6	景祐元寶	1034	北宋	1	5	楷書体
7	皇宋通寶	1039	北宋	6	1, 18, 19, 20, 21, 36	1は楷書体、その他は篆書体
8	嘉祐元寶	1056	北宋	1	10	篆書体
9	嘉祐通寶	1056	北宋	1	22	篆書体
10	治平通寶	1064	北宋	1	35	楷書体
11	熙寧元寶	1068	北宋	4	6, 14, 23, 30	30は篆書体、その他は楷書体
12	元豊通寶	1078	北宋	4	11, 12, 13, 24	草書体
13	元祐通寶	1086	北宋	2	7, 25	7は草書体、25は篆書体
14	紹聖元寶	1094	北宋	2	8, 31	8は篆書体、31は草書体
15	元符通寶	1098	北宋	1	2	草書体
16	政和通寶	1111	北宋	1	32	篆書体、私鋳銭の可能性もある
	小 計		北宋	28		10世紀1枚、11世紀26枚、12世紀1枚
17	嘉定通寶	1214	南宋	2	33, 34	楷書体、背七
18	永樂通寶	1408	明	2	15, 16	15は鏹銭
計	18種			36		

第1表 城館主体部出土銭貨の銭種・枚数

城館主体部から出土した銭貨は、7世紀の唐銭から15世紀初頭の明銭までの、18種36枚である。これらの内容は、唐銭は開元通寶が4枚(11%)、北宋銭は15種28枚(78%)、南宋銭は嘉定通寶2枚(5.5%)、明銭は永樂通寶2枚(5.5%)となっており、北宋銭が主体を占める。

北宋銭では「皇宋通寶」が最も多く6枚、以下「熙寧元寶」、「元豊通寶」が各々4枚、「元祐通寶」、「紹聖元寶」が各々2枚、その他各1枚となっている。11世紀代の北宋銭が最も多く、26枚で72%を占める。

また、空堀跡埋土上半部から一括出土した銭貨は、唐銭2枚、北宋銭16枚、南宋銭2枚であり、最も新しい「嘉定通寶」は、嘉定7年1214年の鑄造である。

#### 参考文献

- ・『大和考古資料目録 第2集 館蔵古銭資料』 1973年3月 奈良県立橿原公苑考古博物館
- ・藤沼邦彦・神宮寺千恵 「宮城県における一括出土の渡來銭 —女川町御前浜出土の古銭を中心にして—」 『東北歴史資料館研究紀要第18巻』所収 1992年3月

## 第3節 周辺地区（A，B，F地区）

古代、中世の遺構が検出された丘陵上に対し、丘陵下の沖積面および山裾の緩斜面部分を丘陵周辺地区とした。丘陵の北側では直下に八木沢川が東流し、周囲には標高4m前後の水田が広がる。周辺地区の最も西に位置する部分をA地区とし、以下順次右回りにF地区までの五ヶ所に地区名を付した（第6図）。このうち調査対象としたのは、A、B、Fの三地区である。これらの地区は標高5～13mに位置し、丘陵斜面と沖積面をつなぐ部分にあたる。調査は、城館主体部周辺のこのような立地において、遺構、遺物の在り方がどのようになっているかを、明らかにすることを目的として行われた。

### 1 A地区（第85図）

A地区は調査対象地域の最も西に位置し、標高5.5mから9mの沖積面および山裾の緩斜面に立地する。調査前は畑地として使われ、周辺には水田が広がっている。調査区の北西側を八木沢川が流れ、東側は標高30mほどの尾根に続く斜面によって限られている。調査は八木沢川に接する北側部分（N区）と、これの50mほど南に位置するS区で行われた。N区では、周辺水田とほぼ同じ標高の5.5m前後で遺構確認が行われ、S区では標高7～9mの山裾部分で調査が行われた。（第85図）

#### (1) N区（第86図 photo.122, 123）

基本層序は次のとおりである。I a層は表土で、調査前まで使われていた畑の耕作土である。I b層は50cmほどの厚さの盛土層で、これは昭和40年代の圃場整備によって八木沢川の流路を変え、直線化した際に盛られた土である。明黄褐色砂土層で、腐食土を部分的に含み近世、近代の遺物が混入する。II a層は旧表土で、盛土前の畑の耕作土である。盛土を取り除くと、II a層上面で畑の畝の凹凸が明瞭に現れ、この層の下面でも不規則な耕作痕が見られる。II b層はSec. 1の北側で部分的に見られ、畦状の高まりとその崩壊土と考えられる土層である。かつて水田として利用されていた時期があったとみられる。

遺構確認作業は、II層を除去した面で行われた。この面で土色の相違による不整形な落ち込みが確認されたことから、これを精査するに至った。土色の相違は、黒褐色の基盤土に対し、落ち込み埋土A層ないしB層の褐色土が不整形な平面形状として確認されたものである。落ち込みの埋土はA、B、C層の大別三層に分けられる。A層は褐色土に黄褐色砂土が混ざる層、B層はA層よりも黄褐色砂土の混入が少なく、やや暗い褐色土層である。C層は黒褐色土で黄褐色砂質土が層状に混入する層である。

落ち込みは二ヶ所で検出され、北側部分では幅1～4m、一部くびれながら不整形に北東方向に伸びている。南側の落ち込みは幅2～7m、長さ20mにわたり不整形に広がっている。深さは20～40cmで、底面はほぼ平坦である。立ち上がりは、ややなだらかな部分と、底面から屈曲して斜めに立ち上がる部分がある。

遺物は土師器、陶磁器、銭貨等が出土している。（第87図 photo.124, 125）

1は木葉痕のある土師器甕の底部で、推定される底径は10.4cmである。II a層から出土している。2は落ち込み底面から出土した須恵器で、外面に軽いタタキが見られる。器厚は8.3～9.5mmで、胎土は暗灰色を呈し、白色粗砂粒を含む。3は落ち込みの検出面から出土した釘である。長さ31mmの小型

の平頭釘で、横断面形は長方形である。

4は天目茶碗の底部破片で、表土から出土したものである。高台径47mm、高台の高さ5.2mmで、器厚は見込部分で9.2mmである。釉調は黒色(10Y R1.7/1)を呈し、胎土は灰白色(10Y R8/2)である。17世紀前半の瀬戸天目茶碗と考えられる。

5は天目茶碗の腰部破片で、検出面から出土している。器厚は4.6～5.6mm、下半は露胎で、釉調は黒色(10Y R1.7/1)で僅かに褐色(10Y R4/6)を混じ、胎土は浅黄橙(10Y R8/3)となっている。18世紀代の瀬戸天目茶碗と考えられる。

6は香炉とみられる陶器の口縁部で、落ち込み底面から出土している。器厚は3.2～5.5mmで、推定される口径は128mmである。釉は内外面ともに灰白色(5Y8/2)で小貫入があり、御深井釉と考えられる。黒褐色(2.5Y3/1)の鉄絵が見られ、胎土は灰白色(2.5Y8/2)である。18世紀中頃の瀬戸美濃産鉄刷絵香炉と考えられる。

7～10はI b層の盛土から出土した肥前系染付磁器で、いずれも18世紀代の製品と考えられる。7は碗口縁部で、器厚2.7～6.5mm、推定される口径は92mmである。いわゆる「くらわんか碗」で、梅花文が見られる。8は推定口径79mmの笹文の碗、9は碗底部で、高台径は35mmである。見込に手描きの五弁花文が見られる。10は推定口径132mmの皿で、見込にコンニャク印判の五弁花文が見られる。

この他に、photo.124の16、17に示した18世紀中頃のくらわんか碗、18、19の高台内に「渦福」の銘が見られる染付磁器などが出土している。

11は瓦質陶器の口縁部破片で、器面は黒褐色、胎土は灰白色(5Y6/1)を呈する。口縁部は内傾し、内面は剥落している。推定される口径は282mmである。

12～14は「永樂通寶」で、いずれも落ち込みの底面から出土している。外径は12、13が22mm、14は20mm、厚さは12が0.9～1.0mm、13は0.9～1.1mm、14は0.4～0.8mmと薄い。重さは12が1.2g、13は1.6g、14は0.8gで、12では鋳抜けが見られる。いずれも模鑄銭と考えられる。

15はB 1層出土の「寛永通寶」である。重さ2.5g、外径24.3mm、外輪幅1.9～2.1mm、外輪厚1.0～1.1mm、孔郭幅0.5mm、孔郭厚1.0mm、穿孔6.3×6.5mmである。「通」の字はいわゆる「マ頭通」で、背文はない。18世紀前半の新寛永銭で、京都七条銭あるいは鳥羽銭と考えられる。

## (2) S 区

S区では、山裾の斜面部分に二面の平坦面があり、高さ50cmほどの段で区切られている。調査はこの面に遺構が存在するか否かを確認するために行われた。表土を除去し、粘性のある褐色土上面で検出作業を行って、遺構は確認されなかった。

出土遺物は、第87図の4に示す天目茶碗の底部がある。表土中から出土したもので、高台径48mm、厚さは腰部8.2mm、見込み9.2mmである。釉調は黒色(10Y R1.7/1)で、僅かに褐色(10Y R4/6)を混じ、胎土は灰白色(10Y R8/2)となっている。17世紀前半の瀬戸天目茶碗と考えられる。

## (3) まとめ

N区では陶磁器、銭貨などの遺物が出土しており、18世紀代の遺物はその主体を占めている。不整形な落ち込みについては、底面から18世紀中頃の瀬戸美濃産香炉が出土していることから、その形成は18世紀後半、もしくはそれ以降と考えられる。落ち込みの底面の在り方、あるいは壁の立ち上がり



の状況からは人為的な側面も見られるが、その平面形状や立地からすると、落ち込みの形成状況や性格については不明な点が多い。

## 2 B 地区 (第88図)

B地区は遺跡の北西部に位置し、八木沢川と丘陵斜面に挟まれた地区である。標高は5～7mで、北東の山裾部分でやや高くなっている。B地区の北東部分は、旧来から畑地として利用されており、昭和8年の航空写真にもその痕跡が見られる。

調査は八木沢川沿いに5m幅のトレンチを設定し、遺構の有無を確認することから始められた。表土を除去すると、A地区と同様に盛土層の存在が確認されたので、2m幅のサブトレンチで盛土層を掘り下げ旧表土を確認することとなった。

トレンチ南西部では盛土層(I b層)が1m以上あり、トレンチ内は湧水が溜まる状態となった。旧表土の標高は、周辺水田とほぼ同じ5m前後である。トレンチ北東部では盛土層が60～50cmと徐々に薄くなり、この下に礫を含むA層が見られた。これとともに石列が検出されたことから、調査は北東部の扇型に広がる地区を中心に行われることになった。

### (1) 基本層序

I a層は暗褐色土の表土、I b層は盛土層で八木沢川改修の際に盛られた土である。この下に角礫を含む黒褐色土A層がある。A 1層は旧表土で、A 2、A 8、A 9層には多くの角礫が含まれる。角礫は拳大から50cm以上の大型礫も含まれており、これらの層はK層の崩壊土もしくは、K層に含まれる礫を廃棄した層と考えられる。

K、L層は石列を伴う遺構面を構成する土層である。K層は十二層に細分され、暗褐色土と黒褐色土が数層の単位で互層を成している。L層は七層に細分され、暗褐色土と褐色土および下位は黒褐色土が堆積する。土層確認のトレンチ内では、L層の最上位および層中で大型礫が見られる。

### (2) 遺 構 (第89図)

K層最上位で構成される面は、北西方向に開く扇形に形成され、20mで80cm下がる程度の緩やかな傾斜がある。この面の北西縁は90cmほどの落差をもつ急傾斜の段で区画され、その縁辺に大型礫が並べられている。

二列に平行して見られる石列のうち、外縁の石列はK 1層上面で配石されたものである。(K 1層石列)これに対して内側の石列は形成層位が異なり、K 3層の上面で配置されたものである。(K 3層石列)また、最終段階のK 1層石列ができた時点では、K 3層石列のほとんどがK 1層中に埋没しており、二列の石列は完結した状態では併存していない。また、K層で構成される面からは石列以外の遺構は検出されていない。

大型礫の一部には、石を割る際に穿たれた矢穴が見られ、明らかに人為的に割り出されたものであることがわかる。石質は花崗岩で、背後の丘陵の基盤岩と同一である。

### (3) 遺 物 (第90図 photo.129)

1は鉄製の釣針で、軸頂部が欠損している。幅20mm、現存長27mm、軸部径2.3mm、重さは0.7gで、

軸部から緩やかに湾曲して針部に至る。針部には鐵が見られ、鐵から針先端までの長さは7mmである。出土位置は石列の南東、標高6.4mほどの地点で、層位はK3層石列の形成面である。

2は長さ50mmほどの平頭釘で、L字型に曲がっている。横断面型は方形である。K1期石列の南端部の検出面から出土している。

3は陶器皿で、推定される口縁部径は153mm、高台径は65mmである。器高は36mm、厚さは3～5mmで全体に薄手である。釉は見込部分と、口縁部から体部中ほどの内外面にかけて施され、腰部内外面は露胎である。釉調はにぶい黄褐色(2.5Y6/3)で、貫入が見られる。露胎部の色調は褐灰色(10YR4/1)、胎土は褐灰色(10YR4/1)ないしにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。出土層位はI d層である。

4は矢羽文丸型湯飲み碗で、口径は78mm、高台径29mm、器高49mmである。A層から出土しており、18世紀代の肥前染付磁器と考えられる。

5は染付磁器碗の底部破片である。高台径は42mmで、見込に菊花文、内外面に二重網目文が描かれている。18世紀前半から中頃の肥前染付磁器と考えられる。出土層位はA層である。

このほかに、photo.129の6～11に示す肥前染付磁器が出土している。6は高台径76mmの皿で、見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内に「渦福」の銘が見られる。7は碗の口縁部で、コンニャク印判の花文が見られる。8、9は外面に二重網目文のある碗、10は雨降り文、11は若松文の碗である。出土層位は6、7、9がI b層、8、10がA1層、11はA4層で、いずれも18世紀代の製品である。

12はA1層から出土した染付陶器碗の口縁部で、18世紀代の唐津産と見られる。13は大堀相馬の陶器掛け分け碗で、18世紀代のものと考えられる。出土層位および地点は1の釣針とほぼ同一である。

#### (4) まとめ

L層における大型礫の存在、さらにK層においては、二期にわたり大型礫を配石していることから、K、L層の形成は人為的なものであると考えられる。K1層、K3層の堆積およびこれらの層に伴う石列の存在は、これによって形成される面の拡張と、縁辺部の護岸を目的としたものとみられる。

ただし、このように土砂を盛り、さらに大型礫を配置するような土木工事で形成された区域を、どのような用途に用いたかは明らかではない。この区域からは、それを推察する手掛かりとなる遺構は検出されていない。

出土遺物は、おおむね18世紀代のものである。K3層石列の形成面においても18世紀代の遺物が出土していることから、石列およびこれらの形成層は、18世紀代もしくはそれ以降の所産と考えられる。

### 3 F 地区 (第91図)

F地区は遺跡の南西部に位置し、標高9～13mの山裾緩斜面に立地する。東西を尾根に挟まれ、北側は城館主体部に続く斜面に限られている。南側は緩やかに傾斜して水田面に至る。丘陵部に深く湾入した緩斜面の広がり、城館主体部の中央地区とほぼ同じ面積となっている。遺跡の中でも比較的広い緩斜面をもつ区域は、F地区と中央地区に限られており、このような立地における遺跡の在り方を明らかにすることが調査目的とされた。

#### (1) 基本層序 (第93図)

土層は第I層が表土、第II層から第IV層までが埋土、第V層、第VI層は遺構面下の土層となってい

る。第Ⅰ層は黒褐色土の表土で、耕作による攪乱土層である。第Ⅱ層は黒褐色ないし暗褐色土で、細別三層に分けられる。調査区北東部では、表土下は第Ⅲ層に接しており、第Ⅱ層見られない。Ⅱ a 層は北西部に部分的に見られ、Ⅱ b、Ⅱ c 層は広く面的に連続して第Ⅱ層を構成する。

第Ⅲ層は黒褐色土層で、十層に細分される。Ⅲ a、Ⅲ b 層は南東部、Ⅲ c 層は北西部に見られる土層で、Ⅲ d 層は北東の一部を除き広く面的に連続して分布する土層である。この下にⅢ e～Ⅲ i 層が堆積しているが、これらはいずれも部分的な分布を示す土層で、Ⅲ e、Ⅲ h 層は南東部に、Ⅲ f、Ⅲ g、Ⅲ i 層は北西部に部分的に見られる。

第Ⅳ層は黒褐色土、暗褐色土、および褐色砂層で構成され、十層に細分される。Ⅳ a～Ⅳ d 層は部分的な分布を示す土層で、Ⅳ a 層は南東部、Ⅳ b～Ⅳ d 層は北西部に堆積している。Ⅳ e 層は中央部から北東部にかけて見られる層で、暗褐色土を含む褐色砂層で他の層とは明瞭に識別される。層厚は最大35cmで、北西部、南東部を除き第Ⅲ層と接している。Ⅳ f 層は中央部に堆積する暗褐色土層である。Ⅳ g 層は東半部に分布し、Ⅳ g 2、Ⅳ g 3 層は北東部の一部に見られる土層である。Ⅳ層最下層のⅣ h 層は暗褐色土を含む褐色砂層で、Ⅳ e 層と類似しており、他の層とは明瞭に識別される。中央部から北東部にかけて見られ、層厚は最大25cmである。

第Ⅳ層の上面では、北西部において規則的な凹凸が見られる。深さは10cm前後、凸部の間隔が40～70cmほどで、土層観察面Sec. 1 では約14mの範囲にわたってこの凹凸が見られる。

第Ⅴ層は黒色土を含む黒褐色土で、この上面に遺構が見られる。第Ⅵ層は北西部で観察された暗褐色土で、表土に接しており、遺構面が削平された部分で見られる基盤土層である。第Ⅴ層上面には、中央部で規則的な凹凸が見られる。深さは10cm前後、凹部の間隔が1～1.2mほどで、土層観察面Sec. 1 では約16mの範囲にわたってこの凹凸が見られる。また、北西部では建物跡およびこれに伴う整地部が見られる。

## (2) 遺 構 (第92～96図)

F 地区では建物跡(MB 0 8)とこれに伴う整地部、また畑跡とみられる畝が検出された。建物跡は調査区北西部の標高10～10.6mの地点にあり、斜面を整地した平坦面に建てられている。畑跡は調査区の中央部から北東方向に広がっており、幅17m、長さ25mほどの範囲で検出されている。

### ・MB 0 1 建物跡

建物跡は緩斜面を整地し、平坦化した削平面に建てられている。整地は斜面上方を60cmほどの落差で切り削り、平坦部を造っている。整地部上方の段はほぼ等高線に平行し、長さ20mにわたって見られる。両端部では徐々に段差を減じ、やや弧状になって斜面に消える。南西側では整地部末端から、不規則な溝が斜面方向に続いている。この整地部は、建物跡より広い範囲に造られ、南西側で柱穴より4m、北西側で6mほど広がった部分まで見られる。

埋土は黒色土のA層、黒褐色土ないし暗褐色土のB層の大別二層となっている。A層は三層に細分され、A 1 層は整地部の南西部で、またA 3 層は中央部で埋土上層の主体を成す。B層は細別五層に分けられ、B 2 層が面的な広がりをもつ埋土である。B層はMF 0 1 炉跡のおもな埋土になっており、建物跡廃絶直後の埋土である。

MB 0 1 建物跡は桁行8.85m (29.2尺) 4間、梁行3.90m (12.9尺) 2間の規模で、桁行軸方向はE-22°-Nのほぼ東西棟である。

桁行柱間は、南側柱(P13-P17)で西から1.60m(P13-14)、1.70m(P14-15)、2.80m(P15-16)、2.65m(P16-17)となっており、それぞれ5.3尺、5.6尺、9.2尺、8.8尺の間尺を示す。北側柱では、P1、P2、P3、P6、P9が南側柱に対応しており、P5、P7、P8がこれらの間に見られる。柱間は西から1.50m(P1-2)、1.85m(P2-3)、1.95m(P3-5)、0.95m(P5-6)、0.80m(P6-7)、0.85m(P7-8)、0.95m(P8-10)となっており、それぞれ5.0尺、6.1尺、6.4尺、3.1尺、2.6尺、2.8尺、3.1尺の間尺を示す。

梁行柱間は、西側柱(P1,2,13)で南から1.65m(P12-13)、2.25m(P1-12)となっており、それぞれ5.5尺、7.4尺の間尺を示す。東側柱(P9,19,17)では南から1.15m(P17-19)、2.75m(P9-19)となっており、それぞれ3.8尺、9.1尺の間尺を示す。

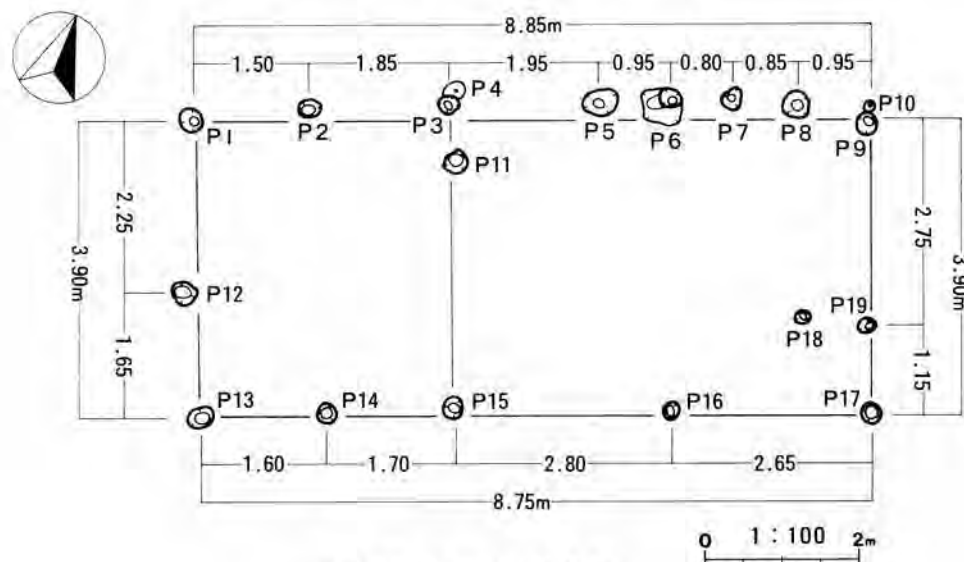
その他に、桁行の北側柱P3の南0.75m(2.5尺)にP11、梁行の西側柱19の西0.90m(3尺)にP18が見られる。

柱穴P3-P15を境に、建物跡の東西部分で対応する桁柱の柱間が異なり、西部分では5.0~6.1尺、東部分では8.8~9.5尺となっている。建物跡西半部ではMF01炉跡および焼土が検出されている。炉跡は長さ1.8m、幅1.0m、深さ30cmの南北に長い長方形を成し、底面に焼土が見られる。

柱穴の重複はP3,4、P9,10で見られる。P3、P9が新しく、これらが建物跡を構成する柱穴である。柱穴平面形は円形のものが多く、径は20~35cmを測る。P5、P6は径50cmほどで不整形である。柱痕をもつものはP1、P3、P5、P6、P7、P8、P11、P13、P18で、桁行北側柱に柱痕を残すものも多く、柱痕径は7~15cmである。柱穴の深さは12~88cmとなっているが、南側柱穴は掘込面で検出されたものではないため、本来の柱穴深さとはなっていない。柱穴底面のレベルを比較すると、標高10.0m前後のものがP2、P5、P7、P8、P11、P12、標高9.75m前後のものがP1、P3、P6、P9、P18、標高9.55m前後のものがP13~P17、P19となっている。

建物跡の北東部にも柱穴が見られ、P20は検出面からの深さ58cmを測るものであるが、建物跡を構成する柱穴ではなく性格は不明である。

建物跡の西7mほどの整地部外に、MF02が検出されている。深さ25cm、径80cmの円形で、南側を除き、壁の上半部に石を埋め込んでいる。炉跡の可能性が考えられるが、明瞭な焼土は見られず、埋土状況からはその性格を断定することはできない。



第9図 MB08建物跡

## ・畑 跡

調査区中央部から北東部にかけて、畑跡と考えられる畝の広がりが見出されている。第IV層の最下層である褐色砂層IV h層を除去すると、黒褐色の第V層上面で規則的な凹凸が見られ、これが斜面方向に広がっていることが確認された。畝の広がり、最も広い部分で幅17m、長さ25mほどの範囲で、遺構図に示した畑跡の面積は約220㎡、本来はさらに北東部に広がっていたものとみられる。畝の方向はほぼ北東向きで、北側でやや北々東、東側でやや東北東に曲がっているが、いずれも等高線に直行する斜面方向となっている。調査区内では標高8.4～11.4mの範囲で見出されている。畝の深さは10cmほどで、幅は凸部が20～65cmで50cm前後の部分が多く、凹部の幅は30～70cmで60cm前後の部分が多い。凹部の間隔は1～1.2mで、畑幅の最も広い部分では、17m幅で十七条の畝が見られる。

畑跡の中に柱跡(P21～28)が見出されている。径20～40cmのほぼ円形で、深さは25～65cmである。柱穴の平面配置は不規則で、建物跡を構成するものではない。P24、P25、P27、P28に柱痕が見られ、P24、P25の柱痕には、にぶい黄褐色砂土、P28の柱痕下部には褐色砂土が見られる。またP24、P25、P27、P28の柱穴掘り方埋土には褐色砂土ないし、にぶい黄褐色砂土が見られる。畑跡を覆土するVI h層は褐色砂土であることから、これを柱穴掘り方に含むP24、P25、P27は、VI h層堆積後に掘り込まれたものと考えられる。

また基本土層の項で述べたように、調査区北西部では第IV層上面にも規則的な凹凸が観察されており、これも畑の畝の痕跡とみられる。平面的な広がりには把握されていないが、遺構の埋没過程においても畑地として使われていた部分があったとみられる。

## (3) 遺 物 (第97～99図)

F地区では須恵器、渥美、常滑、鉄製品、銭貨等が出土している。特に鉄製品は点数も多く、鏃、刀類、紡錘車など器種も多様である。

### ・須恵器、陶器

1は須恵器の小型壺で、全体のほぼ半分と頸部が欠損している。胴部最大径49mm、底径33mm、現存部での高さ43mm、頸部外径24mmである。器厚は頸部2.7mm、胴部5.4mm、腰部6.5mmで、底部中央は2.4mmと薄くなっている。器面は全体に黒褐色ないし灰色(5Y5/1)で、肩部分では浅黄色(2.5Y7/3)の小斑点が見られる。胎土は褐色(10YR4/1)を呈し、淡黄色および石英質の砂粒を少量含む。底面にはロクロ右回転の糸切痕が見られる。MB08建物跡柱穴検出面から出土したものである。

2は調査区中央部の畑跡遺構面から出土した陶器で、横位に連続した押印が見られる。押印は長軸方向で欠損しており押印の一単位は完結していないが、最大幅27mmの押印が斜方向に三単位連続して見られる。文様は平行な凹凸の条が連続するもので、凹部幅1.4～2.5mm、凸部幅は1.7～2.3mmである。外面は縦方向の軽い調整後、押印を施しており、内面ではヨコナデの調整が見られるが、成形時の凹部が残る。器厚は9～11mm、器面および胎土は灰色(5Y5/1)を呈し、白色砂粒を少量胎土に含む。12世紀代の渥美産陶器と考えられる。

3～6は常滑の甕破片で、建物跡の南および東周辺部の遺構面から出土したものである。3は口縁部で、縁帯は上方にやや盛り上がるにぶいL字状を成す。外面は、にぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、オリーブ黄色(5YR6/3)の自然釉が見られ、内面では浅黄色(2.5Y7/3)の発泡した自然釉が厚く覆っている。胎土は灰白色(2.5Y7/1)を呈し、径2～3mmのゴマ粒大の細礫と白色砂粒を少量含む。器厚

は、縁部12mm、屈曲部8.7mm、口頸部8.4~11mmの胎土厚となっており、推定される口径は25.6cmである。4は肩部破片で器厚は8~11mm、発泡した自然釉が10mmほどの厚さで付着している。5は腰部破片で器厚は13~17mm、内面に自然釉が見られる。6は肩部破片で器厚は12~14mm、外面は灰赤色(2.5 YR 4/2)を呈し、自然釉は見られない。3~6は胎土、色調、自然釉の状態などから同一固体の破片と見られる。3の口縁部破片は、その形態から12世紀末~13世紀初頭の常滑(94赤羽・中野編年の常滑一4段階)と考えられる。

7は調査区中央部のⅡc層から出土した型打ち菊皿で、器厚は口唇部3mm、胴部破片端で7.3mm、推定される口径は140mmである。釉調は浅黄色(5Y 7/3)で貫入が見られ、胎土は灰白色(N7/1)である。17世紀代の瀬戸・美濃産御深井釉菊皿と考えられる。

8は播鉢口縁部破片で、調査区北西部のⅡc層から出土したものである。推定口径は29.3cmで、櫛目は一単位7条、幅19mmとなっている。9は表土から出土したおろし皿底部である。櫛目は6条一単位で、円形、直条ないし放射状におろし目が付けられている。10は墨書のある石製品で、北東部Ⅱc層から出土している。長さ41mm、幅30mm、厚さ18mmのほぼ直方体の石で、各面は平滑に調整されている。墨痕は正面および側面の二面に見られる。文字はかなり不鮮明であるが、正面は「此」と判読され、この下に「助」と推測される文字がかすかに見られる。側面は「口」「屋」と推定される。

この他に、18世紀前半から19世紀にかけての肥前系染付磁器が出土している。これらはおおむね第Ⅱ層ないし第Ⅲ層上部からの出土である。

#### ・鉄製品

11~25は鉄製品で、すべて調査区の西半部から出土したものである。層位は14、15、18、20がⅣ層中、その他は建物跡柱穴検出面である。11、12、16、19、22、24、25は建物跡北側柱付近、13、17、21、23は建物跡の南周辺から出土している。

11は太刀の茎部分で、現存長106mm、最大幅17mm、厚さ3~6mmで、茎尻から78mmの部分に径4mmの目釘穴が見られる。12は小刀の刃部で目釘穴の部分で折損している。切先から棟区までは154mmあり、刃部幅は17mm、棟区から20mmの部分に径4mmの目釘穴がある。13は完形品の小刀で、全長268mm、茎長69mm、棟区から切先までは199mmで、刃部は直状である。茎幅は12~17mm、刃部幅は24mmで、棟区から26mmの部分に径3mmの目釘穴が見られる。

14は軸頂部と針部が欠損した釣針である。現存長46mm、幅23mmで、軸部径は3~4mmである。15は先端部が小さく曲がり中央部で屈曲した鉄製品で、器種は不明である。横断面形はほぼ長方形で、展開した長さは9cmほどになる。

16は完形品の狩股で、鏃部の幅54mm、長さ69mmで、茎部は長さ71mm、断面は4×6mmの長方形である。茎はややねじれて茎尻に至る。保存処理後の重量は31.3gである。17も狩股であるが、保存状態が悪く、鏃部先端と茎尻が欠損している。現存長は鏃部50mm、茎部35mmで、鏃部幅は37mm、茎部断面は4mmの方形である。重さは19.8gとなっている。

18は先端部が鏃状の形態を成し、薄く先鋭に加工されたものである。末端部は欠損しており、現存長は88mmで、保存処理後の重量は6.7gである。

19は長さ106mm、幅18mmで、板状部分の上縁両端が曲げられたものである。板状部分の下縁の長さは90mmで、上縁に比べかなり薄くなっており、中央部でわずかにくぼんでいる。上縁部の一端は、ほぼ直角に折り曲げられており、この部分は断面形が5mmの方形を成し、釘状になっている。長さは27mm

あり、木質が付着している。板状部分の内側の面にも木質の付着が見られる。もう一端はやや内側に曲がっており、端部は欠損している。これは穂摘み具様の鉄製品で、下縁を刃部とし釘状の部分で木質の握部に固定したものと考えられる。下縁中央のくぼみは使用により減耗した部分と見られる。

20はほぼ完形の刀子で、切先から棟区までが79mm、茎は長さ49mmである。21は刀子の茎部分である。刃部は棟区から30mmほどの部分で欠損しており、茎尻も欠いている。

22は断面形が方形角状の鉄製品で、先端部に向かって徐々に細くなっている。一端が欠いており、現存長は130mmである。23は完形品で、先端部がやや丸みを帯びた方形の断面を成し、中央部の断面は7×6mmの長方形となっている。下端部は薄くなっており、長さは95mmを測る。22と23は錐と考えられる。

24は長さ269mm、幅7mm、厚さ5mmの棒状の鉄製品で、一端が曲がっており、断面形は長方形である。両端は欠損しているが、直上部の端部はやや薄くなっており、末端に近い部分と見られる。

25は、ほぼ完形の鉄製紡錘車で、長さ251mm、円盤の径は53mm、軸の太さは6mmである。

鉄製品ではこの他に釘類も出土している。

#### ・ 銭 貨

F地区では第IV層および遺構面から6枚の銭貨が出土している。出土地点は26、28、31が建物跡とその周辺、27、29、30は調査区中央部である。層位は29がIV e層、その他はすべて遺構面からの出土である。

26は「至道元寶」で、外径23.4mm、外輪幅2.6～2.9mm、外輪厚1.0mm、孔郭幅0.9mm、穿孔6.0×6.1mm、重量は2.1グラムである。銭文は楷書体で、「元」の二画目の左ハネが見られない。穿はやや不整形で、背面の外輪、内郭は不明瞭である。建物跡の西から出土している。

27は摩滅により銭文が不鮮明であるが「元祐通寶」と判読される。計測値は、外径24.6～24.8mm、外輪幅2.8～3.0mm、外輪厚1.0～1.3mm、孔郭幅1.1mm、穿孔5.9×6.0mm、重量は1.6グラムである。銭文は草書体で、「寶」のウ冠が右下がりになっている。畑跡のほぼ中央部の畝の面から出土している。

28は銭文の一字を欠いているが「皇宋通寶」とみられるもので、外径24.5～24.9mm、外輪幅2.4mm、外輪厚1.1～1.3mm、孔郭幅0～0.5mm、穿孔7.7mm、現存重量は1.5グラムとなっている。銭文は篆書体で、穿は不整形で郭抜である。建物跡の北東部遺構面から出土している。

29は保存状態が良く銭文も明瞭である。篆書体の「治平元寶」で、調査区中央部のIV e層から出土している。計測値は、外径24.7～24.9mm、外輪幅2.0～2.6mm、外輪厚1.2～1.4mm、孔郭幅0.4～0.5mm、穿孔6.9×6.8mm、重量は2.3グラムである。孔郭幅が狭く、「治」に特徴がある。「平」の縦線が第一画目まで通っており、「元」は角張っている。

30は27と同一の層位、地点から出土した「紹聖元寶」である。計測値は、外径24.7～24.8mm、外輪幅3.5～3.9mm、外輪厚1.2～1.3mm、孔郭幅0.8mm、穿孔6.1×6.3mm、重量1.5グラムである。銭文は草書体で、外輪が広く文字は小さい。

31は銭文の一字を欠いているが「政和通寶」とみられ、建物跡整地部の西側から出土している。計測値は、外径24.9mm、外輪幅1.8～2.1mm、外輪厚1.2～1.3mm、孔郭幅0.6～1.0mm、穿孔5.3×5.5mm、現存重量は1.9グラムである。

これら6枚の銭貨は、いずれも10世紀末から12世紀初頭の北宋時代の銘をもつものである。

#### (4) まとめ

F地区では、北西部にMB 0 8建物跡、北東部に畑跡と考えられる畝の広がりが見出されている。これらはいずれも第V層上面で検出されたもので、層位的には同一時期の所産と考えられる。これらの生活面からは、12世紀代の渥美産陶器、13世紀初頭の常滑産陶器、および北宋代の銘をもつ銭貨が出土している。またこれよりも年代の下る遺物は、これらの遺構面には見られず、第Ⅲ層上部よりも上層に至って17世紀から19世紀の遺物が見られるのみである。これらの点から遺構の年代は、13世紀ないし13世紀初頭以降の中世に属するものと考えられる。

出土遺物では、建物跡に伴う鉄製品が注目される。ひとつには、刀子、小刀、狩股、錐、紡錘車、穂摘み具様鉄製品など、武具や生産・加工用具等の多様な器種が一括して出土していることである。これは当地域の中世における鉄製品の、ひとつの在り方を示すものであり、出土遺物の少ないこの時期の資料の間隙を埋めるものである。

さらには、これらの遺物が古代から中世に至る各種鉄製品の変遷を示す資料となり得ることである。たとえば、ここで出土している穂摘み具様鉄製品では、平安時代から同様な鉄製品が見られるが、木部への固定部分の状態がこれと異なり、形状の変化が認められる。このように前後の時期の資料との比較によって、形態変化や各種鉄器の出現消滅など、鉄製品の変遷をたどるには良好な資料と考えられる。



## 第Ⅳ章 古代の遺構と遺物

古代の遺構は遺跡の西半部と東端部に見られ、竪穴住居跡27棟、土坑18基などの遺構が検出されている。竪穴住居跡は丘陵上の限定された地形の中で、数棟ずつまとまって検出されており、小規模ながら集落を構成している。遺構は尾根上部分、南向き斜面部分および緩斜面部分など相異なる立地の中に存在し、集落立地の多様性を示している。

古代の遺構が検出された遺跡西半部を西地区、東端部を東地区とし、各地区の調査結果を以下に報告する。

### 第1節 西地区 (第100図)

西地区は、遺跡西半部に見られる南西から北に伸びる尾根を中心とした地区で、南北120m、東西130mほどの範囲にわたっている。地形的には尾根、谷、斜面部分に分けられ、調査面積も広範であることから、この地区をW1区からW6区の小区に分け、各区ごとに遺跡内容を記述する。

#### 1 W1区 (第101図、photo.137~140)

西地区の最も西に位置する尾根上の調査区である。この尾根は、幅8m~12m、長さ70mにわたって北向きに伸びており、標高は27m~34mとなっている。ここでは竪穴住居跡8棟、土坑1基が検出されている。

##### (1) HH01竪穴住居跡 (第102~104図、photo.141~145)

尾根先端部から5mほどの地点で検出されており、南北3.5m、東西4.6mの東西方向に長軸をもつ長方形の竪穴住居跡である。床面の深さは検出面から50cmほどであるが、掘込面が北に傾斜しているため南北で壁高が異なり、南側では90cm、北側では25cmの壁高を測る。北壁には1mほどの張り出し部分が見られ、緩やかな傾斜で床面に続いている。

埋土はA層、B層、C層の大別三層で構成され、黒褐色土のA層、B層がその主体を占めている。A、B層は、これに混入する暗褐色土の比率によりそれぞれ二層に細分され、B2層の一部は床面に接している。黄褐色土のC層は壁周辺に流入した埋没当初の堆積土で、暗褐色土の混入状態で二層に細分されている。

床面は平坦で、壁の立ち上がりはやや外傾している。西側から南西角の部分には壁下に浅い溝が見られる。床面にはP1~P9のピットが検出されており、P1、P2、P4、P5が最終期の柱穴とみられ、P7、P8、P9はこれ以前のピットである。P1は径25cm、深さ22cmの柱穴で、径10cmほどの柱痕が見られる。P5は径40cm、深さ24cmで柱痕は見られない。P2、P4は東壁下にあり、掘方の径は30cm~40cm、深さは50cm前後で、P2には径20cmほどの柱痕が見られる。北側中央には床面と時期を異にする土坑が見られ、これは深さ50cm、径1.3m前後の楕円形を呈し、黄褐色土を埋土としている。

かまどは南壁と東壁に新旧二基検出されている。東壁かまどは煙道の長さ2mで、ソデおよび焼土

は見られず、旧かまどと考えられる。南壁かまどは、燃焼部に30cmほどの範囲で焼土が見られ、両ソデは礫を芯としたものである。煙道は長さ1.2mで、煙道底面は煙出部に向かって傾斜している。煙道末端からほぼ垂直に1.6m立ち上がり煙出に至る。燃焼部からは土製支脚が出土している。

第104図1～4は土師器甕であり、1は煙出し底面から、2・3は埋土中から、4は竪穴周辺部から出土している。1は体部に最大径を有するもので、口縁部が外反し口唇部がコの字形となる。また、頸部には段を有する。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面が横方向の弱いヘラナデ、体部内面が横方向の強いヘラナデである(C類)。2～4は底部破片でいずれも底面が張り出すが、3はやや張り出しが小さい。器面調整は4の外面にナデツケがあるほかは不明瞭である。また、2・3は木葉痕を有する。

5～8はカマド支脚であり、5・6・8は底部、7は体部の破片である。5、6の底径は9.5cm、8の底径は11cmである。いずれも幅2cm程度の粘土紐を積み上げており、器面調整は見られない。

9は床面から出土したフイゴ羽口である。体部の最大径は7.5cm、内径は3～4cmであり先端部にスラグ様の付着物が認められる。

10～12は流紋岩を用いた砥石であり、10はカマドの袖に用いられたものである。いずれも縦長の垂角礫を用いており、複数の使用面が認められる。

なお、これら以外に土師器内黒坯の小片や鉄滓および鉄塊系遺物等が出土している。また須恵器は出土していない。

## (2) HH02 竪穴住居跡 (第105、106図、photo.146～148)

HH01 竪穴住居跡の南7mに位置し、南北3.6m、東西4.3mの東西方向に長軸をもつ長方形の竪穴住居跡である。床面の深さは検出面から40cmほどであるが、緩やかな斜面に掘り込まれているため壁高は異なり、南側および西側では30cm前後の壁高となっている。

埋土はA層、B層、C層に大別され、A層は黒褐色土層、B1層、B2層が褐色土層で、これらが埋土の主体を占めている。B3層は東西の壁付近に見られる明黄褐色土層で、C層は床面中央部に堆積する黒褐色土層である。

床面は平坦で、壁はやや外傾して直状に立ち上がる。南側の壁下には浅い溝が見られる。床面にはP1～P11のピットが検出されているが、最終期の柱穴はP1、P2、P10である。P1は径28cm、深さ23cmの柱穴で、埋土は上位に黒褐色土、下部に黄褐色土が見られる。P2は径28cm、深さ30cmで埋土最上位に黒褐色土、この下に黄橙色土、黄褐色土が見られる。P10は径36cm、深さ32cmで褐色土を埋土としている。P4には柱痕が見られるが、これは床面まで立ち上がらず上部にG1層が入っている。かまどの前のP8は、埋土K1層の上にかまど燃焼部の焼土が見られ、時期を異にする柱穴である。

かまどは南壁の中央に位置し、燃焼部に30cmほどの範囲で焼土が見られ、ここに支脚の石が立ったままの状態で見出されている。両ソデに礫を用い、これに長さ50cmほどの礫を乗せ燃焼部を覆っている。煙道は長さ1.3mで、煙道底面は中ほどで低くなり、煙道末端からほぼ垂直に70cm立ち上がり煙出に至る。埋土は、底面に焼土を含む褐色土のd層が見られ、この上に黄褐色土、明黄褐色土のc層が堆積し、煙道部を埋めている。

第106図1～6は土師器甕である。1・2は口縁部が外反し、体部上半に最大径を有するもので、頸

部には明瞭な段を持たない(B 2 ①類)。器面調整は1が口縁部内外面ともにヨコナデ、体部外面が縦方向の強いヘラナデ、内面が横方向の強いヘラナデである。

3～6は底部の破片でありいずれも張り出しが認められるが、6はやや張り出しが弱い。器面調整は3の外面が縦方向の弱いヘラナデ、内面が横方向のハケ目で、4の外面が縦方向のヘラケズリおよび横方向の弱いヘラナデ、内面が横～斜め方向の弱いヘラナデで底部内面付近がナデツケである。

5・6は底面に木葉痕が認められる。

なお、これら以外に図示できなかったが土師器内黒坏の破片や赤褐色厚手土器片・フイゴ羽口片・鉄滓・鉄塊系遺物等が出土している。また須恵器は出土していない。

### (3) HH03 竪穴住居跡 (第107、108図、photo.149～153)

HH02 竪穴住居跡の南東3mに位置し、直径3.2mのほぼ円形の竪穴住居跡である。床面の深さは検出面から58cmほどで、床面は平坦である。壁はやや外傾して直状に立ち上がる。

埋土はA層、B層、C層に大別され、黒褐色土のA、B層が埋土の主体を占めている。A層は黒褐色土ににぶい黄褐色土を含む層で、A2層に混入土が多く含まれる。B層はA層よりも多くの混入土が含まれる層で、A層、B層は下位に至るほど黄褐色土の混入率が高くなっている。C層は壁下付近に見られる明黄褐色土層で、埋没初期の堆積層である。

床面にはP1～P6のピットが検出されている。P1～P4の埋土には黒色土が含まれ、これらのピットが竪穴の柱穴を構成していたとみられる。これらのピットは径10cm～20cm、深さ12cm～22cmで、P4が最も深い。この他に北西側および東側の壁下に径8cmほどの小柱穴が見られる。P5は径30cm、深さ10cmほどのピットで、埋土は黄褐色土である。P6は南側の壁下に見られる土坑で、長さ1.5m、幅0.7m、深さ30cmを測り埋土は黄褐色土である。P5、P6は埋土状況からみて生活面に伴うピットではない。

かまどは南西壁にあり、燃焼部に30cmほどの範囲で焼土が見られる。ソデには大型の礫が据えられており、煙道入口には長さ50cmほどの礫がソデ石の上に乗せられている。煙道は長さ1.5mで、煙道底面は煙出部に向かって低くなり、煙道末端で60cmほど立ち上がり煙出に至る。かまど埋土は、煙道底面に焼土、木炭を含むにぶい黄褐色土のg層が見られ、この上に崩壊土とみられる明黄褐色土e層が堆積し煙道部を埋めている。

出土遺物は、かまどの前の床面から土師器甕、かまどの南のC層からは坏が出土している。

第108図1はロクロ使用の土師器坏で、底部から体部にかけてやや内湾気味に、口縁部がほぼ直上に立ち上がる。回転系切りで切り離れた後に体部下半を横方向の手持ちヘラケズリで再調整する(B ③類)。内面は横方向のヘラミガキが認められ、内黒処理されている。外面の口縁部から体部中央にかけてタール状の付着物が認められ、下半はやや磨滅している。胎土はやや密で、白色鉱物などの細砂を若干含む。法量は推定口径13.8cm、器高5.8cm、底径5.6cmである。

2は口縁部の外反する土師器長胴甕で、最大径は口縁部にある。口縁部と体部の境界は明瞭であるが、段は認められない。底部は強く張り出している(A 2 ②類)。器面調整は口縁部内外面ともにヨコナデで、外面が縦方向の弱いヘラナデ、内面が横方向の強いヘラナデが認められ、底部付近は内外面ともにナデツケ(外面は指によるものか)が認められる。底面には木葉痕が認められる。胎土はやや疎で粗砂を多く含む。法量は口径(最大径)23.7cm、器高24.1cm、底径12.0cmである。

3は管状の銅製品であり、接合面が認められず鑄造品の可能性が大きい。実測図下端に幅1mmの沈線が横方向にめぐり、上半には横方向の不整な擦痕が認められる。直径1.1cm、長さ3.3cm、厚さ1mmである。なお、図示した以外に赤褐色厚手土器片、鉄滓が出土しているが、須恵器は出土していない。

#### (4) HH04 竪穴住居跡 (第109~112図、photo.154~159)

尾根のほぼ中央部に位置し、HH03 竪穴住居跡に隣接して検出されている。南北5.0m、東西5.1mの方形の竪穴住居跡で、南壁中央がやや張り出している。床面の深さは検出面から50cmほどで、床面は平坦である。壁はやや外傾して直状に立ち上がっているが、南壁の中央部では立ち上がりやや斜めになっている。かまど煙出部はHH03 竪穴住居跡に切られており、HH04 竪穴住居跡はHH03 竪穴住居構築前のものである。

埋土は三層に大別され、埋土上位のA層は黒褐色土層、中位のB層は明黄褐色土層で、竪穴の北半部に半円状に広がっており、層厚は20cmほどである。B層は北側からの一方的な流入を示しており、HH03 竪穴住居の掘り上げ土の流入と考えられる。C1層、C2層は暗褐色土層で、B層流入直前の状態を示している。C1層は南半部に見られる土層で、C3層、C4層は壁下に堆積している。

東壁から北壁にかけて壁下に浅い溝が見られる。床面にはP1~P14のピットが検出されている。P1からP4は掘方の径40cm、深さ55cm~68cmの柱穴で、南壁下のP3、P4には径8cm前後の柱痕が見られ、P4の柱痕は内側に約10°の傾きをもつ。柱穴埋土は黄褐色土ないし明黄褐色土が主体を占める。その他のピットは深さ10cm~20cmほどで浅く、P1~P4が主柱穴とみられる。主柱穴の配置は矩形を成し、柱間は東西方向でP1-P2が3.10m、P3-P4は3.05m、南北方向ではP1-P4が3.58m、P2-P3は3.57mで規格化されている。柱間の長短辺の比は1.18となる。

かまどは北壁の中央に位置し、燃焼部に35cmほどの範囲で焼土が見られる。ソデには大型の礫を据え、煙道入り口は両側とその上部を礫で囲っている。煙道は長さ1.3mで、煙道底面は煙出部に向かって低くなっている。埋土は、煙道埋土a層が黒褐色土で、b2層は焼土を含む黒褐色土である。燃焼部埋土のb4層、b5層、b6層は焼土を含む褐色土である。かまどの左ソデ手前から土師器甕が出土している。

第111図1~3は須恵器坏であり、いずれも破片ではあるが底部から体部にかけて直線的ないし内湾気味に立ち上がるものとみられる。口縁部形態は1がほぼ真直で(A類)、2がやや外反気味であるがほぼ真直である(A類~B類)。3は底部の破片であるが糸切り無調整である(B⑥類)。いずれも色調は灰褐色を呈し、胎土はやや粗く細砂を含む。法量は1が推定口径14.7cm、2が推定口径13.9cm、3が推定底径6.0cmである。

4・5はロクロ使用土師器坏であり、いずれも内面を黒色処理する。4は底部から体部にかけていくぶん内湾気味ながらほぼ直線的に立ち上がり口縁部の内湾するもので、体部下半から底面全体を手持ヘラケズリにて再調整する(A2⑤類)。底面には「十」字形の線刻が認められる。内面は体部中央が横方向、底面が放射状のヘラミガキにより調整されるが、調整がやや粗くロクロ目が確認できる。5は体部にやや丸味を持ち、口縁部の外反するもの(B類)で、内面は横方向のヘラミガキで調整される。4は胎土がやや粗で、5はやや密であり、いずれも細砂を含む。法量は4が推定口径15.6cm、器高6.5cm、底径5.6cm、5が推定口径14.6cmである。

7・9~11は土師器甕である。7、9、10は口縁部の外反する長胴甕で、いずれも最大径は口縁部

にある。口縁部と体部の境界は比較的明瞭であり、7・9はわずかな段を、10は浅い沈線が認められる(A1①類)。器面調整は9・10が口縁部内外面がヨコナデ、外面が縦方向の強いヘラナデ、内面が横方向の弱いヘラナデである。7も同様と思われるが内面が磨滅している。

11は球胴甕で、最大径は体部にある。口縁部が強く外反し、体部との境界は明瞭であるが段は認められない(D1類)。器面調整は口縁部内外面ともにヨコナデ、外面が縦方向の強いヘラナデ、内面が斜方向の弱いヘラナデである。

これらの胎土はいずれもやや粗く、白色鉱物等の細砂を多く含む。法量は7が推定口径17.8cm、9が口径21.5cm、器高30.3cm、底径11.8cm、10が推定口径22cm、11が推定口径24cmである。

6・8・12は土師器の小形甕と思われる底部破片である。6は丸底風平底、8は平底、12は平底で張り出しを有するものである。器面調整は6の外面が縦方向の弱いヘラナデ、内面が横方向のナデツケで、8の外面が斜方向のヘラケズリ、内面がナデツケである。12は不明である。胎土はいずれもやや粗く白色鉱物等の粗砂～細砂を多く含む。法量は6が底径4cm、12が推定底径6cmで、8は不明である。

第112図の13は流紋岩の垂角礫を用いた砥石で、4面の使用面が認められる。実測図上半は本住居跡カマドの右側支脚として再利用されていたもので、下半はHH07の床面から出土しており、両者が接合している。

14はA1層上部から出土した「洪武通寶」である。外径23.6mm、穿孔部径6.5mm×6.3mmを計る。

なお、図示した以外には赤褐色厚手土器片、鉄塊系遺物、鉄滓、羽口片等がある。

#### (5) HH05 竪穴住居跡 (第113～115図、photo.160～162)

HH04 竪穴住居跡から南へ5mほどの位置で検出されており、南北4.5m、東西4.8mの東西方向にやや長い平面形を成し、北東および南の隅がわずかに張り出している。床面の深さは検出面から55cmほどで、床面は平坦である。壁はやや外傾して直状に立ち上がり、南壁では壁高が80cmとなっている。

埋土は四層に大別され、埋土上位のA層は暗褐色土層、中位のB1層、B2層はにぶい黄褐色土に明黄褐色土を含む層、B3層は暗褐色土に明黄褐色土を含む層である。このB層は主に竪穴の南半部に堆積しており、層厚は最大60cmほどである。B層は南側からの一方的な流入を示しており、また地山起源とみられる黄褐色土が主体となっていることから、南側周辺の遺構を構築した際の掘り上げ土の流入と考えられる。C1層は黒色土、C2層は黒褐色土層で、D1～D4層はいずれも黄褐色土を主体とする層である。

北壁を除く壁下の床面には浅い溝が見られる。床面にはP1～P9のピットと、M1～M4の溝が検出されている。P1、P2、P4は掘方の径40cm、深さ40cm～70cmの柱穴で、P3は古い掘方を切って掘られた柱穴で、50mm方形の掘方をもち径8cmほどの柱痕が見られ、柱痕は内側に約5°の傾きをもつ。これらの柱穴埋土には黄褐色土が含まれる。

その他のピットは深さ5cm～10cmほどで浅く、P1～P4が主柱穴とみられる。主柱穴の配置は矩形を成し、柱間は東西方向でP1-P3が3.14m、P2-P4は3.23m、南北方向ではP1-P2が2.53m、P3-P4は2.48mで規格化されている。柱間の長短辺の比は1.27である。

M1～M3は床面に伴う幅20cm、深さ12cmほど溝で、それぞれ壁に直交した方向に伸びる。M1と

M2の間隔およびM1、M3と壁までの距離はほぼ1mである。

かまどは西壁の中央に位置し、燃烧部に30cmほどの範囲で焼土が見られる。ソデは黄褐色土でつくられ、d2層、d3層には焼土を含む。ソデを取り除くと礫の据方の痕跡が見られた。煙道は長さ1.4mで、煙道底面は煙出部に向かって低くなり、末端部で一段低くなっている。煙出への立ち上がりはほぼ垂直に50cmである。埋土は、b層は黒色土ないし黒褐色土で、a2層は明黄褐色土である。

第115図1・2は須恵器坏である。いずれも底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がる。1は底部破片で糸切り無調整である(B⑥類)。2は内湾気味に立ち上がり、口縁部がやや外反気味である(B類)。

1はくすべ色を呈するもので胎土、焼成ともに良好である。2は口縁部がくすべ色、体部が灰白色を呈し、やや脆弱である。法量は1が推定底径8.2cmと想定したがもっと小さくなる可能性が大きい。2は推定口径13.4cmである。

3・4は土師器甕の底部破片である。いずれも張り出しがあり底面に木葉痕が認められる。器面調整は3の内外ともに横方向の強いヘラナデおよび弱いヘラナデである。4は磨滅により不明である。胎土はいずれも粗く、粗砂を多く含む。法量は3の推定底径が9.8cmである。

なお、図示した以外には土師器内黒坏片、赤褐色厚手土器片、鉄塊系遺物、鉄滓等が出土している。

#### (6) HH06 竪穴住居跡 (第116図、photo.163)

HH05 竪穴住居跡から南へ7mほどの位置で検出された竪穴住居跡で、南北3.25m、東西4.0mの長方形を呈する。床面の深さは検出面から20cmほどで、床面は平坦である。壁はややなだらかに立ち上がり、南壁では壁高が40cmほどになっている。北側では壁の立ち上がりは確認されなかった。

埋土はA層が黒褐色土層で埋土の主体を占め、B層は暗褐色土で南西側の壁周辺に見られる。床面にはP1～P5のピットが検出されている。P1は径38cm、深さ32cmの柱穴で、埋土はC1層が明黄褐色土、C2層は黄褐色土である。P3は径40cm、深さ34cmの柱穴で、柱痕状の暗褐色土が見られる。P2、P4、P5は深さ4～8cmの浅いピットである。

遺物は土師器甕の破片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

#### (7) HK01 土坑 (第116図、photo.164、165)

HH06 竪穴住居跡の東1.5mほどの位置で検出された土坑で、直径1.7mほどの円形を呈する。底面の深さは検出面から1.2mほどで、底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東側では土坑の立ち上がりから平坦な部分を経て、斜めに立ち上がっている。南側は1mほど垂直に立ち上がり、そこから上は斜めに立ち上がっている。

埋土はA層が黒褐色土層で、B層はにぶい黄褐色土層、C層は黄褐色土層である。出土遺物は見られなかった。

#### (8) HH07 竪穴住居跡 (第117～119図、photo.166～170)

HH06 竪穴住居跡の南に隣接して検出された竪穴住居跡である。南北7.4m、東西7.9mで北辺は不整形になっており、南の隅に張り出しが見られる。床面の深さは検出面から40cmほどで、床面は平坦である。壁はやや傾斜して立ち上がり、南壁では壁高が50cmほどになっている。HH06 竪穴住居跡との切り合いはないが、位置関係からみて同時に存在はしていなかったと考えられる。

埋土は、A層がにぶい黄褐色土層で、B1層は明黄褐色土層、B2層は褐色土層、C層は暗褐色土層、D層は黄褐色土層で壁周辺に見られる。

床面にはP1～P22のピットが検出されている。P3、P15、P16、P17、P20、P19は径20～60cm、深さ30～70cmの柱穴で、P15、P19には柱痕跡が見られる。柱穴の配置からみて柱の据え替えが行われたと考えられる。

第119図1・2は須恵器坏である。1は体部下端にわずかな稜を有し、ほぼ直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反気味である。底部は糸切り無調整で高さ1mm程の段差を有する(A2⑥類)。2は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部は糸切り無調整である(B6類)。色調は1が口縁部付近でくすべ色を呈するものの大半が灰褐色を呈する。2はくすべ色を呈し、胎土はいずれも密であるが、1はやや脆弱である。法量は1が推定口径13.9cm、器高5.2cm、底径5.9cm、2が推定口径13.7cm、器高5.4cm、底径6.4cmである。

3は須恵器壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけて強く外反しており、口唇部を上方に短くひき出すために断面形態はコ字形に近くなる。実測図背面では著しいゆがみが認められる。色調はくすべ色を呈し、胎土はやや粗い。内外面ともに自然釉が認められる。法量は推定口径が12.1cmである。

4・5は穂つみ具様鉄製品で、実測図上端を峰とし、下端を刃部としている。いずれも長軸方向の両端に目釘穴を施すが、4では錆により一方を確認できなかった。4は長さ10.5cm、幅2.1cm、厚さ3mmである。

なお、図示した以外に土師器内黒坏片、赤褐色土器片、鉄滓などが出土している。また、本住居跡から出土した砥石がHH04 堅穴住居跡出土砥石と接合したことは既に述べたとおりである。

#### (9) HH08 堅穴住居跡 (第120～122図、photo.171～173)

HH07 堅穴住居跡の南東11mほどの尾根基部に検出された堅穴住居跡で、南北6.7m、東西6.8mのやや不整な方形を成し、北東の隅がわずかに張り出している。床面の深さは検出面から20cmほどで、床面は平坦である。壁はやや外傾して立ち上がり、北東壁では壁高が50cmほどになっている。

床面にはP1～P16のピットが検出されている。P1、P7は楕円形の掘方をもち、深さ40cmほどの柱穴で、P7には柱痕跡が見られる。P2～P6、P10～P15は、径20～30cm、深さ10～30cmのピットである。また床面の三箇所にわたり1.4m～1.8mほどの範囲で焼土が見られた。

第122図1・2は土師器甕である。1は長胴甕であり体部上半に最大径がある。口縁部は短く、わずかに外反する。口縁部と体部の境界は明瞭であるが、段は認められない(E1類)。器面調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部外面が縦ないし斜方向の強いヘラナデおよび弱いヘラナデ、内面が刷毛目である。底部はわずかに張り出し、底面には木葉痕が認められる。

2は底部がわずかに張り出すもので、器面調整は内外面ともに弱いヘラナデである。

いずれも胎土はやや粗く粗砂を多く含む。法量は1が推定口径20.0cm、推定底径12.0cm、2が底径8.0cmである。

3は鉄製紡垂車である。中心部に穿孔があり、側面観は陣笠状を呈する。直径4.9cmを計る。

なお、図示した以外に須恵器壺口縁部片、土師器内黒坏片、赤褐色土器片、鉄塊系遺物、鉄滓等が出土している。

## 2 W 2 区 (第123図、photo.174~177)

W 2 区は、西地区を横断する南西方向の尾根から低位面のF地区に至る南向きの斜面部分である。斜面の傾斜は図のエレベーションに示すように遺構の下方でやや緩やかになっており、傾斜角度は遺構上方で34°、下方では25°を測る。遺構は標高23mから30mの部分に見られ、竪穴住居跡6棟、道状遺構などが検出されている。

### (1) HH 0 9 竪穴住居跡 (第124~127図、photo.178~182)

W 2 区の最も西に位置し、標高26mの斜面で検出された竪穴住居跡である。竪穴軸線は南西方向で、等高線に平行する。軸線方向で3.5m、斜面方向で2.2mの規模で、長方形を呈し南西にかまどをもつ。南東側の壁は見られず床面はそのまま斜面に続く。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は北西側で63cmとなっている。床面に柱穴は見られなかった。

埋土は二層に大別され、埋土上半のA層は黒褐色土層、下半のB 1層は暗褐色土層、B 2層は黒色土層で木炭を含む。B 3層、B 4層は壁下に見られる堆積層で、それぞれ褐色土層、黒褐色土層である。B 4層には木炭が含まれる。

かまどは南西壁の斜面下方寄りに見られ、煙道の長さ1.5mで、礫を組んだソデをもつ。組焼部には幅40cm、長さ70cmほどの範囲で焼土が見られ、火床面はややくぼみ焼土厚は7cmを測る。ソデには礫が据えられ、これを暗褐色土のC 1層、C 2層で固定している。煙道底面はほぼ水平で、末端でわずかにくぼみ、30cmほど立ち上がって煙出に至る。かまど埋土は、煙道部に黒褐色土のa層、暗褐色土のb 1層、黒褐色土のb 2層、b 3層が見られ、b 2層には木炭が含まれる。燃焼部埋土b 5層は黒褐色土で木炭を含む。黄褐色土である。遺物は、床面から須恵器長頸瓶、砥石などが出土している。

第127図1は須恵器長頸瓶である。口縁部を欠くが頸部から口縁部にかけてやや外半気味に立ち上がる。頸部には突帯が1条めぐる。体部は上半に最大径があり、底部には高台がつく。

器面調整は外面の体部下半が口転ヘラケズリを施した後に手持ちヘラケズリされる。色調はくすべ色を呈し、胎土は密である。外面にわずかに自然軸が認められる。法量は、現存高23.8cm、頸部径7.0cm、体部径18.5cm、底部径9.4cmである。

2はロクロ使用土師器坏で、体部が内湾気味に立ち上がり口縁部がわずかに外反する(B類)。器面調整は内面に横方向のヘラミガキが認められるが黒色処理は認められない。胎土はやや粗で細砂を含みやや脆い。法量は推定口径16.6cmである。

3は土師器甕である。口縁部と体部がほぼ同じ長胴甕で、体部の最大径は上半にある。口縁部はやや短く、外反しており、口縁部と体部の境界はやや不明瞭であり段は認められない(B 2②類)。器面調整は口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部外面が縦方向の強いヘラナデ、内面が横方向の強いヘラナデである。胎土はやや粗で粗砂を多く含む。

4~6は砥石である。4は流紋岩の垂角礫を使用するもので、長軸方向の各面(4面)に使用痕が認められる。実測図下方には炭化物の付着が認められる。5は凝灰岩質細粒砂岩の垂角礫を使用するもので、やはり長軸方向の各面(4面)を使用するが使用痕は溝状となりやや深い。6は欠損後にカマドの石組に転用された砥石である。

7~9は鉄製品である。7・8は管状を呈するもので、鉄板を折り曲げて制作されている。7はやや大形で8は小形である。9はJ字形を呈するものであるが釣針か否かは不明である。



なお、図示した以外には高台を持たない須恵器(壺か)の底部破片や、2に類似する土師器坏で内黒処理されるものなどが出土している。

## (2) HH10 竪穴住居跡 (第128~130図, photo.183~187)

HH09 竪穴住居跡の北東約10m、標高27mの斜面で検出された竪穴住居跡である。竪穴の軸線方向は西南西で、等高線に平行する。規模は軸線方向で3.9m~4.3m、斜面方向で2.9m~3.5mを測る。やや不整な長方形を呈し、南西にかまどをもつ。南東側の壁は見られず床面はそのまま斜面に続く。壁はやや傾斜して立ち上がり、壁高は北西側で1.6mとなっている。床面に柱穴は見られなかった。

埋土は黒褐色土のA層、B層と、暗褐色土のC層から成る。黒褐色土層が埋土の主体を占め、A層、B層は混入土の差異により、それぞれ四層、二層に細分されている。

かまどは南西壁のやや南寄りに見られ、煙道の長さは1.2mで、礫を組んだソデをもつ。燃焼部には幅45cm、長さ40cmほどの範囲で焼土が見られ、火床面はややくぼみ、焼土厚は8cmを測る。ソデには礫が据えられ、これを暗褐色土のc1層、c2層、c3層で固定している。c2層は火床面を構成している。煙道底面は煙出に向かってわずかに高くなり、垂直に36cmほど立ち上がり煙出に至る。かまど埋土は、煙道部に暗褐色土のa1層、褐色土のa8層、燃焼部には黒褐色土ないし褐色土のa2層~a7層が見られる。遺物は、床面から須恵器甕が出土している。

第129図1~3は須恵器である。1は坏の底部破片で糸切り無調整である。色調はくすべ色を呈し、胎土はやや密であり、細砂を含む。

2は壺(長頸瓶か)の口縁部破片である。頸部から口縁部にかけて強く外反し、口唇部は上方に短くひき出される。焼成は良好である。胎土は緻密で灰白色を呈し、細砂~粗砂を含むがあまり多くはない。外面にはやや赤味がかかった自然釉が認められる。法量は推定口径が14.6cmである。本資料は胎土や自然釉の色調等で他の須恵器と著しい差異がみられ、福島県会津若松市の大戸窯(9C中)出土資料に類似する。

3は中形の甕である。口縁部は外反し、口唇部を上方に短くひき出す。頸部には部分的にはあるが沈線がめぐる。体部はほぼ球形に近く、最大径は体部上半にある。口縁部から頸部にかけて著しいゆがみがあり、また底部には窯体が付着したものを研磨している。器面調整は外面の体部上半が手持ちヘラケズリ、内面の下端がナデツケである。色調はくすべ色を呈し、胎土は密で白色鉱物などの粗砂を含む。法量は推定口径17.1cm、器高30.5cm、体部径27.0cm、底部径9.0cmである。

4~6はロクロ使用土師器坏であり、いずれも内面を黒色処理する。4は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上り、口縁部がわずかに外反する(B類)。器面調整は内面が、横方向のヘラミガキで、底部付近が放射状となる。口縁部の内外面にはタール状の付着物が認められ、灯明皿として使用されたものと思われる。5は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上り、底部は糸切り無調整である(B-⑥類)。器面調整は内面の横方向~斜方向のヘラミガキで底部付近で放射状となる。6はやや大型で鉢などの大型の器種の可能性も考えられる。底部から体部にかけて内湾気味に立ち上り、底部は磨滅により不明瞭ではあるが糸切り無調整かと思われる(B-⑥類)。器面調整は放射状のヘラミガキが認められる。胎土はいずれもやや粗で、粗砂~細砂を多く含む。法量は4が推定口径15cm、5が底径5.8cm、6が底径8.0cmである。

7は土師器または赤焼土器の高台部であり、断面形は八字形を呈する。胎土は密であり粗砂を少量

含む。台部の法量は直径6.7cm、高さ2.0cmである。

8～15は土師器甕である。8は小形甕で口縁部が強く外反し、体部にも膨らみを有するものである。口縁部と体部の境界はやや不明瞭で段は認められない。底部は強く張り出す。(F 2③類)器面調整は口縁部が内外面とともにヨコナデ、体部外面が縦方向の弱いヘラナデ、内面が横方向の強いヘラナデである。胎土はやや粗く、粗砂を多く含む。法量は推定口径13.4cm、推定体部径13.5cm、推定底部径10.6cm、器高15.9cmである。

9もやや小形の甕である。口縁部が強く外反し、体部が膨らむもので、最大径は体部上半にある。口縁部と体部の境界は明瞭であるが段は認められない(F 2①類)。器面調整は口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部外面が縦方向の弱いヘラナデ、内面が横方向の強いヘラナデである。胎土は粗く、粗砂を多く含む。割口に炭化物の付着が認められるが、何らかの接着剤を用いて補修したものが2次焼成を受けて炭化したものと思わせる。法量は推定口径14.5cm、推定体部径16.0cmである。

第130図12は体部上半に最大径を持つ大形の長胴甕である。体部に膨らみを有し、口縁部は直立気味に立ち上り口唇付近で強く外反する。口縁部と体部の境界は不明瞭である。底部は強く張り出す(B 2②類)。器面調整は口縁部内外面ともにヨコナデ、体部外面は弱いヘラナデ、内面は横方向のハケ目である。胎土は粗く、粗砂を多く含む。法量は口縁部径18.7cm、体部径19.0cm、器高29.8cm、底部径9.8cmである。

10・11はわずかに張り出す底部破片、13～15は強く張り出す底部破片であり、いずれも底面に木葉痕が認められる。

16は流紋岩製の砥石である。

17は刀子であるが、柄からの刃部にかけてやや強い反りが認められる。峰には明瞭な段差を有し、柄には木質部が残存している。

なお、図示した以外には赤褐色厚手土器片、鉄塊系遺物、鉄滓などが出土している。また、カマド周辺に動物依存体の集積が認められ、イガイ科の一種(R, 3)、チシマフジツボ(殻板6)が同定された。

### (3) HH 1 1 竪穴住居跡 (第131～135図、photo.188～191)

HH 1 0 竪穴住居跡の東約2mに隣接して検出された竪穴住居跡である。竪穴軸線は西方向で、等高線にほぼ平行する。規模は軸線方向で6.6m～7.3m、斜面方向で3.1m～4.0mの長方形を呈し、西にかまどをもつ。竪穴の西壁から北壁に沿って、幅50cm前後の平坦面をもつ段状の削り出しが見られ、東側に続いている。南の壁は見られず床面がそのまま斜面に続いている。北壁は床面から1mほど立ち上がり、平坦面を経てさらに1.3m～1.6m立ち上がっている。

埋土はA層～D層の四層に大別される。A層は黒褐色土層で埋土上部に薄く堆積している。B 1層、B 2層、B 4層は暗褐色土層、B 3層はにぶい黄褐色土層で東半部の埋土中位に見られる。B 5層は褐色土の焼土で部分的な堆積である。C層は黒褐色土層で礫を含む。D層は黒褐色土ないし褐色土から成り、床面と壁を覆っている。

床面にはP 1～P 5のピットが検出されている。P 1、P 2は床面の東側に見られ、深さはそれぞれ33cm、20cmである。P 1の埋土上位のE 1層には鉄滓が多く含まれ、付近の床面にもこれが見られた。P 3、P 4は深さ5～9cmの浅いものである。P 5はかまどの前に見られたピットで、かまどの焼土を切っている。径1.2m、深さ50cm、底面は平らではなく、一部で西側に入り込んでいる。埋土は

G 1層、G 4層が黒褐色土層、G 2層、G 3層は暗褐色土層、H層は褐色土層である。

かまどは西壁のやや南寄りに見られ、煙道の長さは1 mで、ソデは褐色土を盛って造られている。燃焼部には幅90cm、長さ130cmほどの範囲で焼土が見られ、火床面はややくぼみ、焼土厚は7 cmを測る。ソデは褐色土d 1層、d 2層および暗褐色土のd 3層で構築されている。煙道底面は水平で、やや傾斜して立ち上がり煙出に至る。かまど埋土は、煙道部に暗褐色土のa 1層～a 3層、燃焼部には褐色土のd 1層、b 2層、暗褐色土のb 3層が見られる。

第134図1・2はロクロ使用の土師器坏であり、いずれも内面を黒色処理する。1は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部がほぼ直に立ち上がる。底部は磨滅しているが全面を再調整している様である(B②類)。器面調整は内面に横方向のヘラミガキを施し、上面観は多角形状となる。内面および欠損部にタール状付着物が見られ、欠損後に灯明皿として再利用されたものと思われる。胎土はやや粗で細砂を多く含み、脆弱である。法量は口径15.0cm、器高5.5cm、底径6.6cmである。

2は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反する。底部は糸切り無調整である(C 1⑥類)。器面調整は内面上半を横～斜方向、下半を放射状のヘラミガキが認められるが、特に上半部ではヘラミガキ以前のロクロ目が確認される。底部外面には不整な線刻や刺突が認められたが、判読できなかった。胎土はやや密で細砂を少量含む。法量は推定口径13.4cm、器高5.6cm、底径6.0cmである。

3～9は土師器甕である。3は口縁部の外反する長胴甕で、最大径は口縁部である。口縁部と体部の境界はやや明瞭ではあるが段は認められない(A 2①類)。器面調整は口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部が内外面ともに横方向の弱いヘラナデである。焼成は比較的良好ではあるが、胎土はやや粗で粗砂を多く含む。法量は推定口径19.0cmである。

4～9は体部下半～底部の破片で、4・6は底部の張り出しが無いもの、9はわずかに張り出すものの、5・7は強く張り出すものである。5～8の底面には木葉痕が認められる。

11はフイゴ羽口の先端部破片であり、先端部に溶滓が付着し、この下部は環元焰焼成を受けている(実測図アミで示した範囲)。

10・12は炉壁片である。10は最下部に相当する部分で実測図下端は炉床に直接したと思われる接合面が認められる。内面には溶滓が付着しており、外面には弱いヘラナデによる器面調整が認められる。胎土はやや粗く、白色鉱物等の粗砂を多く含むほか、植物繊維をわずかに含む。

11は溶滓の付着しないもので内外面ともに弱いヘラナデで器面調整される。幅2～4 cm程度の粘土組を積み上げて成形されている。胎土は粗く、白色鉱物等の粗砂を多く含むほか、植物繊維をわずかに含む。未使用である可能性が大きい。

13・14は鉄製品である。13は尖頭部が大形の鉄鏝であり、14は鉄板を折り曲げて制作した管状の鉄製品である。

なお、図示した以外には磨滅した須恵器甕片や赤褐色厚手土器片、鉄滓、鉄塊系遺物等があるが、特に鉄塊系遺物については指先大ほどの小塊がP 1のE 1層からまとまって出土しており特筆される。

#### (4) HH 1 2 竪穴住居跡 (第136図、photo.192～194)

HH 1 1 竪穴住居跡の南約5 mの位置で検出された竪穴住居跡である。竪穴の軸線は西南西方向で、等高線にほぼ平行する。規模は軸線方向で3.7m、斜面方向で2.7mで、不整な長方形を呈し、西壁に

かまどをもつ。竪穴の西壁から北壁にかけて、幅30cmほどの段状の削り出しが見られる。南の壁はわずかに立ち上がりが見られ、北壁は床面から斜めに70cmほど立ち上がり、段状部分を経てさらに30cm立ち上がっている。

埋土はA層～C層の三層に大別される。A1層は褐色土層、A2層は暗褐色土層で埋土上部に薄く堆積している。B1層～B4層は黒褐色土層、B5層は暗褐色土層で、B層が埋土の主体を占めている。C層は暗褐色土層である。

床面にはP1～P3のピットが検出されている。P1は径24cm、深さ26cmで柱痕が見られる。柱痕のD層は黒色土、埋土E1層、E2層はそれぞれ黒褐色土、暗褐色土である。P2、P3は径20cmで、深さはそれぞれ8cm、15cm、埋土は黒褐色土である。

かまどは西壁の中央に見られ、煙道の長さは30cmで、礫を組んだソデをもつ。燃焼部には幅30cm、長さ25cmほどの範囲で焼土が見られる。ソデには礫が据えられ、これを黒褐色土のc1層、暗褐色土のc2層で固定している。燃焼部および煙道入口はソデに乗せた礫で覆われている。道煙道底面はなだらかに立ち上がり煙出に至る。かまど埋土は、煙道部に暗褐色土のa2層、a3層、燃焼部には黒褐色土のa4層が見られる。

出土遺物はいずれも小片で図示できるものはなかったが、土師器内黒坏破片、HH10竪穴住居跡出土の長胴甕(第130図-12)に類似する土師器甕口縁部破片、鉄滓などがある。須恵器は出土していない。

#### (5) HH13 竪穴住居跡(第137～139図、photo.195～202)

HH11 竪穴住居跡の東5mの位置で検出された竪穴住居跡である。HH14 竪穴住居跡竪穴と重複しており、新旧関係はSec. i に示すようにHH13 竪穴住居跡の埋土G層がHH14 竪穴住居跡により切られていることから、HH14 竪穴住居跡が新である。

南北2.2m、東西現存部2.1mで、北壁にかまどの痕跡が見られる。北壁はやや斜めに立ち上がり、壁高は95cmほどである。

埋土はG層、H層に分けられ、G1層、G2層は黒褐色土層、G3層、G4層、H2層は暗褐色土層、H1層は褐色土層である。床面は平坦で、ピット等は検出されていない。

かまどは、HH14 竪穴住居跡の床面下にその痕跡が見られた。北壁に煙道部がみられ、長さは70cmで、煙道底面は煙出に向かって低くなっている。

第139図4は須恵器甕の口縁部破片である。頸部から口縁部にかけて強く外反し、口縁部上端にやや深い沈線が1条めぐる。沈線の下部は突帯状となる。焼成は良好で、胎土はやや密であり細砂を含む。法量は推定口径19.8cmである。

5はやや小形ではあるが土師器の長胴形甕である。口縁部は短く、ほぼ直上に立ち上がり上端がわずかに外反する。口縁部と体部との境界には明瞭な段を有する(G類?)。器面調整は口縁部内外面ともにヨコナデ(沈線状)、体部外面が縦方向の弱いヘラナデ、内面が横方向の強いヘラナデである。胎土はやや粗く、粗砂を多く含み脆弱である。法量は推定口径13.8cmである。

6は土師器甕の底部破片である。底部には強い張り出しが認められ、内面は底部と体部の境界が屈曲している。底面には木葉痕が認められる。

なお、図示した以外には鉄滓などが出土しているが坏は破片も出土していない。

(6) HH 1 4 竪穴住居跡 (第137~139図、photo.195~202)

HH 1 3 竪穴住居跡の東に重複する竪穴住居跡である。東西2.1m、南北2.2mの規模で、南東側の壁は見られず、西壁にかまどをもつ。北壁は床面から垂直に55cm立ち上がっている。

埋土はA層~C層の三層に大別される。A層は埋土の主体を占める層で黒褐色土ないし暗褐色土層である。斜面方向からの流入状態を示している。B 1層は暗褐色土層、B 2層は褐色土層、C層は黒褐色土層である。

床面には楕円形のピットP 1が検出されている。P 1は深さ4cmほどの浅いピットで、埋土は褐色土である。

かまどは西壁の北側に見られる。煙道の長さは1.2mで、燃焼部には幅30cm、長さ75cmほどの範囲で焼土が見られる。ソデは暗褐色土のc 1層、黒褐色土のc 2層、褐色土のc 4層で構築されている。煙道は割り貫きで、煙道底面は煙出部に向かって低くなっており、煙道末端から垂直に1.1m立ち上がり煙出に至る。かまど埋土は暗褐色土のa層、暗褐色土ないし褐色土のb層、c層から成る。

第139図1はロクロ使用の土師器坏である。底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、体部下半はわずかに丸みを有する。底部は糸切り後に体部下端の部分を手持ちヘラケズリにより再調整する(A 2③類)。内面は上半が横~斜方向の、下半が放射状のヘラミガキにより調整され黒色処理される。胎土はやや密で白色鉱物などの細砂を多く含む。法量は推定口径13.6cm、器高5.6cm、推定底径5.6cmである。

2は土師器甕の底部破片であり、強い張り出しが認められる。底面には木葉痕が認められる。

3は刀子である。刃部と柄の境界には明瞭な段を有する。

(7) 道状遺構 (第137~140図、photo.195~202)

HH 1 1およびHH 1 4 竪穴住居跡から東に伸びる遺構で、斜面を削り出し細長い平坦面が形成されているものである。HH 1 1 竪穴住居跡から東に伸びるものを道状遺構 I、HH 1 4 竪穴住居跡から東に伸びるものを道状遺構 IIとした。

道状遺構 Iは、HH 1 1 竪穴住居跡の北西隅から竪穴北壁にそって東に伸び、HH 1 4 竪穴住居跡の上方に至る。延長は16mで、幅0.5~1mのやや南に傾斜する平坦面が見られる。この面には柱穴、焼土などは検出されていない。埋土はL層が黒褐色土層、M層は暗褐色土層ないし褐色土層である。

道状遺構 IIは、HH 1 4 竪穴住居跡から東方に14mにわたって見られる。竪穴付近ではこの面に焼土が見られた。埋土はN層が黒褐色土、O層は暗褐色土ないし黒褐色土である。

これらの道状遺構は、それぞれの竪穴住居跡と同時期の遺構である。遺構面からは、柱穴やその他の生活痕跡はほとんど見られず、竪穴住居跡の遺存部分とは考えにくい。この道状遺構は竪穴住居への往来のために設けられたものと推測される。

(8) 石 列 (第140図、photo.195)

HH 1 2 竪穴住居跡の南2mほどの位置に検出されたもので、長さは8mである。最大幅は50cmほどで、比較的大きな礫で構成されている。構築時期は不明である。

(9) S X 0 5 (第141～144図、photo.201、202)

W 2 区東端部斜面の標高25mの地点に検出された遺構である。ここは浅い谷が入り込んでいる部分で、HH 1 4 竪穴住居跡から30mほどの距離にある。

南北7.4m、東西3.2mの範囲で斜面を整地し、その北西部分に炉跡とみられる遺構が検出されている。整地面は、暗褐色土ないし褐色土のD層により構成されており、この面には焼土が見られた。炉跡は平坦面の溝部分と、斜面の立ち上がり部分から成る。溝は長さ1.2m幅40cm、深さ25cmで、焼土が見られ燃焼部と考えられる。立ち上がり部分には礫があり、溝から緩やかに立ち上がる。

整地部の埋土は、A層が暗褐色土層、B層は黄褐色土層で部分的に薄く堆積している。C層は黒褐色土層である。炉跡埋土はa層が暗褐色土、b層は焼土である。炉跡付近から厚手の土器が出土している。

第144図1は赤褐色厚手土器の底部破片である。幅1.0～2.0cm程度の粘土紐を積み上げて成形されており内面には弱いヘラナデによる器面調整が認められるが、外面は無調整である。厚さは2.1cmあり胎土は粗く、粗砂を多く含む。胎土、焼成、成形方法はHH 1 1 竪穴住居跡から出土した炉壁に極めて類似する。

(10) S X 0 6 (第141、142図)

S X 0 5 の斜面上方に検出されたもので、南北1.8m、東西3.2mほどの平坦な底面をもつ落ち込みが見られた。この地点では湧水があり、遺構のすぐ上には近代のものとみられる木杵が検出されている。

### 3 W 3 区 (第145、146図、photo.210)

西地区のほぼ中央に位置し、この地区を東西に横断する尾根の頂部と、これから北西に小さく張り出す尾根部分である。標高は35m～42mで、竪穴住居跡1棟および土坑1基が検出されている。

(1) H H 1 5 竪穴住居跡 (第147、148図 photo.205、206)

北西向きの尾根の緩斜面部分から検出された竪穴住居跡で、長軸4.2m、短軸2.8mの長方形を呈し、南東壁にかまどをもつ。床面の深さは検出面から80cmほどで、床面は平坦である。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は北壁で1.3mとなっている。狐の穴により、床面およびかまどの一部が攪乱されている。

埋土は二層に大別され、上部の埋土A層は黒褐色土層、下部のB層は褐色土層を主体にした埋土である。B層には、黄褐色土層のB 2 層、B 7 層およびにぶい黄褐色土層のB 6 層が見られる。B 5 層が堆積した段階で床面は完全に埋没し、B層上面で竪穴は窪みの状態となり、A層の堆積で竪穴は完全に埋没する。

床面には、北東から南東の壁下に幅10cm～15cm、深さ10cmほどの溝が見られる。また床面からはP 1～P 5 のピットが検出されている。P 1 は径30cm、深さ18cmのピットで、埋土は褐色土である。P 2 は径50cm～60cm、深さ26cmで、埋土は黄褐色土、またP 3 は径50cm、深さ20cmで、埋土はB 8 層の褐色土である。P 1、P 2 は南北壁近くの対応する位置関係にある。P 4～P 6 は床面下で検出されている。

かまどは南東壁の南寄りにあり、右ソデと煙道下部は攪乱されている。煙道は削り貫きで、長さ1.8m、底面の状況は攪乱により不明である。煙道末端から内傾して2.4mほど立ち上がり煙出に至る。燃烧部は40cmの範囲で焼土が見られ、火床面は窪んでいる。ソデは明黄褐色土のe 1層、e 2層でつくられており礫は見られない。埋土は、燃烧部のd 1層、d 2層は明褐色土で焼土を含む。煙道部埋土a 1層は黒褐色土層、a 2層、a 3層は褐色土層で、b 1層、b 3層、c 2層はにぶい黄褐色土層、c 3層は黄褐色土層となっている。

出土遺物は土師器破片、鉄滓などが少量見られたが、いずれも少片で図示できるものはなかった。

## (2) SK01土坑 (第148図)

尾根頂部の標高42.8mの地点から検出された土坑である。径0.9m~1.2mの楕円形を呈し、深さは18cmである。埋土M層は黒色土層で、細礫およびにぶい黄褐色土を含む。出土遺物はない。

## 4 W4区・W5区 (第149、151図、photo.211、212)

W4区はW1地区の東に位置する谷部分である。ここではSX07、SX08が検出されている。また土師器、鉄滓、陶磁器などの遺物が出土している。

堆積土層は、第I層表土が褐色土層、第II層は黒褐色土層で褐色土を含んでいる。層厚はいずれも10cm~20cmである。第III層は黒褐色土層で、谷下方で層厚を増し最大60cmを測る。第IV層は斜面の中ほどから下方に見られる落ち込みに堆積した土層で、この落ち込みは雨裂とみられる。上部のIV a層は暗褐色土層で、褐色土、黒褐色土を含む。IV b 1、3、5、6層は黒褐色土層で、IV b 2層が暗褐色土層、IV b 4層は黒色土層となっている。

W5地区はW3地区の東に位置する谷部分で、標高9mの地点で湧水が見られ、掘り込みと礫が検出されている。

## (1) SX07 (第150図、photo.213)

W4区の中央部の標高23mの地点から検出された遺構である。東西2.8m、南北1.8mのほぼ長方形を成し、西壁は弧状で、東壁の中央部に張り出しがある。

底面は東および北方向にわずかに傾斜しており、中央に幅25~50cm、深さ8cm、長さ2mの浅い溝が見られ、これに続いて径50cm、深さ8cmの円形の窪みがある。壁の立ち上がりは南側ではやや傾斜して直状であるが、他の部分は斜めに立ち上がり、東の張り出し部分では窪みから緩やかな傾斜で検出面に至る。壁高は、南側で35cm、西側では50cm、北側で10cmである。東の張り出し部分から窪みにかけて50cmほどの範囲で焼土(C 1層)が見られる。

埋土は、西側上位に見られるA層が黒褐色土層で、B 1、B 3は黒褐色土層、またB 2層は黒色土層でこれらの層には木炭が含まれる。焼土層C 1層の下には暗褐色土ないし褐色土のC 2層~C 5層があり、C 3層は硬くしまっている。出土遺物はなかった。

この遺構は、埋土に木炭が含まれており、その形態からも炭窯の可能性が考えられるが、焼土が一部に見られるだけで、底面もほとんど焼けていない。

(2) S X 0 8 (第150図、photo.213)

S X 0 7の北東4mほどの地点で検出された遺構で、東西2.2m、南北3.3mの不整形な平面形をもつ。西側は雨裂により切られている。底面は西方向にわずかに傾斜しており、壁高は東側で34cmを測る。埋土は、M層が黒褐色土層ないし黒色土層、B層は黒褐色土層、暗褐色土層および褐色土層から成り、木炭を少量含むが、焼土は見られず、出土遺物もなかった。

・W3、W4、W5区遺構外出土遺物(第152、153図、photo.207)

1～3は縄文土器である。3は深鉢の底部で、底面に網代痕が見られる。4は全体に敲打痕が見られる石器である。

5～8は須恵器の坏である。5はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。底面は糸切り無調整である(B⑥類)。胎土はやや明るいくすべ色を呈し、やや疎であるが焼成は良好である。口径は推定で15.0cm、器高は4.5cmである。6はわずかに内湾しながら立ち上がり、底面は糸切りで周縁部のみ手持ちヘラケズリが施される(B③類)。胎土は密でくすべ色を呈し、焼成は良好である。口径は推定で14.3cm、器高は4.4cmである。7はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。内面は糸切り無調整である(C1⑥類)。胎土は密で、褐色味をおびた明灰色を呈し、焼成は良好である。口径は推定で14.7cm、器高は4.7cmである。8は内湾しながら立ち上がり、底面は糸切り無調整である(B⑥類)。胎土はくすべ色を呈し、焼成は良好である。底径は推定で7.5cmである。

9～15は内黒処理を施されたロクロ使用の土師器の坏である。9は体部下半がやや内湾しながら立ち上がる。器面調整は内面の体部で横方向、下半で縦方向のヘラミガキが施されている。底面はヘラケズリと思われる再調整が施される(A2③類)。口径は推定で13.4cm、底径4.6cm、器高6.0cmである。10は体部でやや内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。器面調整は内面体部で横方向、下半から底部にかけてヘラミガキが施される。底面は糸切りで無調整である(C2⑥類)。外面口縁部にタール状付着物が観察された。法量は口径が推定で14.1cm、底径5.3cm、器高が4.1cmである。11は底径がかなり小さく、内湾しながら立ち上がっている(B類)。器面調整は磨滅がひどく不明瞭であるが、内面体部は横方向のヘラミガキとみられる。口径は推定で11.7cmである。12は底面に墨書の残る坏である。内面調整は体部が横方向、下半から底部にかけては縦方向のヘラミガキが施され、底面は糸切り無調整である。墨書は文字と思われるが判読できない。底径は6.5cmである。13は内湾気味に立ち上がる。器面調整は、内面が横方向のヘラミガキが施され、底面の周辺部と体部下端部にヘラケズリによる調整痕がある。底径は5.3cmである。14は高台付坏である。高台部は八角形に開き、坏部は内湾しながら立ち上がる。器面調整は、内面がヘラミガキを施され、高台内面の接着部にはヘラケズリが施されている。高台の最大径は8.0cmである。15は底部からやや直線的に立ち上がる。器面調整は内面に横方向のヘラミガキが施されている。底面には糸切りでヘラナデと思われる調整痕を残す。

16は墨書のある坏の体部破片である。墨書は判読できず、文字であるか絵であるかも判然としない。

17はロクロ使用の土師器の耳皿である。内外面とも黒色処理されている。底面は糸切り無調整である。法量は器高4.5cm、底径5.0cmである。

18～26は土師器の甕である。18は強い張り出しを持った底部である。器面調整は外面がヘラケズリ、内面が放射状にヘラナデが施されている。底径は推定で11.0cmである。19は修復痕をもった口縁部片である。口縁部はやや外反する(A2③類)。内外面の横方向の調整痕は、粘土を貼った後にヘラで強く押し付けた痕である。口径は推定で17.5cmである。20は球胴甕の口縁部である。頸部はくびれ、口



縁部は短く、外反する(D類～E類)。器面調整は内外面ヘラナデが施され、口径は推定で15.0cmである。21は長胴甕の口縁～体部である。頸部のくびれがなく、口縁部はわずかに外反する。外面に縦方向のヘラナデが施されている。口縁部には内外面とも炭化物が付着する。胎土はやや粗く、細礫を含む。口径は推定で14.0cmである。

22～26は甕の底部である。いずれも底面に木葉痕を持つ。22は三角形の明瞭な張り出しを持つ。胎土は明褐色を呈し、やや粗い。底径は推計で7.5cmである。23も張り出しを持ち、若干湾曲しながら立ち上がる。胎土は黒褐色を呈し、粗く焼成は不良である。底径は推定で9.6cmである。24も張り出しを持つが調整痕がない。体部はやや直線的に立ち上がる。調整痕は内外面ともヘラナデである。胎土は明褐色を呈し、やや密で焼成は良好である。底径は9.5cmである。25は明瞭な張り出しを持ち、底部からやや内湾気味に立ち上がる。胎土は明灰色を呈し、焼成は不良で、細礫を含む。底径は推定で10.5cmである。26は明瞭な張り出しを持った底部で、直線的に立ち上がる。器面調整は、内外面とも横方向のヘラナデが施されている。胎土は赤褐色を呈し、やや密で焼成も良好である。底部径は11.0cmである。

## 5 W 6 区 (第154、155図)

W 6 区は西地区の北東部に位置し、尾根および北西方向に傾斜する緩斜面部分である。ここでは堅穴住居跡4棟とSX01、02の遺構が検出されている。

W 6 区北側の緩斜面部分からは、平安時代の堅穴住居跡などが検出されている。谷状の地形のため堆積土が厚く、この中に多くの遺物が含まれている。第Ⅰ層は黄褐色土を含む褐色土層で、Ⅰa層が表土、Ⅰb層は斜面下方の盛土である。第Ⅱ層は二層に細分され、Ⅱa層が褐色土層、Ⅱb層は暗褐色土層である。第Ⅲ層は黒色土層で、遺構はこの上面で検出されている。第Ⅳ層は黒褐色土層である。

### (1) SH02 堅穴住居跡 (第156図、photo.214、215)

尾根上に検出された堅穴住居跡で、東西3.1～3.5m、南北3.7mのやや歪んだ方形を呈する。床面は平坦で、検出面からの深さは20cmである。壁は斜めに立ち上がり、壁高は8～24cmである。

埋土は二層に分けられ、A層は黒褐色土層で木炭を含み、B層は暗褐色土層である。床面にはP1～P5のピットと焼土が見られる。P1、P3、P5は深さ10cmほどのピットで、径は18cm～32cm、埋土は黄褐色土である。P2は径35cm、深さ30cmで、埋土はD1層が黄褐色土、E1層、E2層は褐色土である。P4は径46cm、深さ30cmで埋土は褐色土である。

第158図1・2は縄文土器片である。1は口縁部に刺突文を施すもの、2は頸部に横位の沈線を施し、これより上位を磨消するものである。

### (2) SH03 堅穴住居跡 (第157図、photo.216、217)

SH02 堅穴住居跡の東30mに検出された堅穴住居跡で、東西2.7m、南北2.6mで、ほぼ方形である。床面は西側でやや傾斜をもち、検出面からの深さは15cmほどである。壁は斜めに立ち上がり、壁高は4～12cmである。

埋土は褐色土および暗褐色土を含む黒褐色土である。床面にピット、焼土等は見られなかった。床面下の暗褐色土ないし褐色土の堆積土層からは、縄文時代の遺物が出土している。

第158図3はロクロ使用土師器の高台付坏の底部破片である。高台部は八字形に開き下端部を欠損する。接合面を見ると糸切りで切り離した後に高台部を接合したものである。内面は横方向のヘラミガキが認められ、黒色処理されている。

4は流紋岩製の砥石である。5～11は縄文土器片である。5～7は口縁部に横位の原体圧痕文を施すもので、7はこの下位に刺突文を伴う隆起線を施す。8は撚糸文を地文とするものである。9～11は底部破片で、9・11は底面に網代痕が認められる。

### (3) H X 0 1 (第159, 160図, photo.221)

緩斜面部分の北側中央に検出されたもので、HH 1 6 竪穴住居跡と重複している。東西3.1m、南北1.9mの長方形を呈し、西壁中央がやや張り出している。底面は南西に向かって低くなり、傾斜角度は約12°である。底面に、焼土または火を受けた痕跡はない。壁は北壁および東壁ではやや外傾して立ち上がり、壁高は35cm～40cmである。南壁および西壁では緩やかな傾斜で立ち上がる。

埋土には木炭が多く含まれている。A 1層、A 2層は褐色土を含む黒褐色土層で、A 2層には木炭片が含まれている。A 2層は褐色土層、A 4層は黄褐色土を含む黒褐色土層である。B層は木炭塊を含む黒褐色土層で、B 1層は遺構内の全面から遺構の南西1.3mほどの部分にまで広がっている。B 2層は木炭塊を主体とする層で、底面南西の一部に見られる層である。C層は木炭を含まない層で、遺構の南西部で底面および壁を構成する構築土である。C 1層は暗褐色土層で、南西の立ち上がり部分に見られる薄い層である。C 2層は暗褐色土を含む黄褐色土層で、この黄褐色土は地山土と同質のものである。したがってC 2層の形成には、地山の掘り込みが関与しているとみられる。遺構底面はHH 1 6 竪穴住居跡の埋土上部を切っていることから、H X 0 1は竪穴埋没後に形成された遺構であるといえる。

### (4) H X 0 2 (第159, 160, 168図, photo.222)

H X 0 1の北西に検出された遺構で、これとの間隔は約1.7mである。HH 1 6 竪穴住居跡と重複している。東西2.4m、南北2.4mのほぼ方形を成し、南側がやや張り出している。底面は南に向かって低くなり、傾斜角度は約10°である。底面には、焼土または火を受けた痕跡はない。壁は南東部を除く部分ではやや外傾して立ち上がり、壁高は25cm～36cmである。南西部の壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。

埋土には木炭が多く含まれている。D 1層、D 2層は黒褐色土層で、D 1層には木炭片が含まれ、この層からは第168図に示す特殊な鉄製品が出土している。E 1層は暗褐色土層で、黄褐色土、木炭および若干の焼土を含んでおり、遺構の全面に見られる。E 2層は黒褐色土層で、木炭は含まれない。F層は褐色土層で、遺構の南側で見られ底面を構成する。遺構底面はHH 1 6 竪穴住居跡の埋土上部を切っており、H X 0 2は竪穴埋没後に形成された遺構であるといえる。

これらの遺構の特徴をまとめると、埋土に多くの木炭が含まれること、底面に火を受けた痕跡がないこと、底面が傾斜していることなどの点である。遺構底面に火を受けた痕跡がないという点を除けば、炭窯と考えられる遺構であるが、焼土についてもH X 0 2のE 1層に若干見られる程度であり、直接火を受けた状況はどこにも見られない。W 3地区のS X 0 7も同様な状況を示している。ここでは遺構の状況報告に止め、これらの遺構の性格については、検討の余地を残すものとしておく。

第168図1はD1層出土の鉄製品である。器種が不明であるため、実測図の上方約 $\frac{1}{2}$ を上部、下方 $\frac{1}{2}$ を下部として説明する。上部は本器種の本体部分であり板状を呈し、下方から上方へ次第に幅を広げ、上端部で二又に分岐するとともに反転して蕨手形の環状部を左右に作り出す。完存する左側環状部には直径2.5cmの環状鉄製品を2個連結し、各々の環状鉄製品には直径1.2cm、長さ2.6cmの管状鉄製品を1個ずつ連結している。右側環状部は一部欠損しているが左側に準じるものと思われる。

下部は柄または着柄部と思われ、断面形は方形を呈する。下部の上半は時計周りに、下半は半時計回りの溝が刻まれているが、制作時にひねって作り出したものと推定される。

なお、図示した以外には土師器甕の破片などがある。

#### (5) HH16 竪穴住居跡 (第161~165, 168~170図、photo.223~226)

緩斜面部分の北側に検出された竪穴住居跡で、東西5.9m、南北5.0mの長方形を呈する。床面の深さは検出面から80cmほどで、床面は平坦である。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は掘り込み面が傾斜しているため、南東壁で93cm、北東壁で40cmとなっている。

埋土は複雑な堆積状況を示しており、大別層はG層~L層の6層で、細別層は43層を数える。各層の内容は注記表に記し、ここでは堆積状況について述べる。また主な埋土層の平面分布は、第116, 117図に示してある。なお土層平面分布は土層断面図から推定したものである。

G層は埋土の最上層を構成している層で、G層上面では竪穴住居跡はほぼ完全に埋没し一部に窪みを残すほどの状態となっている。このG層上面がHX01, 02の掘り込み面となっている。HX01, 02の形成によって、遺構の重複部分ではG層からI層までがこれらの遺構により切られている。

G1層(褐色土層)は竪穴の北東部に広く堆積していたとみられる層であるが、HX01の形成により層が切れ、変形した平面分布となっている。G2層(黒褐色土層)は竪穴の北西部を除く広い範囲に見られ、北東側の斜面からの流入状況を示しており、東側の一部ではHX01に切られている。G3層(褐色土層)はその堆積状況から、北側から流入したものとみられ、北側はHH02により弧状に切られている。

H1層(黒褐色土層)は竪穴の北西側を除く広い範囲に堆積しており、東側と北側の一部が、それぞれHX01, HX02により切られている。H2層(黒褐色土層)、H3層(褐色土層)の平面分布は、ほぼH1層の範囲の中に収まる。

I1層(黒褐色土層)は竪穴東側で厚く堆積しており、層厚は最大25cmを測る。分布は竪穴東隅を中心とし、流入方向は北東とみられる。I2層(黒褐色土層)は竪穴の東西隅を除く南北方向に広がる分布が見られ、北側の一部をHX02により切られている。北側では層厚も厚く、40cmほどになっている。北側からの流入土層とみられる。I4層は黄褐色土層で、竪穴の北隅部分のやや狭い範囲に見られる層である。北側をHX02により切られており、北西側からの流入を示している。I5層は暗褐色土層で黄褐色土が含まれる。I4層と流入方向が同じとみられ、北西壁の北側で厚く堆積しており、層厚は最大で37cmを測る。

J1層(黒褐色土層)は、竪穴北隅を中心とした3m~2.5mの範囲に、ほぼ水平に堆積する層である。北東側は、北東壁を切る張り出し部分に収まっている。J4層(黒褐色土層)はJ1層よりも分布の範囲は小さくなるが、これと同様に堆積している。これらの層はいずれもシルト質で、水成堆積したものとみられる。

K層には鉄滓、羽口、木炭、炉壁、礫などの遺物が多数含まれている。K1層(暗褐色土層)は竪穴西隅に分布が見られ、堆積状況は北西からの流入を示している。この層には鉄滓が含まれている。

K2層(黒褐色土層)は竪穴の中央から南にかけて見られ、鉄滓、木炭、礫を含んでいる。K3層～K6層は40cmから1.5mほどの範囲の小さな分布を示す層で、いずれの層もK7層上面に堆積し、K2層に覆われている。K3層は木炭を主体とする層、K4層は羽口を含む黄褐色土層、K5層は焼土、鉄滓、木炭を含む黒褐色土層、K6層は明黄褐色土層である。K7層(暗褐色土層)は竪穴の東西方向に広く分布しており、層厚は西側で厚く、最大20cmとなっている。鉄滓、羽口、炉壁、木炭を含んでいる。K8層は竪穴中央に見られる薄い層でやや硬い。K9層は木炭、礫を含む黒褐色土層で径50cmほどの小さな範囲で見られる。K8層、K9層は同一面で隣接しており、L2層上面に堆積しK7層で覆われている。

L層は床面および壁を覆う埋没初期の堆積層である。L2層、L4層は面的に広がりをもつ層で、その他のL層は壁付近に部分的に堆積する層である。L2層(暗褐色土)は竪穴の西からかまどの付近までの東西に広がる層で、西側で厚く最大30cmの層厚を測る。西からの流入を示す層である。L4層は竪穴の北西側を除く広い範囲に見られる層で、東側で厚く堆積している。L8層、L9層、L10層はかまど周辺の竪穴東隅、L11層、L15層、L16層、L17層は南隅、L14層、L18層は西隅、L3層、L5層、L6層、L12層、L13層は竪穴北隅の壁周辺に堆積が見られる。

以上各層の堆積状況から、K層は明らかに人為的な成因による堆積層であり、埋没初期のL層堆積後に、鉄滓、羽口、炉壁などが堆積する行為が成されたものと考えられる。第161図にK層上面の状況、換言すれば鉄ないし鉄製品の生産に関する作業が終結した段階の面の状況を示す。P15はこの面から掘り込まれたピットで、J5層には焼土が見られ、これらの作業に伴う遺構である。作業はP15を中心に行われたとみられ、周辺から砂鉄が検出されている。北東壁の一部を切る小さな張り出しも、作業空間を広げるために、削り出されたものである。作業面は平坦ではなく、竪穴埋没過程の窪みの状態の中で行われている。またI4層、I5層の堆積も人為的な関与が考えられる。

床面には、P1～P16のピットが検出されている。P1～P4には柱痕が見られ、これらが支柱穴とみられる。P1は掘方の径35cm、深さ58cm、柱痕径16cm、P2は掘方の径40cm、深さ45cm、柱痕径18cm、P3は掘方の径50cm、深さ74cm、柱痕径17cm、P4は掘方の径35cm、深さ68cm、柱痕径14cmである。支柱穴の配置は矩形を成し、柱間はP1-P2、P3-P4が2.20m、P2-P3、P1-P4が3.73mで、柱間の長短辺の比は1.7である。P7はほぼ方形の柱穴で柱痕は見らず、深さは50cmである。P5、P6、P8、P9、P12～P14は径15cm～30cm、深さ8cm～24cmのピットで柱痕は見られない。P15、P16はK層から掘り込まれたピットである。

かまどは南東壁の最も北寄りに位置する。燃焼部には幅35cm、長さ70cm、厚さ4cmの焼土が見られ、煙道はここから斜めに立ち上がって煙出に至る。ソデは礫を芯材に用い黒褐色土でつくられている。埋土はM1、M3層が黒褐色土層、M2層は暗褐色土層である。

HH16竪穴住居跡の構築からHX01、02の埋没に至る過程を整理すと、次のようになる。

- ① HH16竪穴住居構築、使用、廃棄
- ② 埋没初期の埋土L層の堆積
- ③ 鉄製品の生産に関する作業の開始、K層堆積、作業終結
- ④ J層、I層、H層の堆積

⑤ HX01、02の構築、使用、廃棄、埋没

第168図2・3は須恵器である。2は底部から体部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、体部下半にわずかな丸味を持つ(A2⑥類)。底部は糸切り無調整で、底面に十字形とみられる線刻と、判読不能の墨書が認められる。色調はやや明るいくすべ色を呈し、胎土は細砂を含むが密である。法量は推定口径13.4cm、器高4.4cm、推定底径5.4cmとなる。

3は口縁部の破片でほぼ真直に立ち上がる(A類)。胎土は密であるが粗砂を多く含む。法量は推定口径13.0cmである。

第170図18・19は須恵器甕の体部破片である。いずれも色調はくすべ色を呈し、焼成は良好である。18は外面に縄目の叩目が認められる。内面は青海波文とみられるあて工具痕が認められるが判然としない。19は内外面ともにカキ目が認められ、大形の壺である可能性も考えられる。

第168図4・5、第170図22は土師器甕である。4は長胴形で口縁部が大きく外反する。口縁部と体部の境界には浅い沈線がめぐることが不明瞭である(A1①類)。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面が強いヘラナデおよび縦方向のヘラケズリ、内面が横方向の強いヘラナデである。胎土はやや粗で、粗砂を多く含む。法量は推定口径16.0cmである。

5は球胴形で口縁部が大きく外反する(D1類)。器面調整は口縁部外面がヨコナデ、体部上面が縦方向の弱いヘラナデを施すようである。胎土は粗く、粗砂を多く含み、やや脆弱である。法量は推定口径21.7cm、推定体部径27.9cmである。

22は張り出しを有する底部破片であり、底面に木葉痕が認められる。

第169図6～17はフイゴ羽口である。いずれも先端部に溶滓が付着し、この下位に環元焰焼成を受けた部分が認められる。口径は6が外径7.5～8.3cm、内径3.4cm、7が外径6.0cm、内径2.5～3.5cm、8が外径7.5cm、内径3.3cm、9が外径6.5cm、内径3.3cm、10が外径7.5cm、内径3.3cm、11が外径7.5cm、内径3.1cm、12が外径7.5cm、内径2.9cm、13が外径7.0cm、内径3.3cm、14が外径6.7～7.7cm、内径2.8～3.2cm、15が外径5.2～5.5cm、内径2.2～2.7cm、16が外径5.9cm、内径2.9cm、17が外径約7.0cm、内径3.8cmほどである。第170図20は流紋岩製の砥石である。

なお、図示した以外には第171図6の赤焼き土器甕の破片がK1層から出土している。また、鉄塊系遺物・鉄滓、炉壁片などが多数出土している。

(6) HH17 竪穴住居跡 (第162, 165, 170図、photo.227, 228)

HH16 竪穴住居跡の北西に検出された竪穴住居跡で、東西4.3m、南北4.0mのほぼ方形を呈し、カマドを東隅にもつ。壁高は、北東側で高く58cm、南西側では20cmとなっている。

埋土は四層に大別され、A層、B層は黒褐色土層で木炭を含む。C層はかまど前の窪み付近に堆積する層で、上面は中央で盛り上がっている。木炭を含み、C1層はかなり硬くなっている。D層は壁周辺の堆積層である。

床面に柱穴は検出されず、かまどの前に長さ1.7m、幅1.1m、深さ16cmの窪みが見られた。また床面からは木炭、礫が出土している。床面下に明黄褐色土の構築土が見られる。

かまどは東隅にあり、対角線方向に長さ1.4mの煙道をもつ。ソデは残っておらず燃焼部に長さ45cm、幅25cmの焼土が見られる。煙道は割り貫きで、底面は煙道末端に向かって低くなっている。煙道の立ち上がりは1.1mで、ここでの径は26cm～30cmである。煙道埋土のa3層は黄褐色土層で礫を含む。b

3層の黄褐色土層には木炭、焼土が含まれる。

第170図21・23は土師器甕の底部破片である。21は底部に弱い張り出しを持つもので、器面調整は外面が縦方向の弱いヘラナデ、内面が横方向～斜方向の強いヘラナデである。23は底部にやや強い張り出しを持つもので、器面調整は外面に弱いヘラナデが認められる。いずれも底面に木葉痕が認められる。

24は流紋岩製の大型の砥石であり3面に磨面が認められる。

25はフイゴ羽口であり先端部に溶滓が付着し、この下位に還元焰により焼成を受けた部分が認められる。

#### ・W6区遺構外出土遺物（第171、172図、photo.232, 233）

1～5は須恵器の坏である。

1は底部からほぼ直線的に立ち上がる。底面は糸切り無調整である(A1⑥類)。胎土は灰白色を呈し、密で焼成も良好である。法量は口径15.5cm、底径7.8cm、器高5.1cmである。2は口縁部で、わずかに外反している(C1類)。胎土は灰白色を呈し、やや密で焼成は良好である。口径は推定で14.8cmである。3は体部から口縁部にかけての破片である。体部でやや内湾し、口縁部は外反する(C2類)。胎土は灰黄色を呈し、やや密で焼成は良好である。口径は推定で15.1cmである。4は体部から底部の破片である。体部はわずかに内湾する。底部は糸切り無調整である。胎土は灰黄色を呈し、やや密で焼成は良好である。底径は推定で7.1cmである。

5は底部破片である。底部は糸切り無調整である。胎土は灰黄色を呈し、やや密、焼成は良好である。

6はロクロ使用の赤焼き土器長胴甕である。体部で内湾し、口縁部は外反する。口唇部は短く上方に引き出され、最大径を口縁部に持つ。器面調整は、外面体部にヘラナデ、底部にかけてヘラケズリが施される。胎土はにぶい黄褐色を呈し、やや密で細礫を含む。焼成はやや良好である。口径は20.0cm、体部最大径は19.5cmである。7は土師器長胴甕である。体部でわずかに内湾し、口縁部は外反する(B2③類)。器面調整は、口縁部が内外面ともヘラナデ、体部は外面がヘラナデ、内面にハケ目が施される。胎土はにぶい黄褐色を呈し、やや密で細礫を含む。焼成はやや良好である。口径20.3cm、体部最大径21.3cmで、最大径を体部に持つ。8は長胴甕の体部から底部の破片である。底部は張り出し、体部は直線的に立ち上がる。底面には木葉痕が認められる。器面調整は、内面にハケ目、外面にヘラナデが施され、外面には炭化物が付着する。胎土はにぶい黄褐色を呈し、やや密で焼成はやや良好である。底径は10.7cmである。

9～11は羽口の先端部で、いずれも溶滓が厚く付着する。スクリーントーンで示したのは還元炎焼成を受けて灰色に変色した部分である。9は外径7.5cm、内径3.0cmである。10は外径7.0cm、内径3.1cmである。11は推定で外径8.0cm、内径3.3cmである。

12～16は鉄製品である。12は厚い板状で、両端は丸みをおびる。用途は不明である。長さ7.5cm、幅1.0～1.5cm、厚さ0.7cmである。13・14は板状で先端部が曲がって尖る。いずれも鋸状かすがいの金具であったと推測される。13は下端部を欠き、14は下端の曲がった部分の先端部を欠いている。13は長さ6.5cm、幅1.5cmである。14は長さ7.0cm、幅1.3～1.5cmである。15は筒状の鉄製品で、板状のものを丸めたものである。用途は不明である。長さ4.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3～0.5cmである。16はリング状の製品である。細い板状のものを楕円形に丸めたもので、用途は不明である。内径2.7cm×1.5cm、幅1.1cm、厚

さ0.2cm×0.3cmを測る。

17～22は陶磁器類である。17は磁器の小形碗である。腰部で内湾しながら立ち上がる。全体に透明感のある白濁釉がかかる。口径は推定で8.3cmで、産地年代は不明である。18は染付磁器の碗である。高台脇から内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。見込中央に手描きの五弁花文、外面には笹文を施す。口径は5.2cm、高台径3.7cm、器高は5.2cmである。肥前系磁器で18世紀後半～19世紀の所産と考えられる。19は磁器の皿である。小さめの高台をやや粗く削り出し、高台脇から緩やかに立ち上がる。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで高台は無釉である。内面に草文を施す。口径は11.3cm、高台径3.8cm、器高3.1cmで、肥前系と考えられる。20は染付磁器の碗である。高台脇から内湾し、口縁部は垂直に立ち上がる。見込みの文様は五弁花文の一種と思われる。外面は笹文である。口径8.0cm、高台径3.0cm、器高5.5cmである。肥前系とみられるが年代は不明である。21は染付磁器皿の底部片である。外面に「明」の字が認められる。「大明成化年製」の明の字であろうか。肥前系のものと思われる。21は陶製の燈火具である。内面にくりぬいた高い突起を有する。内面および外面上半部に鉄釉を施す。胎土は暗褐色で焼き締まる。

## 第2節 東地区

東地区は当遺跡内でも最東部にあたり南西から北東方向へのびる標高39～36mの尾根とその南に位置する標高35～32mの洞(谷)に竪穴住居跡などの遺構・遺物が検出された。東地区では竪穴住居跡10棟、土坑跡16基検出したが、その内3基の土坑跡から貝、魚骨、獣骨、植物の種子などの自然遺物が出土している。以下、竪穴住居跡から順に記述する。

### 1 竪穴住居跡

#### (1) HH18 竪穴住居跡(第174図～第175図)

平面形は東壁から南東壁を欠くが残存部分から隅丸長方形を呈する。規模は長軸で4.1m、短軸で3.3m以上をはかる。壁は床面からほぼ45度の角度で緩やかに立ち上がるが西壁側はやや直となり、壁高は西壁で0.8mをはかる。

埋土は3層に大別される。A層は黄褐色土、黒褐色土、B層は暗褐色から黒褐色土、C層は黄褐色土を基本としそれぞれ何層かに細分される。

床面はほぼ平坦面で地山面をそのまま使用しており貼床などは認められなかった。

柱穴および柱穴状のピットは北東隅に浅いP1を検出しただけで詳細は不明である。

カマド跡は西壁のほぼ中央に位置し、カマド袖および天井部に角礫や亜角礫を芯材として構築されている。煙道は削り貫き方式で住居外へ約1m程のびており、煙出口は径0.5mの円形を呈する。煙道底面は煙出口に向かって幾分下り勾配の傾斜となる。

遺物(第177・179図)は埋土や床面などから出土している。

1はB2層から出土したあかやき土器の坏である。底部から体部にかけてはやや内湾気味に立ち上がり口縁部はそのまま抜ける。内外面ともロクロ目だけで再調整の痕跡は認められない。底部の切り離しは回転糸切りで外縁部がやや磨滅しているだけで無調整である(B⑥類)。口径14.8cm、底径5.5cm、器高6.0cmをはかる。胎土は土師器に類似し砂礫、細砂を若干含むが比較的緻密である。焼成は内外面の一部が剥落しているなどあまり良くない。

2は床面から出土した土師器甕の口縁部から体部中半までの破片で、最大径部を口縁部に有し体部はほぼ直線的になる長胴形となるものである。口縁部は短く外反し口縁部上端は薄くなりそのまま抜ける(A2③類)。推定口径22.0cmをはかる。器面調整は内外面ともに磨滅が著しく極く一部で観察されただけである。口縁部が内外面ともに屈曲部付近までヨコナデ調整で、体部外面は縦ないしは斜方向の弱いヘラナデ、内面は横ないしは斜方向の弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く、焼成もあまり良くない。3は埋土から出土した土師器甕の口縁部から体部中半までの破片で小形の甕である。最大径部は口縁部ないしは体部上半に有し体部がほぼ直線的な長胴形となるものである。口縁部は短く外反し口縁上端は薄くなりそのまま抜ける(A2③類)。推定口径12.8cmをはかる。器面調整は、口縁部が内外面ともに屈曲部付近までヨコナデ調整で、体部外面は縦ないし斜方向の弱いヘラナデ、内面は横方向の強いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く、焼成もあまり良くない。4は床面から出土した底部片で体部はやや外傾気味に立ち上がる。全体の器形は不明である。底部外面の端部が僅かながら外側に張り出す。推定底径9.2cmをはかる。器面調整は体部外面が縦方向の強いヘラナデ、内面は斜方向に弱いヘラナデ



調整が施されている。また、底部外面の端部の張り出し部は指で整形している。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く、焼成もあまり良くない。底面には木葉痕が残されている。5は床面から出土した土師器甕の底部片である。底部外面の端部が外側に張り出す。僅かに残っている底面には木葉痕が観察される。

6・7は鉄製品である。6はB2層から出土した紡錘車で軸部の両端を欠く。円盤部分は直径5.8cm厚さ0.6cmをはかる。軸部の断面は隅丸方形から円形となる。7はB2層から出土した刀子の破損品で刀部のみを残すだけである。厚さが0.4cmとやや肉厚な感じがする。

この他図示できなかつたが小鉄塊が1点出土している。

## (2) HH19 竪穴住居跡 (第174図・第176図)

HK06やHK02、HK03と重複関係にあると考えられるが、東側の大半を欠きHK02、HK03との新旧関係は不明である。HK06よりは新しい時期のものである。

平面形は東側の大半を欠くが残存部分から隅丸長方形状を呈するものと推定される。規模は長軸で4.7m、短軸で1.6m以上をはかる。壁は床面からほぼ45度の角度で緩やかに立ち上がるが西壁側はやや直となり、壁高は西壁で0.2mをはかる。

埋土は2層に大別される。A層は暗褐色土、B層は黒褐色土を基本としそれぞれ2層に細分される。床面はほぼ平坦面で地山面をそのまま使用しており貼床などは認められなかつた。

柱穴および柱穴状のピットはP1からP6までを検出したが、柱痕跡はP4、P5で確認されたが柱配置などは不明である。

カマド跡は残存部分では確認されなかつた。

遺物(第177図)は埋土や床面などから出土している。

1は床面から出土した底部片である。全体の器形は不明であるが、接合できなかつた同一個体片の体部から体部がやや膨らみ加減となるが球形となる程ではない。底部外面の端部は張り出さず底面はかなりの上げ底となる(G類か)。推定底径10.4cmをはかる。器面調整は体部外面が横ないしは斜方向の強いヘラナデ、内面は斜方向の弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み、粗く、焼成もあまり良くない。底面には木葉痕が残されている。

## (3) HH20 竪穴住居跡 (第190図～第191図)

洞部(谷)の堆積層の一番厚い部分に検出したもので、HH21、HH22、HK07～HK11と重複関係にあるが、当竪穴住居跡はそれらのいずれにも切られる古い時期のものである。HK10は当竪穴住居跡に伴うものである。また、西側には竪穴状の掘り込み(堆積土層A層)が存在し当住居跡やHH21、HH22を覆うが、HK07～HK09やHK11はこのA層を掘り込んでいる。また、出土した第193図23の土師器甕がHK04から出土した破片と接合でき当竪穴住居跡とHK04土坑跡はほぼ同時期の遺構と考えられる。

平面形は東壁を欠くが残存部分から長方形状を呈する。規模は長軸で8.1m、短軸で5.1m以上をはかる。壁は床面からほぼ直に立ち上がり、壁高は南壁で0.9mをはかる。

埋土はD層からなり黒褐色土を基本とし更に5層に細分される。このうちD4層だけが地山に近い黄褐色土で人為的な堆積状況が考えられる。

床面はほぼ平坦面で地山面をそのまま使用しており貼床などは認められなかった。床面上の北西側に径0.7m、深さ0.2mをはかる小土坑跡が存在する。用途は不明だが埋土中には礫が混入している。柱穴および柱穴状のピットはP 1からP 8までを検出したが、いずれも深さ0.2m内外と浅い小規模なもので柱痕跡が確認されたのはP 4だけである。柱配置などは不明である。

カマド跡は北壁のほぼ中央に位置し、カマド袖部分に角礫を立て芯材として構築されている。煙道は削り貫き方式で住居外へ約1.5mほどのびており煙出口は径0.4×0.3mの方形を呈する。煙道底面は煙出口に向かって緩やかな下り勾配の傾斜となっている。

遺物(第192図～第194図)は埋土や床面などから出土している。埋土としたものは冒頭にも記したとおり重複が著しくHH 2 1、HH 2 2のものも混在してしまい当住居跡に伴わない可能性が高い。

1～14は須恵器で1～5は坏、6～8は台付壺ないしは甕、9～14は甕の破片である。

1は埋土から出土したもので底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり口縁部が外反するものである。再調整の痕跡はなく、底部の切り離しは回転糸切り無調整である(C 2 ⑥類)。胎土は砂礫や細砂を含みやや緻密さに欠ける。焼成は比較的良い。底面に1条の線刻が観察される。色調は内外面ともくすべ色を呈する。推定口径13.8cm、器高3.8cm、底径6.3cmをはかる。2は埋土から出土したもので底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり口縁部がやや大きく外反するものである。再調整の痕跡はなく、底部の切り離しは回転糸切り無調整である(C 2 ⑥類)。胎土は砂礫や細砂をやや含むが比較的緻密で、色調は内外面ともくすべ色を呈する。焼成は良い。推定口径13.0cm、器高4.4cm、底径6.4cmをはかる。3は埋土から出土したもので底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり口縁部が外反するものである。再調整の痕跡はなく、底部の切り離しは糸切りである(C 1 ⑥類)。胎土は細砂をやや含むが比較的緻密で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。焼成は比較的良い。推定口径14.9cm、器高5.3cm、底径6.5cmをはかる。4はB層から出土したもので底部を欠くもので体部は内湾気味に立ち上がるものと思われる。口縁部はやや外反気味に抜ける。残存部には再調整の痕跡はない(C 2 類)。胎土は細砂をやや多く含むが比較的緻密で、色調は内外面とも灰白色を呈する。焼成は良い。推定口径16.0cmをはかる。5はB層から出土したもので口縁部を欠く。底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり体部下端と底部の間に僅かな段がつく。残存部をみるかぎりにおいては再調整の痕跡はない(C ⑥類)。底面は回転糸切り無調整で外縁部が磨滅している。胎土は細砂もあまり含まず緻密で金雲母を混入している。色調は内外面とも灰白色を呈し焼成も良好である。底径6.0cmをはかる。6はC層から出土した台付壺と思われるもので体部上半から口縁部を欠く。底部から体部にかけては内湾気味に立ち上がる。台部は短く外側にハ字状にひらく。底部は切り離した後弱いヘラナデ調整を施している。器面の再調整は体部上半は残存部分すべてが回転ヘラケズリ調整されており、体部内面は強いヘラナデ調整で下端部から底面にかけてはナデツケ調整が施されている。胎土は砂礫粒を僅かに含むだけで緻密で、色調は外面はくすべ色、内面は赤褐色を呈する。焼成は良好である。底径8.5cmをはかる。7はK層から出土した壺か甕となる口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部は外反し上端を上方に引き出している。口縁部から頸部の一部にかけてにぶい黄褐色の自然釉が付着している。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は内外面ともくすべ色を呈する。推定口径16.3cmをはかる。8は埋土から出土した体部が膨らむもので壺ないしは甕と考えられる頸部から体部中半にかけての破片である。胎土は砂礫粒や細砂を若干含むが比較的緻密で、色調は内外面ともくすべ色を呈する。焼成は良好である。9は床直上から出土したもので甕の体部片と思われる。外面に平行文の印目痕が残されており、

内面は剥落している。胎土は砂礫や細砂を含みやや緻密さを欠き色調はくすべ色を呈する。焼成はあまり良くない。11は埋土から出土したもので外面には平行文の叩目の痕跡が残っている。内面は平行文のあて工具の痕跡のうえに刷毛目調整を施している。胎土は砂礫や細砂を含みやや緻密さを欠く。色調はやや黒褐色、内面はくすべ色を呈する。焼成は良好である。10～13は埋土から出土したもので同一個体と思われるものである。外面には格子目状の叩目の痕跡が残され、内面は弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は細砂を若干含むが比較的緻密で色調は内外面ともくすべ色を呈する。13で推定底径16.8cmをはかる。14は埋土から出土した底部片で低い台部が付くものである。台部は6とは異なりほぼ直に付く。体部下端の外面には弱い縦方向のヘラナデ、内面は横ないし斜方向の弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫粒がやや多いが比較的緻密で色調は内外面とも灰色を呈する。焼成は良好である。推定底径15.5cmをはかる。

15～28は土師器で15～22は坏で21・22の不明な底部片を除きすべて内面黒色処理を施したものである。23～28は甕である。15は床面から出土したもので底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり口縁部は丸味をもちそのまま抜ける。底部の切り離しは糸切りで、再調整は外面は口縁部から体部にかけては確認されず底面全面に施しているが磨滅が顕著で調整痕は不明である(B②類)。内面はヘラミガキ調整が施されているが口縁部から体部にかけて横ないし斜方向に調整した後底面は放射状になされている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗く、焼成もあまり良くない。16はD層から出土したもので底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり口縁部はやや外反する。底部の切り離しは糸切りで、再調整は外面は口縁部から体部にかけては確認されず底面も磨滅が顕著で調整痕は不明である(C1⑥類)。内面は口縁部付近は内面黒色処理を施しただけでロクロ目が残っており体部から底面にかけては横ないし斜方向にヘラミガキ調整が施されている。胎土は細砂を含みやや比較的緻密だが焼成はあまり良くない。推定口径15.0cm、器高5.2cm、底径6.2cmをはかる。17はD層から出土したもので底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり口縁部はそのまま抜ける。全体的に磨滅が顕著だが底部の切り離しは糸切りで、再調整は外面は口縁部から体部にかけては確認されない(B⑥類)。内面は剥落が著しく一部でしか確認されないが横ないし斜方向にヘラミガキ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を多く含む粗い。焼成も良くない。推定口径13.0cm、器高4.6cm、底径7.0cmをはかる。18はK層から出土したもので底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する。底部の切り離しは糸切りで(C1⑥類)、再調整は外面では確認されず、内面は横ないし斜方向にヘラミガキ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を多く含む粗い。焼成も良くない。推定口径14.5cm、器高5.1cm、底径6.0cmをはかる。19はK層から出土したもので底部を欠く。体部は内湾気味に立ち上がり口縁部はそのまま抜ける。再調整は外面体部下端の一部にヘラケズリ調整の痕跡が確認され(B①類)、内面は横ないし斜方向にヘラミガキ調整が施されている。胎土は細砂をやや多く含むが比較的緻密である。焼成も比較的良い。推定口径13.8cmをはかる。20は埋土から出土したもので口縁部を欠く。底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がる。底部の切り離しは糸切りで、外面の再調整は確認されず内面は横ないし斜方向にヘラミガキ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂をやや多く含む緻密さを欠く。焼成もあまり良くない。推定底径5.5cmをはかる。21・22は底部片で全体の器形などは不明である。底部の切り離しはどちらも糸切りで再調整の痕跡は確認されない。推定底径は21で7.8cm、22で5.7cmをはかる。

23は南西隅の床面から出土した土師器の小形甕で、HK04から出土した破片と接合できた。口縁部から頸部の一部を欠くだけである。底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する(F2③)

類)。また、底部外面の端部が外側に小さく張り出す。器面調整は内外面とも口縁部から屈曲部付近まではヨコナデ調整され体部外面は縦方向に弱いヘラナデ調整、内面は横方向に強いヘラナデ調整が施されている。口縁部内面には屈曲部付近まで炭化物の付着がみられ、底面には木葉痕が残されている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗いが、焼成は比較的良い。口径16.0cm、器高16.5cm、底径8.0cmをはかる。24は埋土から出土した小形甕で口縁部から体部前半の破片である。体部はやや膨らみ口縁部は短く外反ないしは直立気味となる(H類)。器面調整は内外面とも口縁部から屈曲部付近まではヨコナデ調整され体部外面は縦方向に弱いヘラナデ調整、内面は横方向に弱いヘラナデ調整が施されているが内外面とも磨滅が著しい。口縁部上部には補修孔と思われる穿孔がある。胎土は砂礫や細砂を含み粗く、焼成もあまり良くない。推定口径10.1cmをはかる。25は埋土から出土した底部片で全体の器形は不明である。底部外面の端部が外側に僅かに張り出す。底面には木葉痕を残す。推定底径11.0cmをはかる。26は埋土から出土した底部片で全体の器形は不明である。底部外面の端部が外側に小さく張り出す。底面には木葉痕を残す。推定底径7.95cmをはかる。27は埋土から出土したもので体部前半から底部の破片である。体部はほぼ直線的に立ち上がる長胴形を呈するものと推定される。底部外面の端部が外側に張り出す。器面調整は体部外面は縦方向に弱いヘラナデ調整、内面は横から斜方向に弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を含み粗く、焼成もあまり良くない。推定底径9.65cmをはかる。28は埋土から出土したもので体部前半から底部の破片である。体部はほぼ直線的に立ち上がる長胴形を呈するものと推定される。底部外面の端部が外側に張り出す。器面調整は体部外面は縦方向のヘラケズリ調整で下端の張り出し部付近は弱いヘラナデ調整で整形されている。内面は横から斜方向に弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を比較的多く含みやや粗いが、焼成は比較的良い。推定底径9.5cmをはかる。

29、30は砥石である。29はD3層出土で残存長21.0cmをはかるものである。機能面は非常に滑らかで凹んでいる。また、擦痕が観察される。30は埋土出土で両面と一方の側縁部を使用している。機能面は29同様滑らかで擦痕が観察される。

31～35は鉄製品である。31はD3層出土の鉄鎌でわたくりの深い三角形を呈するものである。軸部は欠損している。身部はやや丸味をもち厚さ0.6cmをはかる。32はD2層出土で実測図面上下が転置しているが小形の鎌で湾曲が強い。残存長12.0cm、厚さ0.5cmをはかる。33はD2層出土のくさびと考えられるものである。変形しているがコ字状の形態を呈している。34はD2層出土のものだが器種名、用途とも不明である。先端部が折り曲げられている。35はD層出土のものだが34同様不明なものである。両端部は欠損している。

#### (4) HH21 竪穴住居跡 (第190図～第191図)

HH20、HH22、HK09、HK11と重複関係にあるが、当竪穴住居跡はHH20よりは新しいが、それ以外のものにはいずれにも切られる古い時期のものである。調査時点ですでに掘りすぎでしまい土層の断面観察などで確認したものである。

平面形は西壁から南壁の一部を検出しただけで不明な点が多いが、ほぼ方形を呈するものと推定される。規模は土層断面の確認できた部分で長軸で4.5m、短軸で2.5m以上をはかる。壁は床面からほぼ直に立ち上がり、壁高は西壁で0.55mをはかる。

埋土はC層からなり黒褐色土を基本とし更に4層に細分される。このうちC1層には地山に近い明

黄褐色土を塊状に比較的多量に混入し人為的な堆積状況をうかがわせる。また、床面の北東側(HH 2 2との重複する付近)に堆積するC 4層は焼土を大量に含むものでカマド跡の存在を考えさせるものである。

床面はHH 2 0が埋没終了直後(人為的に埋められた可能性が高い)の面(D 1層上面)を床面としており、ほぼ平坦面であるが貼床などは認められなかった。

柱穴および柱穴状のピットなどは不明である。

カマド跡は確認できなかったが、埋土のところでも記したように床面の一部に焼土のひろがり存在したが、それがカマド跡に関連するものかは把握できなかった。

遺物は前記のとおり調査時点で掘りすぎてしまったが、HH 2 0の埋土としたものの一部が相当する。

#### (5) HH 2 2 竪穴住居跡(第190図～第191・195図)

HH 2 0、HH 2 1、HH 2 3、HK 1 3、HK 1 4と重複関係にあるが、HH 2 0、HH 2 1よりは新しく、HH 2 3よりは古い。HK 1 3、HK 1 4との関係は不明である。

平面形は東壁を欠き、北壁側はHH 2 3に切られ南壁はHH 2 0、HH 2 1との重複関係の把握が複雑で明確さを欠き不明な部分が多いが、残存部分から長方形を基調とするようである。規模は長軸で6.5m、短軸で2.0m以上をはかる。壁は床面からほぼ直に立ち上がり、壁高は西壁で0.5mをはかる。

埋土はB層からなり褐色土から暗褐色土を基本とし更に6層に細分される。このうちB 5層には炭化物や焼土、礫を含む。また、B 6層には地山に近い黄橙色土を塊状に混入する。

床面は南側はほぼHH 2 1が埋没終了直後の層(C 1層上面)の上面で大部分は地山面をそのまま使用する平坦面で貼床などは認められなかった。

柱穴および柱穴状のピットはP 1からP 8までを検出したが、いずれも深さ0.1～0.3m内外と浅い小規模なもので柱痕跡は確認されなかった。柱配置などは不明である。

カマド跡は確認されなかったが、西壁側のほぼ中央部の床面上に焼土のひろがりを検出したがカマド跡と関連するものかは不明である。

遺物(第192～194図・197図)は埋土や床面などから出土している。

1はA層から出土した土師器甕で口縁部から底部まで接合できたものである。底部から体部はゆるやかに膨らみながら立ち上がり口縁部が外反する長胴形の器形となる。最大径部は体部上半に有し底部外面の端部が外側に張り出す。口縁部上端は丸味をもちそのまま抜ける(B 2②類)。推定口径22.0cm、器高24.0cm、推定底径10.0cmをはかる。器面調整は、口縁部が内外面ともに屈曲部付近までヨコナデ調整で、体部外面は縦ないしは斜方向の弱いヘラナデ、内面は横ないしはやや斜方向の強いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫から小石状のものを含みやや粗く、焼成もあまり良くない。底面には木葉痕が残されている。

2は埋土から出土した砥石である。機能面は非常に滑らかで斜方向に擦痕が多く観察される。残存長13.1cm、最大幅10.0cm、最大厚4.5cmをはかる。

3・4は鉄製品である。3は埋土から出土した鉄鏃でわたくりが深く先端部がやや丸みを有す大形の三角形を呈する。軸部は端部で欠損しており断面が正方形となる。身部の厚さが0.3cm、軸部の厚

さ0.2cmをはかる。4は埋土から出土したもので器種は不明で棒状を呈するものである。全長14.2cmをはかるもので、リング状の突帯?が付く。断面形は長方形となり最大部位で0.8×0.4cmをはかる。

#### (6) HH 2 3 竪穴住居跡 (第195図～第196図)

HH 2 2、HK 1 5と重複関係にあるが、HH 2 2よりは新しいがHK 1 5との関係は遺構の掘り込み面がどちらも表土直下なため不明であった。

平面形は東壁を欠くが残存部分から長方形を呈する。規模は長軸で3.6m、短軸で2.0m以上をはかる。壁は床面からやや傾斜を持ちながら立ち上がり、壁高は西壁で0.5mをはかる。

埋土はD層、E層からなり暗褐色から黒褐色土を基本とし、D層は3層に細分される。

床面は地山面をそのまま使用しており、ほぼ平坦面で貼床などは認められなかったが、床面のほぼ中央部に焼土のひろがりを検出した。

柱穴および柱穴状のピットは確認されなかった。

カマド跡は確認されなかった。

遺物(第198図)は埋土や床面などから出土している。

1・2は床面から出土した須恵器甕の体部片で同一個体と思われる。全体の器形は不明。外面は平行文の叩目痕、内面には青海波文のあて工具痕が残る。胎土は細礫を含むが比較的緻密である。焼成はよく色調は内外面とも灰色を呈する。この他、図示できなかったが床直上層から内外面ともロクロ目を残す器種不明のものが1点出土している。胎土は細礫、砂粒を含みやや疎で外面側の方だけが灰色で大部分が黄橙色を呈する。

3～7は土師器の甕である。4はD 2層から出土したもので、体部がほぼ直線的な長胴形となり体部に最大径を有す。口縁部は短く外反し口縁上端部はやや薄くなりそのまま抜ける(E 1類)。推定口径は23.6cmをはかる。内外面とも磨滅が著しく器面調整はごく一部でしか観察できなかった。口縁部は内外面とも外反する屈曲部付近までヨコナデ調整で、体部外面は縦方向の弱いヘラナデ、内面は横ないしは若干斜方向の強いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫を大量に含み粗く、焼成もあまり良くない。3はD 2層から出土したもので、4同様最大径部を体部に有す長胴形となるものである。口縁部は4よりも短く外反し丸味を持つ(E 1類)。推定口径14.0cmをはかる。器面調整は口縁部が内外面ともに屈曲部までヨコナデ調整で、体部外面は縦方向の強いヘラナデ、内面は横方向の弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫を含みやや粗いが焼成は比較的良好である。5は床面から出土したもので、体部がほぼ直線的な長胴形となるものと推定されるもので、底部外面の端部が僅かながら外側に小さく張り出す。推定底径14.2cmをはかる。内外面とも磨滅が著しく器面調整はごく一部でしか観察できなかった。体部内外面とも縦方向の弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫を大量に含み粗く、焼成も良くない。6は床面から出土したもので、体部がほぼ直線的な長胴形となるものと推定されるもので、5同様に底部外面の端部が僅かながら外側に小さく張り出す。推定底径12.0cmをはかる。内外面とも磨滅が顕著で地肌が露出しており器面調整は内外面とも不明である。胎土は砂礫を大量に含み粗く、焼成も良くない。僅かに残っている底面には木葉痕がみられる。7はD層から出土した底部片で全体の器形は不明である。底部外面端部の外側への張り出しはない。推定底径14.1cmをはかる。内外面とも磨滅が著しく器面調整は外面のごく一部でしか観察できず内面は地肌が露出しており不明である。外面は縦方向の弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫から小石状のも

のを大量に含み粗く、焼成も良くない。

この他図示できなかったが、床直上層や埋土中から数片の内面黒色処理を施した坏や埋土中から鉄滓数点が出土している。

#### (7) H H 2 4 竪穴住居跡 (第199図～第200図)

尾根上の西側に位置する。

平面形は東壁から南壁を欠くが残存部分から隅丸長方形を呈する。規模は長軸で7.8m、短軸で6.5m以上をはかる。壁は北壁から西壁側は床面からほぼ直に立ち上がり、東壁側はやや緩やかになる。壁高は北東壁で0.6mをはかる。

埋土はA層、B層に大別されそれぞれ黒褐色から暗褐色土を基本とし更にB層は2層に細分される。B層はHK 1 6まで堆積しておりHK 1 6が当竪穴住居跡に伴うものであることが確認された。

床面はほぼ平坦面で地山面をそのまま使用しており貼床などは認められなかった。床面上の北壁側に径1.7m、深さ1.2mをはかる土坑跡が存在する。用途は不明だが埋土のC 2、C 4層中には多量の炭化物や焼土が混入している。

柱穴および柱穴状のピットはP 1からP 13までを検出したが、P 1～3は深さ0.5～0.6mありP 1、P 2では柱痕跡が確認され、これらが主柱穴に相当するものと考えられる。その他はいずれも小規模で深さも0.3m内外と浅いもので柱痕跡は確認されない。柱配置はP 1～3を中心とする4本柱と推定されるがP 1に対応するものが検出されなかった。

カマド跡は西壁のほぼ中央に位置し、黄褐色から黄橙色土で構築されており角礫などは利用されないものである。煙道は削り貫き方式で住居外へ約1.2m程のびており煙出口は径0.4mの円形を呈する。煙道底面は煙出口に向かってやや急な下り勾配の傾斜となっている。煙出口埋土L 2層中には比較的大きな礫が混入しており、煙出口に礫を使用した何らかの施設を作っていたものと思われる。

遺物(第201図)は埋土や床面などから出土している。

1～5は検出面から出土した須恵器の破片である。1は底部片で全体の器形は不明。体部下端外面はヘラケズリ調整されており、底部内面は強いヘラナデ調整されている。推定底径11.0cmをはかる。胎土は砂礫粒や細砂をやや多く含み粗い。焼成は良好で内外面とも明るい灰色を呈する。2～5は甕ないしは壺の体部片と思われるもので2、3は外面に平行文の叩目痕が内面には青海波文のあて工具痕が観察される。いずれも胎土は砂礫粒や細礫を多く含み粗く、焼成も良くない。色調は外面がやや暗い灰色、内面は灰色からにぶい黄橙色を呈する。4、5は格子状の叩目痕が残り内面は無文である。いずれも胎土は細砂を含むが比較的緻密で内外面とも灰色を呈する。

6は土師器坏の口縁部から体部の破片で内面黒色処理を施しているものである。体部から口縁部にかけては内湾気味に立ち上がり口縁部上端が外削される(B類)。推定口径11.8cmをはかる小形のものである。内外面とも磨滅が顕著で地肌が露出しているため器面調整などは不明である。胎土も砂礫から小石状のものまでを大量に含み粗く焼成も不良である。

この他図示できなかったが土師器甕の口縁部、体部の小破片や鉄滓、棒状の鉄製品などが出土している。土師器甕の口縁部片は口縁が短く外反するものである。

## (8) H H 2 5 竪穴住居跡 (第202図～第203図)

尾根上のほぼ中央部に位置する。

平面形をみると竪穴住居跡が2棟重複しているかのようだが、土層断面の観察などからHK 1 7も含め同一の遺構であることが判明し拡張した可能性が考えられる。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸で6.0m、短軸で5.3mをはかる。壁は東壁はやや傾斜するが他は床面からほぼ直に立ち上がる。壁高は南壁で0.8mをはかる。

埋土はA層、B層に大別されそれぞれ黒褐色から暗褐色土を基本とし更にA層は2層にB層は5層に細分される。

床面は北側から西側が一段高くなっているが、いずれもほぼ平坦面で地山面をそのまま使用しており貼床などは認められなかった。一段低くなっている床面上の中央部に径2.3m、深さ0.4mをはかる土坑跡(HK 1 7)が存在する。

柱穴および柱穴状のピットはP 1 からP 4 までを検出したが、いずれも深さ0.2m内外と浅いもので柱痕跡はP 2 だけ確認された。柱配置などは不明である。

カマド跡は一段低くなっている床面上の西壁のやや南寄りに位置し、角礫や亜角礫を芯材として構築されている。カマドに伴う焼土も確認しているが、煙道や煙出口は確認できなかった。

遺物(第204図)は埋土や床面などから出土している。

1～3はA 1 層から出土した須恵器甕と推定される体部片で同一個体と思われる。全体の器形は不明。外面は平行文の叩目痕、内面には半円状のあて工具痕(青海波文?)が残る。胎土は細砂を含み緻密さに欠ける。焼成は比較的良好で色調は内外面とも灰色を呈する。この他、図示できなかったが数点の須恵器の小片が出土している。

4～11は土師器の甕である。4～6は口縁部から体部、7～11は体部下端から底部にかけての破片である。4はB 4 層から出土したもので、体部がやや膨らむ球胴形となり体部中半に最大径を有す。口縁部は短く外反し口縁上端部は丸味をもちそのまま抜ける(E類)。推定口径は12.8cmをはかる。内外面とも磨滅が著しく器面調整はごく一部でしか観察できなかった。口縁部は内外面とも外反する屈曲部付近までヨコナデ調整で、体部外面は磨滅が顕著で不明、内面は横ないし若干斜方向の弱いヘラナデ調整が施されているのが僅かに確認された。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く、焼成も良くない。6はK層から出土したもので、最大径部を体部に有す長胴形となるものと思われる。口縁部は短く外反し丸味を持つ(E 1 類)。推定口径11.4cmをはかる。器面調整は口縁部が内外面ともに屈曲部付近までヨコナデ調整で、体部外面は縦方向の弱いヘラナデ、内面は横方向の弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫を含むがやや緻密で焼成は比較的良好である。5はK層から出土したもので、体部中半に最大径部を有すものではほぼ直線的な長胴形となるものと推定される。口縁部が内湾気味に直立し口縁部上端がやや薄くなる(E 2 類)。推定口径10.2cmをはかる。内外面とも磨滅しているが口縁部はヨコナデ調整されている。体部外面は特に磨滅が顕著で器面調整は不明である。体部内面は横から若干斜方向の強いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く、焼成もあまり良くない。7はK層から出土したもので、体部がほぼ直線的な長胴形となるものと推定されるもので、底部外面の端部が僅かながら外側に小さく張り出す。底径10.6cmをはかる。体部外面には炭化物が付着している。器面調整は縦方向に弱いヘラナデ調整が施されている。体部内面は横から若干斜方向の弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫を若干含むものの比較的



緻密で焼成も良い。底面には木葉痕が残りその上にヘラ状工具の側面部による線刻が施されている。8はA1層から出土した底部片で体部はほぼ直線的に立ち上がる長胴形となるものと推定される。底部外面の端部の外側への張り出しはない。推定底径12.0cmをはかる。体部外面の磨滅が著しく器面調整はごく一部でしか観察できず縦方向の弱いヘラナデ調整が施されている。内面は体部下端は横方向、底面は放射状に弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫から小石状のものを含みやや粗く、焼成もあまり良くない。僅かに残っている底面には木葉痕が認められる。9はB1層から出土した底部片で体部はやや外傾気味に立ち上がる。全体の器形は不明である。底部外面の端部が僅かながら外側に小さく張り出す。推定底径9.3cmをはかる。内外面とも磨滅が顕著で器面調整は不明である。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く焼成も良くない。10はK層から出土した底部片で体部はやや外傾気味に立ち上がる様だが、全体の器形は不明である。底部外面の端部が外側に張り出す。推定底径12.1cmをはかる。内外面とも磨滅が顕著で器面調整は不明である。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く、焼成も底面が剥落しているなど非常に良くない。11はK層から出土した底部片で体部はやや外傾気味に立ち上がる。全体の器形は不明である。底部外面の端部の外側への張り出しはない。底径10.2cmをはかる。体部外面は横方向の弱いヘラナデ調整がなされ体部下端の底部付近は横方向への強いヘラナデ調整で形を整えている。体部内面は横ないしは若干斜方向に強いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫を若干含むものの比較的緻密で焼成も比較的良い。

この他図示できなかつたが、埋土中から数片の内面黒色処理を施した坏や鉄滓が数点出土している。

#### (9) HH26 竪穴住居跡 (第205図～第206図)

尾根上の東側に位置する。HH27、HK18と重複しているが、どちらにも切られる古い時期のものである。

平面形は西壁側が少し張り出すがほぼ隅丸長方形を呈する。規模は長軸で3.2m、短軸で2.5mをはかる。壁はほぼ直に立ち上がるが、南壁側が幾分緩やかになる。壁高は西壁で0.6mをはかる。

埋土はC層からなり暗褐色土を基本とし更に3層に細分される。

床面はほぼ平坦面で地山面をそのまま使用しており貼床などは認められなかつた。

柱穴および柱穴状のピットは検出されなかつた。

カマド跡は東壁のやや南に位置し、角礫を芯材として褐色土などで構築されている。煙道は割り貫き方式で住居外へ約1.1m程のびており煙出口は径0.3mの円形を呈する。煙道底面は煙出口に向かって緩やかな下り勾配の傾斜となっている。

遺物(第207図)は埋土や床面などから出土している。

1～3は土師器甕の口縁部から体部にかけての破片である。1は床面から出土したもので体部がほぼ直線的な長胴形となり体部に最大径を有す。口縁部は短くほぼ直立し丸味を持つ。推定口径は15.4cmをはかる。内外面とも磨滅しているが、特に内面は著しい。口縁部は内外面とも外反する屈曲部付近までヨコナデ調整で、体部外面は縦ないしは斜方向の弱いヘラナデ、内面は磨滅により地肌が露出し不明で輪積み痕が認められる。胎土は砂礫を大量に含み粗く、焼成もあまり良くない。3は床面から出土したもので、最大径部を体部上半の肩部に有す長胴形となるものである。口縁部は僅かに外反する程度でほぼ直立に近い。口縁部上端は薄くなりそのまま抜ける(E2類?)。推定口径18.8cmをはかる。器面調整は口縁部が内外面ともに屈曲部付近までヨコナデ調整で、体部外面はヨコナデ後に口

縁部上端から縦ないしは斜方向の強いヘラナデ、内面は横方向の弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫から小石状のものを含み粗く焼成もあまり良くない。2は床面から出土したもので、最大径部が体部中半に有し体部が大きく膨らむ球胴形となるものである。口縁部は短くてほぼ直立し全体的に丸味をもつ(E 2類)。推定口径24.2cmをはかる。器面調整は口縁部が内外面ともに屈曲部付近までヨコナデ調整で、体部外面はほぼ縦方向の弱いヘラナデ、内面は横方向に強いヘラナデ調整が施されている。また、内面の一部には炭化物の付着がみられる。胎土は砂礫を含みやや粗く、焼成もあまり良くなく内面がやや磨滅している。4はK 1層から出土した土師器甕の底部で、底部外面の端部が僅かながら外側に張り出す。底径12.5cmをはかる。内外面とも磨滅が著しいが外面には弱いヘラナデ調整が施されている。内面は地肌が露出しており器面調整は不明である。底部中央が高く盛り上がっている。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く、焼成も良くない。底面は磨滅しており不明である。

#### (10) HH 2 7 竪穴住居跡 (第205図～第206図)

尾根上の東側に位置する。HH 2 6、HK 1 8と重複しているが、HH 2 6よりは新しくHK 1 8には切られる古い時期のものである。

平面形は南壁側を欠くが残存部分からほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。規模は長軸で5.7m、短軸で3.9m以上をはかる。壁は北壁側はほぼ直に立ち上がるが、東西壁側がかなり緩やかになる。壁高は北西壁で0.5mをはかる。

埋土はB層からなり暗褐色から黒褐色土を基本とし更に5層に細分される。B 1層は南側で重複するHH 2 6の上面を覆っている。B 5層は北壁を巡る周溝の埋土である。

床面はほぼ平坦面で地山面をそのまま使用しており貼床などは認められなかった。

柱穴および柱穴状のピットはP 1～P 3までを検出した。P 1、P 2は深さ0.5cmをはかりP 1では柱痕跡が確認される。この2つは支柱穴に相当するものと考えられる。柱配置はP 1、P 2に対応するであろう柱穴が南側にもあったと思われ4本柱の構造になるものと考えられる。

カマド跡は北壁のほぼ中央部に位置し、角礫を芯材として褐色土などで構築されている。カマド跡に伴う焼土は確認されたが、煙道および煙出口は確認できなかった。

遺物(第208図)は埋土や床面などから出土している。

1はB層から出土した土師器坏の口縁部を欠くもの。ロクロ成形で内面黒色処理を施している。底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がる。体部下端にはヘラケズリによる再調整が施されている(B ①類?)。内面は磨滅がみられるが横方向のヘラミガキ調整が施されている。底部の切り離しは回転糸切りで再調整はみられず外縁が磨滅している。底径は5.5cmをはかる。胎土は細砂を若干含むものの緻密で、焼成は比較的良い。2は床面から出土した土師器甕の口縁部から体部中半までの破片で、最大径部を口縁部に有し体部はほぼ直線的になる長胴形となるものである。口縁部は短く外反し口縁部上端は薄くなりそのまま抜ける(A 2 ③類)。推定口径24.0cmをはかる。器面調整は口縁部が内外面ともに屈曲部付近までヨコナデ調整で、体部外面は縦ないしは斜方向の弱いヘラナデ、内面は磨滅が顕著で地肌が露出しており不明で輪積み痕が確認されるのみである。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く、焼成もあまり良くない。3はB層から出土した羽口の破損品で未使用のものである。外径は推定で最大部位で6.8cm、内径は2.9cmをはかる。装着部と思われる先端部は外径が5.5cmと細くなっ

ている。外面は弱いヘラナデ、強いヘラナデ、一部ヘラケズリ調整により整形されている。胎土は砂礫、細砂をあまり含まず緻密だが、焼成が良くない。

この他図示できなかったが埋土中などから鉄滓や鉄塊、焼成された粘土塊などが出土している。

## 2 土坑跡

### (1) HK02 土坑跡 (第174図～第178図)

HH19の東側に位置し本来は重複関係にあったと思われるが、HH19の東半分が流出しており新旧関係は不明である。

平面形は円形を呈し、規模は1.3×1.2m、深さ1.05mをはかる。壁は底面からほぼ直に立ち上がりビーカー状となる。

埋土はA層～C層の3層に大別され、各々にぶい黄褐色土、黒褐色土を基本土としている。更にB層は4層、C層は3層に細分される。

底面は平坦面で地山面である。

遺物は埋土中から若干出土しているが、図示できるものはなかった。

### (2) HK03 土坑跡 (第174図・第180図)

HH19の東側、HK02の北側に位置し本来は重複関係にあったと思われるが、HH19の東半分が流出しており新旧関係は不明である。

平面形は円形を呈し、規模は1.9×1.7m、深さ1.10mをはかる。壁は底面からほぼ直に立ち上がりビーカー状となる。

埋土はA層～D層の3層に大別され、B層中にはB3層を間層としその上下に混貝土層S1層とS2層が含まれる。この混貝土層は本来的には幾つかの小廃棄ブロックに細分できたと考えられるが、調査時点で大きな層として把握してしまい取り上げてしまった。

底面は平坦面で地山面である。

遺物は土器、鉄製品(第188図)のほか混貝土層から大量の動物遺存体が出土している。

土器は第188図で、1はC2層から出土した土師器甕の口縁部から体部中半までの破片で、最大径部を体部中半に有し体部が膨らむ球胴形となるものである。口縁部は短く上方に僅かに外反するが直立気味となる(E2類)。推定口径17.0cmをはかるが器形の歪みが著しい。器面調整は体部外面の摩滅が著しく器面全体の僅かな部分でのみ観察されたものである。口縁部外面は屈曲部から肩部付近までヨコナデ調整で、体部外面は縦ないしは若干斜方向の弱いヘラナデ、内面は横方向の強いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く、焼成もあまり良くない。2はB4層から出土した体部下半から底部にかけての破片で、体部はやや外傾気味に立ち上がり体部が膨らむ球胴形となるものか。底部外面の端部が外側に張り出す。推定底径11.4cmをはかる。器面調整は体部外面が縦ないしは斜方向の弱いヘラナデ、内面は横ないしは斜方向に強いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗いが、焼成は比較的良い。僅かに残っている底面には木葉痕が残されている。

12はB4層から出土した鉄製品である。刀子の破損品で柄と刃部の一部が残存する。刃部は断面三角状を呈し最大厚さが0.6cmとやや肉厚な感じがする。柄部分は断面長方形で最大厚さ0.4cmをはか

る。

この他当土坑跡からはイガイを主体とする大量の動物遺存体が出土している。

同定された動物遺存体は次のとおりである。また、若干の植物遺存体を出土しているが、巻末分析表のとおりである。

	ユキノカサガイ科	タマキビガイ	タロタマキビガイ	カワサキシヨウガイ科	オオヘビガイ	チチミボラ	キセルガイ科	オカチヨウジガイ	バツラマイマイ	コベルトフネガイ		エゾヒバリガイ		ムラサキインコガイ		イガイ		チリハギガイ		キヌマトイガイ		チシマフジツボ		アカフジツボ	
										L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	蓋板	殻板	蓋板	殻板
S 1 層	40	7		1	1	2			1			4	70	88	151	179	681	666			38	1,738			27
S 2 層	83	20	1			1	1	2	1		1		65	66	477	503	541	561	2	4	103	3,861			

第2表 HK03 土坑跡出土動物遺存体一覧表

上記の一覧表に掲載したもの以外に S 1 層からは、種同定不能の魚骨片・鳥骨(尺骨-L) 1・炭化物片、S 2 層からは種同定不能の魚骨片・ウニ類棘・炭化物片が出土している。

一覧表からわかることは、どちらの層も岩礁性の海岸に生息しているものがほとんどで、イガイ・ムラサキインコガイ・チリハギガイ・チシマフジツボ・ユキノカサガイ科の多さが指摘できる。チリハギガイはムラサキインコガイの足糸に付着している微小二枚貝でムラサキインコガイ採集に伴うものと考えられる。また、同じようにチシマフジツボ・ユキノカサガイ科はイガイに付着していた可能性が高い。イガイは破砕されたものよりある程度形の残ったものが多く、個体の大きさもほぼ同じくらいの均一性がみられる。

### (3) HK04 土坑跡 (第174図・第181図～第183図)

HH18の東側に位置し本来は重複関係にあったと思われるが、HH18の東側が流出しており新旧関係は不明である。

平面形は円形を呈し、規模は1.25×1.20m、深さ0.50mをはかる。壁は底面からほぼ直に立ち上がるが東側がやや傾斜を持つが断面形はピーカー状となる。

埋土はA層、B層、貝層、C層の4層に大別され、A、B、C層には動植物遺存体は含まない。

底面は平坦面で地山面である。

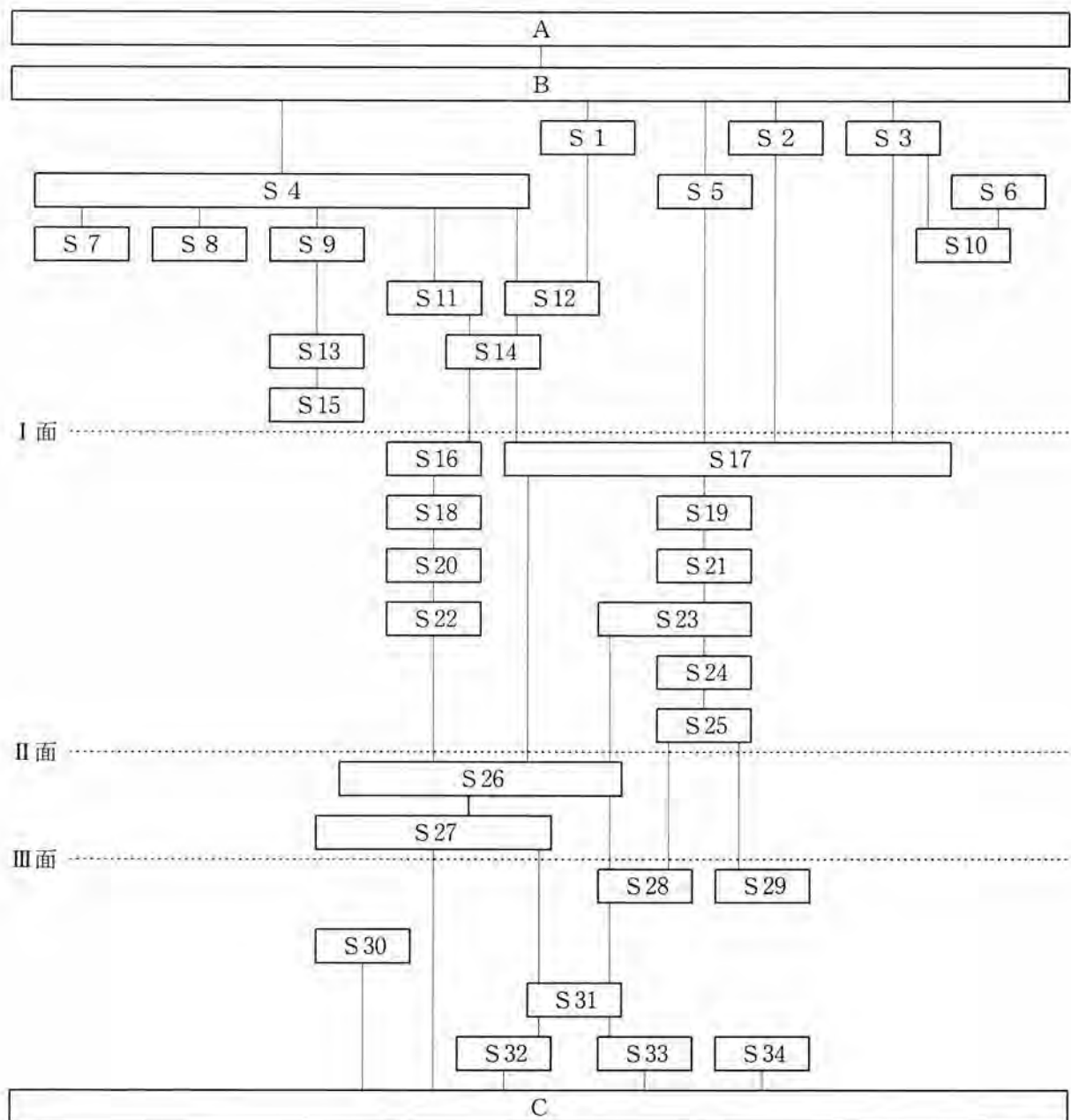
遺物は土器のほか混貝土層から大量の動物遺存体が出土している。

土器は第188図で、3はA層から出土した土師器の小形甕である。一部を欠くがほぼ全体の器形が判明するものである。底部から口縁部にかけてほぼ直立に立ち上がり最大径部は体部下半に有すが底部から口縁部まであまり法量に差がなく円筒形を呈している(G類)。口縁部は短く上方に僅かに外反するが直立気味となる。器形の歪みが著しいが口径12.6cm、器高16.2cm、底径11.1cmをはかる。器面調整は口縁部から体部下端までの外面は縦ないしは斜方向に強いヘラナデ調整が施されている。内面は口縁部から体部下端まで横からやや斜方向の弱いヘラナデ調整が施されている。また、体部下端はやや幅の広い沈線状に整形し底部外面の端部を僅かに張り出させている。底面も全面にわたり弱いヘラナデ調整されている。胎土は砂礫をやや含み緻密さに欠けるが、焼成は比較的良い。4はA層から出

土した土師器甕の口縁部から体部にかけての破片で、体部に最大径を有す長胴形となるものである。口縁部は外反し口縁部上端は丸みを持ちそのまま抜ける(D2類)。推定口径18.6cmをはかる。器面調整は口縁部は屈曲部付近まで内外面ともにヨコナデ調整で、体部外面は縦からやや斜方向の弱いヘラナデ調整が横方向に施されている。胎土は砂礫から小石状のものを多く含み粗いが、焼成は比較的良い。5はA層から出土した底部の破片で、体部はやや外傾気味に立ち上がるものか。全体の器形は不明である。底部外面の端部が外側に張り出す。推定底径12.3cmをはかる。器面調整は不明である。胎土は砂礫を含みやや粗いが、焼成は比較的良い。底面には木葉痕が残されている。

この他図示できなかったが埋土中からは短くて細い棒状の鉄製品の破片が出土している。

貝層は小単位の廃棄ブロック毎に発掘しS34層まで確認した。その層位関係は次のとおりである。S28層は焼土層、S29層は土層で自然遺物は含まない。



第3表 KH04土坑跡層位関係表





貝層からは多量の貝類を中心とした獣魚骨の動物遺存体や植物の炭化した種子類などが出土している。同定された動物遺存体は次のとおりである。

上記一覧表から指摘できることは、前述のHK03とは異なり岩礫性の貝にとどまらず、コタマガイ・イソシジミガイなどの河口部に近い砂泥性や河口部から離れた砂底性の貝や貝以外でもサケ科・マダラなどの魚骨、シカ・イノシシの獣骨などの動物遺存体の他、巻末に同定報告が付されているが、オニグルミ・ウメ・メロン類・オオムギ・イネなどの植物種子までが検出されている。内容的にも非常に豊富なものになっており、なおかつこれらがひとつの土坑跡からまとまって出土している。

まず、S34層まで確認された廃棄ブロックである貝層の層位関係だが、前記の関係図のように上下に全く自然遺物を含まない層(A層、B層、C層)の間にある。貝層の堆積状況を詳細に分析すると3面の不整合面(廃棄に際し時間的な連続性が一時断続する)があると考えられる。即ち、S1～S15(①Gとする)、S16～S25(②G)、S26～S27(③G)、S28～S34(④G)の4つのグループにまとめられるということになる。その内容をみてみると、①Gではイガイ・ムラサキインコガイと、それらに伴うと思われるチリハギガイ・チシマフジツボの増減がほぼ一致し、しかも①G内においてもS2層とS10層と2つのピークがある。また、コタマガイのほとんどが①Gからの出土でそのピークが微妙にイガイ・ムラサキインコガイのピークとずれている。一方魚骨に目を向けるとS15層のサケ科の出土があり、このS15層前後の層にマダラの出土がみられる。②Gはほとんどイガイ・ムラサキインコガイの層といっても良いほど多量に出土しているが、ほぼ中間のS20層で一時期激減しそれ以前はイガイでいえば30～40前後の採集量なのに対し、それ以降はS24層、S25層のように100個体をこえるまで激増しそれにあわせるかのようにチシマフジツボ・チリハギガイも爆発的に増加している。また、エゾアワビ・アサリのピークもS23～S25層に集中している。更にこの頃からコタマガイに変わりイソシジミガイの採集が始まる。③Gになると全体的に出土量が減少する。④GになるとS30層あたりからまた急激に出土量が増加するが、S31層のイソシジミガイとオオバフンウニ科の突出が注目される。

全体的には各グループとも基本的にはイガイ・ムラサキインコガイを主体としているが、①グループのコタマガイから④グループのS31層にピークを向かえるイソシジミガイへの変化がみられる。また、魚骨ではマダラの出土が他種に比較して多い。獣骨はシカとイノシシが断片的に出土しているだけである。エゾアワビ・カキ類・オオバフンウニ科など潜水しなければ採取できないようなものや深海魚といわれているマダラを捕獲しているなど当時の漁撈技術を考えさせられる結果となっている。また、これらS34層まで確認された貝層の季節性や時間の経過などについても十分に考えさせられるデータであり、それらについては最後のまとめの動物遺存体の項で考えてみたい。

また、同時に多量の植物種子が出土しており、特にイネの存在は注目に値する。なお、巻末分析結果に出土層位・種名等を記している。

#### (4) HK05 土坑跡 (第174図・第178図)

HH19の北側に位置する。

平面形は円形を呈し、規模は1.20×1.10m、深さ0.15mをはかる。壁は底面からほぼ直に立ち上がるが、東壁側はほとんど削平されている。

埋土はA層、B層の2層に大別される。それぞれ黄褐色土、暗褐色土を基本土としている。

底面はほぼ平坦面の地山面である。



遺物は出土していない。

#### (5) H K 0 6 土坑跡 (第174図・第178図)

HH19の北側に位置し、HH19よりも古い時期のものである。

平面形は円形を呈し、規模は1.10×1.00m、深さ0.08mをはかる。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

埋土はC層からなり更に4層に細分されている。

底面はほぼ平坦面の地山面である。

遺物は埋土中から若干出土している。第188図で、6は土師器甕の体部下半から底部にかけての破片でC3層から出土したものである。体部は外傾気味に立ち上がるが全体の器形は不明である。底面端部が外側にやや大きく張り出す。器面調整は体部外面には強いヘラナデ、内面には刷毛目調整が施されている。推定底径13.0cmをはかる。胎土は砂礫から小石状のものを大量に含み粗く、焼成は比較的良い。

9は埋土から出土した砥石である。表裏の両面に機能面がありどちらも滑らかである。裏面には敲打による凹みが確認される。

この他図示できなかつたが、埋土中からは土師器甕の口縁部片、体部片や数点の鉄滓が出土している。土師器甕の口縁部片は口縁部が短く外反する長胴形となるものである。内外面に強いヘラナデ調整が施されている。

#### (6) H K 0 7 土坑跡 (第174図・第184図～第186図)

HH20と重複しているが、これよりも新しい時期のものである。

平面形は円形を呈し、規模は1.40×1.40m、深さ0.85mをはかる。壁は底面からほぼ直に立ち上がるが、東壁側は幾分傾斜する。

埋土はA層、貝層、B層、C層に大別される。貝層はB層をはさんで上下2層となる。貝層の層位関係は第186図に示しておりS10層までとなった。

底面はほぼ平坦面の地山面である。

遺物は土器のほか混貝土層から大量の動物遺存体が出土している。

土器は第188図で、7は土師器甕の底部片でA3層から出土したものである。底面には木葉痕が残されている。

10、11は砥石である。10は埋土から出土したもので機能面は表面と一方の側面部の2面ありどちらも非常に滑らかでやや凹み加減で擦痕が観察される。11はB層から出土したものでやはり10同様機能面を2面持つ。機能面はやはり非常に滑らかでやや凹み加減で擦痕が観察される。

8はC層から出土した碗形滓である。底面には砂礫粒が多量に付着している。また、金属分が残っており磁力を有する。

この他図示できなかつたが、埋土中からは土師器甕の口縁部片、体部片や数点の鉄滓が出土している。土師器甕の口縁部片は小形甕で口縁部が短く外反するものである。

同定された動物遺存体は次のとおりである。

	ヒザラガイ科	ユキノカサガイ科	タマキビガイ	アツタマキビガイ	カワザンシヨウガイ科	オオウヨウラクガイ	チヂミボラ	クサヅリクチケレガイ	キセルガイ科	ホソオカチヨウジガイ	マルオカチヨウジガイ	オカチヨウジガイ	パツラマイマイ	ベッコウマイマイ	コペルトフネガイ	エゾヒバネガイ	ムラサキインコガイ	イガイ	チリハギガイ	チシマフジツボ	アカフジツボ	オオバフンウニ科	炭化物	土器	魚骨片	土層	体	重	
																											積	量	
																								(cc)	(g)				
S 1	○																									耳石(マコガレイ)	2,220	2,025	
S 2	○	○																										5,300	4,525
S 3																												4,300	3,920
S 4							○																					4,880	4,300
S 5							○																					2,300	2,045
S 6	○						○		○																			12,280	10,665
B																										土層			
S 7		○	○	○			○		○	○																		5,800	4,910
S 8		○																										3,500	3,060
S 9		○					○					○	○															15,320	13,640
S 10		○					○																					14,500	12,815

第5表 KH07土坑跡出土動物遺存体一覧表

上記一覧表には出土個体数全体を集計、同定する時間的な余裕がなかったため単に出土の有無だけとなってしまった。また、S2層、S8層だけチリハギガイが抜け落ちているが、陸産の巻貝類も出土していないことも含めて考えるとまだ未集計、未同定のなかに入っている可能性があることを付け加えておく。また、オオムギ・イネ等の植物遺存体が出土しているが、巻末分析結果にその一覧表を付している。

貝層はS10層までであるが、S6層とS7層の間には土層だけのB層が入っており上下の2グループにわけられる。S2層、S10層には灰や焼土の塊が混入している。調査時の観察も含めその内容を見てみるとHK03、HK04同様主体となるのはイガイ・ムラサキインコガイで各層から出土している。イガイは破碎されず比較的形が残っているものがS2、S4、S7、S9、S10層でみられそれ以外の層では破碎されたものが多い。また、各層共通だがほとんどが大きい個体で小さいものは極く僅かである。数量的にはS9、S10層が特に多くS6層が土量の割には少ない。ムラサキインコガイも各層から出土しているが、特にS10層が多い。また、S6層までは比較的小さな個体が多いが、S7層あたりから大きな個体も混じるようになりS10層ではほとんど大きな個体となる。そのほかチシマフジツボ・チリハギガイはそれぞれイガイ・ムラサキインコガイに伴い出土しており数の増減もほぼ一致している。アカフジツボはS2、S4層で完形のもので出土しているが数量的には数個と少ない。チヂミボラやタマキビガイの巻貝はほとんど小さな個体で大きいものは数える程度である。オオバフンウニ科は棘のみで少量である。その他ではS2層からマコガレイの耳石、S10層からは同定できない魚骨片が出土している。また、S2、S9、S10層からは大量の陸産巻貝(パツラマイマイやオカチヨウジガイなど)が出土しており、長期間土中にあったことを示している。

#### (7) HK08土坑跡(第187図～第190図)

HH20と重複するがそれよりも新しい時期のものである。

平面形はだ円形を呈し、規模は2.30×1.70m、深さ1.00mをはかる。壁は底面からほぼ直に立ち上がるが、西壁側はやや傾斜する。

埋土はA層、B層、C層の3層に大別される。それぞれ褐色土、暗褐色土、黒褐色土を基本土とし、更にB層は2層、C層は6層に細分される。

底面はほぼ平坦面の地山面である。

遺物は出土していない。

#### (8) HK09 土坑跡 (第190図～第191図)

HH20と重複するがそれよりも新しい時期のものである。調査時点では見落としていたもので、土層断面の観察により確認されたものである。

平面形はだ円形を呈し、規模は残存部で1.00×0.90m、深さ0.01mをはかるが、前記理由により掘りすぎてしまったあとの計測値である。実際の深さは0.60m以上である。壁は底面からほぼ直に立ち上がる。

埋土は最下層のR層しか確認できなかった。暗褐色土を基本土とする。

底面はほぼ平坦面の地山面である。

遺物は出土していない。

#### (9) HK11 土坑跡 (第190図～第191図)

HH20のカマド跡をかすめて切るように重複しており新しい時期のものである。

平面形は円形を呈し、規模は1.30×1.15m、深さ0.60mをはかる。壁は底面からほぼ直に立ち上がる。

埋土はT層とU層に大別されT層は更に5層に細分される。T層は暗褐色から黒褐色土を基本土とするが、T2層には多量の炭化物、焼土、礫を混入しT4層にも多量の比較的大きな礫を多量に含む。U層は地山に近い黄褐色土を基本土としている。

底面はほぼ平坦面の地山面である。

遺物は出土していない。

#### (10) HK12 土坑跡 (第190図・第195図～第196図)

HH20の東側に位置する。

平面形は円形を呈し、規模は1.65×1.60m、深さ0.75mをはかる。壁は底面から直に近いがやや外側に傾斜する。

埋土はK層とL層とM層に大別され、K層は更に3層に細分される。K層は黒褐色から暗褐色土、L層は褐色土、M層は褐色土を基本土としている。

底面は平坦面の地山面であるがやや南東側に若干傾斜する。

遺物は出土していない。

#### (11) HK13 土坑跡 (第190図・第195図～第196図)

HH22の東側に位置し重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は長だ円形を呈し、規模は1.70×1.10m、深さ0.90mをはかる。壁は底面から直に近いがやや外側に傾斜加減である。

埋土は礫を含むN層とO層とP層に大別されN層は更に3層に細分される。N1層には焼土塊や炭化物を含む。P層は2層に細分されいずれも焼土や炭化物を含む。

底面は平坦面の地山面である。

遺物は出土していない。

(12) HK 1 4 土坑跡 (第195図～第196図)

HH 2 2の東側、HK 1 3の北東に位置しHH 1 2と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は方形状を呈し、規模は1.70×1.40m、深さ0.80mをはかる。壁は底面から直に立ち上がる。

埋土はQ層とR層とS層に大別されR層は更に2層、S層も2層に細分される。R 2層には焼土塊を含む。

底面は中央部がやや高くなり地山面である。

遺物は出土していない。

(13) HK 1 5 土坑跡 (第195図～第196図)

HH 2 3の東側に位置しHH 2 3と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は方円形状を呈し、規模は1.40×1.20m、深さ1.00mをはかる。壁は底面から直に立ち上がる。

埋土はT層からなり暗褐色から黒褐色土を基本土とし、更に6層に細分される。T 6層は混入土の割合が高く掘り上げた土をそのまま投棄したようである。

底面はほぼ平坦面の地山面である。

遺物は出土していない。

(14) HK 1 8 土坑跡 (第205図～第206図)

HH 2 6内の西壁側に位置しHH 2 6と重複するが、これを切るものである。また、HH 2 7の埋土であるB 1層も切っておりやはりこれよりも新しい。

平面形は円形を呈し、規模は1.20×1.10m、深さ0.75mをはかる。壁は底面から0.15m付近までは外傾気味になりそれ以後はやや内傾気味に立ち上がる。

埋土はA層からなり暗褐色土を基本土とし、更に4層に細分される。

底面はほぼ平坦面の地山面である。

遺物は出土していない。

### 3 東地区遺構外出土遺物 (第209図～第210図)

東地区の洞地区の標高32mの窪地(調査当初は竪穴住居跡と想定していたが)からまとまって出土したものである(第173図参照)。

1～20は須恵器で1～8は坏、9～20は甕ないしは壺と思われるものである。

1は口縁部片で口縁部が直線的なものである(A類)。推定口径12.4cmをはかるもので残存部には再調整はみられない。胎土は砂礫や細砂を多量に含みやや粗く、くすべ色を呈する。焼成は比較的良好である。色調は内外面とも灰色からくすべ色である。2も口縁部片で口縁部が直線的である(A類)。推定口径12.4cmをはかる。胎土は砂礫や細砂をやや含むものの比較的緻密でくすべ色を呈する。焼成

は良好である。色調は内外面とも灰色からくすべ色である。3は口縁部片で口縁部が僅かに外反する(C1類)。推定口径18.4cmをはかる。胎土は砂礫や細砂をやや含むものの比較的緻密でくすべ色を呈する。焼成は良好である。色調は内外面ともくすんだ赤褐色である。4は口縁部から体部の破片で体部は内湾気味となり口縁部は外反する(C1類)。推定口径13.2cmをはかる。胎土は砂礫や細砂をやや含むものの比較的緻密でくすべ色を呈する。焼成は良好である。色調は内外面ともくすんだ赤褐色である。5は口縁部の破片で口縁部は外反する(C2類)。推定口径14.9cmをはかる。胎土は砂礫や細砂をやや含むものの比較的緻密でくすべ色を呈する。焼成は良好である。色調は内外面ともくすんだ赤褐色である。6は体部から底部にかけての破片で体部は内湾気味に立ち上がる。底部の切り離しは糸切りで再調整はない(B⑥類?)。推定底径7.4cmをはかる。胎土は砂礫や細砂をやや含むものの比較的緻密でくすべ色を呈する。焼成は良好である。色調は内外面ともくすんだ赤褐色である。7は体部下端から底部にかけての破片で器形は不明である。底部の切り離しは回転糸切りで再調整はない。推定底径7.0cmをはかる。胎土は砂礫や細砂を多く含みやや粗い。焼成もあまり良くない。色調は内外面ともくすんだ褐色である。8は底部片で底部の切り離しは糸切りで再調整はない。推定底径8.4cmをはかる。胎土は砂礫や細砂をやや含むものの比較的緻密でくすべ色を呈する。焼成は良好である。色調は内外面ともくすんだ赤褐色である。9~19は甕ないしは壺と思われる体部の破片である。9、10は外面に格子目状の叩目の痕跡を残し内面は弱いヘラナデ調整が施されている。11は外面に平行文の叩目の痕跡を残し内面は平行文のあて工具の痕跡の上に強いヘラナデ調整が施されている。12~19は外面に平行文の叩目、内面に青海波文のあて工具の痕跡を残すものである。9~19は総じて胎土は砂礫粒を含みやや粗く、くすべ色を呈す。焼成は比較的良好で色調は内外面とも灰色からくすべ色である。20は体部下端から底部にかけての破片で体部外面の下端に強いヘラナデの再調整が施されている。内面は強いヘラナデ調整が施されている。推定底径12.9cmをはかる。胎土は砂礫や細砂を若干含むものの緻密でくすべ色を呈する。焼成は良好で色調は内外面ともくすべ色である。

21~34は土師器で21~28は坏、29~34は甕である。21は口縁部から体部下半の破片で内面黒色処理を施している。体部は内湾気味になり口縁部はそのまま抜け、推定口径14.8cmをはかる。体部下端にはヘラケズリの再調整がなされ(B①類)、内面は口縁部から体部は横方向、体部下端は放射状のヘラミガキ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を若干含むものの比較的緻密で焼成も比較的良好である。22は内面の黒色処理がほとんどとんでしまっているものである。底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部は薄くなりそのまま抜ける(A2類)。推定口径14.9cm、器高4.4cm、推定底径7.2cmをはかる。底部の切り離しは糸切りだがほぼ全面が磨滅しておりその痕跡が不明となっている。内面は横ないしは斜方向に丁寧にヘラミガキ調整されている。胎土は砂礫や細砂を若干含むものの比較的緻密で、焼成も比較的良好である。23は体部中半から底部にかけての破片で内面黒色処理を施している。体部は内湾気味に立ち上がり、推定底径5.8cmをはかる。底部の切り離しは糸切りで外縁部の磨滅が著しい。また底面のほぼ中央部には墨書の痕跡がみられるが、肉眼では文字は読み取れない。外面の体部下端にはヘラケズリの再調整が認められ、内面は体部は横方向に底面は放射状にヘラミガキ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗く、焼成もあまり良くない。24、25は底部片で内面黒色処理が施されている。24は僅かに残る体部下端にヘラケズリの再調整が認められ、内面は横方向にヘラミガキ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗く、焼成もあまり良くない。推定底径6.5cmをはかる。25も僅かに残る体部下端にヘラケズリの再調整が認められ、内面は放射状にヘラミ

ガキ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗く、焼成もあまり良くない。推定底径5.5cmをはかる。26は内面の黒色処理がほとんどとんでしまっているものである。僅かに残る体部下端に回転ヘラケズリの再調整が認められ、内面は横方向にヘラミガキ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂をほとんど含まず緻密で、焼成も良好である。推定底径6.8cmをはかる。27、28は体部片で墨書の痕跡が認められるものであるが、文字は判読できない。29は小形の甕の体部下端から底部にかけての破片で器形は不明である。底面端部の外側の張り出しはなく、底径は7.0cmをはかりやや上げ底である。器面調整は外面は縦方向の弱いヘラナデ、内面は横方向の弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗く、焼成もあまり良くない。30は体部下半から底部の破片で体部は直立気味となる長胴形を呈するものと推定される。底面端部は外側へ小さく張り出し、推定底径は7.4cmをはかる。器面調整は外面は縦ないしは横方向の強いヘラナデ、内面は横方向を主とした強いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗く、焼成もあまり良くない。31は体部下端から底部の破片で器形は不明である。底面端部は外側へ僅かに張り出し、推定底径は7.4cmをはかる。器面調整は外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向の強いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗く、焼成もあまり良くない。底面には木葉痕が残されている。32は底部片で底面端部の外側への張り出しはなく、推定底径は11.6cmをはかる。器面調整は内外面とも弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗く、焼成もあまり良くない。33も底部片で底面端部が外側へ小さく張り出し、推定底径は10.5cmをはかる。器面調整は内外面とも弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗く、焼成もあまり良くない。34も底部片で底面端部が外側へ張り出し、推定底径は8.5cmをはかる。器面調整は外面は強いヘラナデ、内面は弱いヘラナデ調整が施されている。胎土は砂礫や細砂を含みやや粗く、焼成もあまり良くない。底面には木葉痕が残されている。

35、36は鉄製品である。35はやや厚手の板状のもので器種、用途とも不明である。36は板状の鉄板を筒状にまるめたもので、やはり器種、用途とも不明である。

# 第V章 ま と め

## 第1節 中 世

### 1 建物跡

本遺跡では、重複建物を含め11棟の建物跡が検出されている。各地区の棟数、重複状況は次のとおりである。

Y1地区 単期建物跡1棟(MB01)、重複建物跡2棟(MB02-A、MB02-B)

Y2地区 単期建物跡1棟(MB04)、重複建物跡3棟(MB03-A、MB03-B、MB03-C)

Y3地区 単期建物跡3棟(MB05、MB06、MB07)

F地区 単期建物跡1棟(MB08)

建物跡の重複は最大3期で、Y1地区、Y2地区で見られるように重複建物跡には単期の建物跡が隣接している。これらの建物跡を分類すると次の類型になる。

I 総柱の建物跡(MB07)

II 桁行13尺～17尺、梁行11尺～16尺で5～7坪の建物跡(MB01、MB03-A、MB03-B、MB03-C、MB06)

III 桁行27尺～31尺、梁行12尺～21尺で10～16坪の建物跡(MB02-A、MB02-B、MB04、MB05、MB08)

各地区におけるこれらのタイプのありかたは次のようになる。

Y1地区 II+III

Y2地区 II+III

Y3地区 I+II+III

Y1地区、Y2地区では規模の異なる建物跡の組み合わせが見られ、Y3地区ではこの組み合わせに総柱の建物跡が加わっている。

建物跡の軸線方向は、各地区相互には類似性をもたず、それぞれの地区内の建物跡相互には共通性がある。側柱の方向を北を基準に示すと次のようになる。

Y1地区 MB01=N-34°-W、MB02-A=N-35°-W、MB02-B=N-30°-W

Y2地区 MB03-A=N-1°-W、MB03-B=N-5°-W、MB03-C=N-3°-W、  
MB04=N-4°-W

Y3地区 MB05=N-30°-E、MB06=N-34°-E、MB07=N-34°-E

各地区内の建物方向の差異は4°～5°で、それぞれの地区内の建物跡は、建て替えを含めほぼ同方向の柱筋をもっている。これは平場の形状によって、建物跡の配置や方向が制約された結果とみられる。

柱間については、総柱のMB07建物跡を除き、柱間が6尺以上になる部分が多い。MB07建物跡では柱間の平均値は5.7尺となっている。

これらの建物跡については、地形的な条件からみれば、物見としての機能をもっていたことは否定できない。しかし縄張りからみると、建物跡は空堀と切岸によって守られており、これを単なる物見郭とすることについては検討の余地があると考えられる。

## 2 空堀跡

空堀跡はY1地区の北西からY2地区を経て土橋に至り、ここからY3地区の北側を回り北西斜面に抜けている。その総延長は340mほどになり、空堀跡の形状にも変化が見られる。空堀跡の幅および深さの最大値は、それぞれの5.6m、1.6mで、本遺跡ではこれ以上の規模をもつ空堀跡は検出されていない。Y1地区の西側で堀幅が最大となるが、4m～5mの幅が基本的な堀幅とみられる。また堀の深さは1.4m前後が平均的で、周囲の地形条件などによって変化が見られる。Y2地区の南では堀幅が狭くなり2m以下となる。これは斜面部分という地形条件によるもので、ここから土橋に至る間は基本的な堀幅を保っている。断面形状は基本的に薬研状であるが、Y1地区の周辺では底面を掘り下げ、箱薬研状になる部分も見られる。

空堀跡は土橋から北で徐々に浅くなり、Y3地区の北では一部途切れている。北西の末端部では再び空堀の形状に復している。Y3地区周辺で空堀跡は形骸化しており、その機能を果たしていない。北東に急峻な斜面を控えていることもあるが、縄張り構成上は不自然な在り方である。

空堀跡の埋土中には、炉跡および焼土が検出されている。これらは空堀がほぼ埋まり、窪みの状態となる埋没終盤段階で残された遺構である。また、これとほぼ同じ段階の埋土中からは、北宋銭を主体とした銭貨が20枚一括出土している。このように、空堀の埋没過程においても人為的な関与の形跡が見られ、これは空堀廃絶後の状況の一端を表している。

## 3 切岸

切岸は空堀外周の斜面に構築され、縄張りの外縁を構成している。K2地区、K3地区の切岸は、完成されたものではなく、造成過程の状態を示す切岸である。何らかの理由で造成が中断し、未完成のまま埋没している。周囲の地形や縄張りの構成上、これが完成しない状態で許される条件はなく、切岸の造成を続行できなくなった何らかの状況があったとみられる。

これらの遺構からは、切岸造成の作業行程を見ることができる。始めに切岸の上縁を定め、数段階に分けて徐々に掘り下げていったものとみられる。

K6地区、K7地区で検出された切岸は、平面的に連続しており完成された状況を示している。ここでは、切岸の立ち上がりの角度を一定にしている部分があり、規格化された状態が見られる。

切岸はK11地区、K12地区にも検出されており、K7地区から空堀に沿って北に続き、遺跡の外周を成していたものとみられる。

## 4 陶磁器

中世に属する出土遺物の中から、おもな陶磁器を次の図に示す。F地区からは、12世紀代の渥美、12世紀末～13世紀初頭の常滑が見られ、これらの中でも最も古い段階の遺物である。

13世紀代では龍泉窯系の青磁とみられる双魚文鉢の見込部分破片があり、これは13世紀前半とされるものである。また斜格子紋の押印をもつ常滑は13世紀後半に位置付けられる。これらは中央地区、Y3地区から出土している。

14世紀代では龍泉窯系青磁の鎬蓮弁文小碗と、14世紀中頃とされる梅唐草文の瀬戸鉄釉陶器が見られる。青磁は空堀跡埋土上部から、瀬戸鉄釉は中央地区からそれぞれ出土している。

15世紀代では、その前半に位置付けられる常滑の甕縁帯部破片および、14世紀末から15世紀初頭と



される瀬戸灰釉三足盤がある。常滑は中央地区、Y3地区から出土しており、瀬戸灰釉三足盤の口縁部は中央地区の井戸跡埋土から出土したものである。これに後続する15世紀後半から16世紀後半に至る陶磁器は見られなくなり、16世紀では、その末葉に位置付けられる瀬戸灰釉折縁皿が見られるのみである。

## 5 銭貨

本遺跡からは唐、北宋、南宋、明代の銭銘をもつ銭貨が42枚出土している。これらのうち北宋代の銭銘をもつものは34枚で全体の81%を占める。以下唐代4枚(9.6%)、南宋代2枚(4.7%)、明代2枚(4.7%)となっている。銭種では「皇宋通寶」が最も多く7枚、以下「開元通寶」4枚、「元祐通寶」3枚、「紹聖元寶」3枚、「政和通寶」2枚、「嘉定通寶」2枚、「永樂通寶」2枚、その他は各種1枚ずつの出土である。

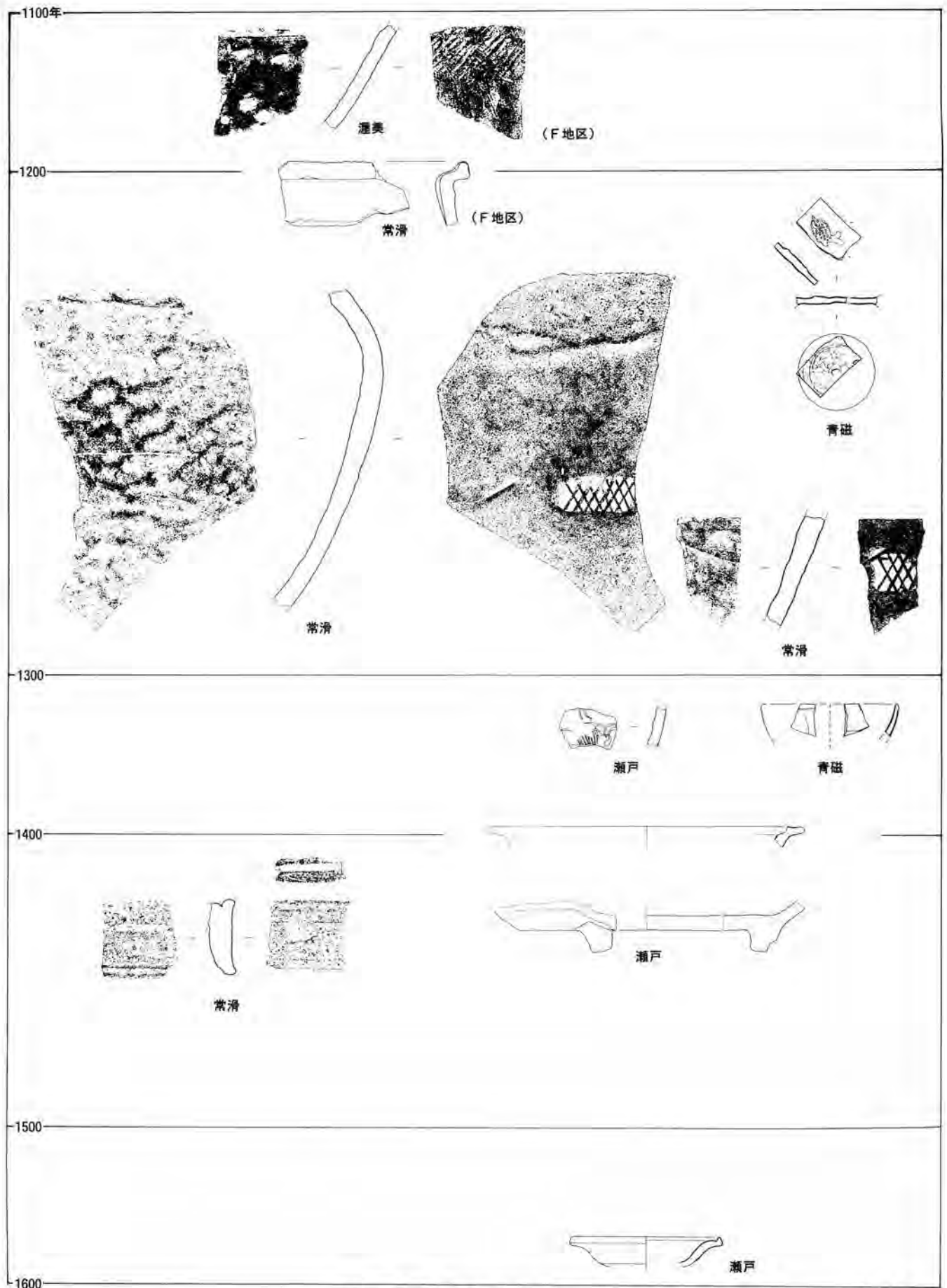
## 6 遺構の年代

### ・F地区

中世に属する遺物の中でも、最も古い段階の年代を示す渥美、常滑が遺構面から出土している。この地区では、これに後続する年代をもつ中世の遺物は見られない。したがってこの地区の遺構は13世紀代ないしこれに近接する時期の所産と考えられる。

### ・城館主体部

出土遺物は13世紀前半から15世紀前半の年代を示しており、これ以降16世紀末に至るまで見られなくなる。遺物年代からは、15世紀前半の生産年代をもつ常滑が、搬入使用された時点を遺跡の終末段階とみることができる。遺構の存続期間は、Y2地区の建物跡で3棟の重複が見られることから、当初の建物跡が2回の建て替えを必要とする時間幅をひとつの目安とすることができる。これらの点から、城館主体部の遺構の年代は15世紀代ないしこれを中心とする時期と考えられる。



第10图 中世陶磁器集成图

S=1.4

# 第1節 古 代

## 1 遺 構

西地区、東地区で検出した遺構は、西地区で17棟、東地区で10棟の合計で27棟の竪穴住居跡、西地区で1基、東地区で16基(うち竪穴住居跡に伴うもの2基)の合計17基の土坑跡の遺構と土師器・須恵器などの土器類、鉄製品などの遺物の他、動植物の遺存体が多数出土した。すべて平安時代のものである。以下、ここで若干の考察を混じえながらまとめとする。なお、土器類の編年観については遺物の項で扱うので、ここではその結果を用い各遺構の時代・時期とする。

### (1) 竪穴住居跡について

今回調査した27棟の竪穴住居跡はすべて平安時代に所属するものである。中にはカマド跡が確認されなかったものもあるが竪穴住居跡として扱う。

まず、竪穴住居跡の立地には屋根上と洞(谷)と急斜面部とあるが、急斜面部に立地するのは西地区のHH09～HH14の5棟だけである。平面形は方形、隅丸方形、長方形、円形を呈するものがあるが、概ね方形ないしは長方形を基調としたものが多い。カマド跡の方向はかなりばらつきがみられ、それぞれの竪穴住居跡が立地する地形や風向きなどを考慮しているものと考えられ、奈良時代のような統一性はない。カマドの構築方法は概して角礫や亜角礫を芯材として構築されているものが多い。また、具体的な柱配置などがわかるものはHH04、HH05、HH07、HH16などが4隅に支柱穴を配す4本柱構成をとる以外は明確にわかるものは少なく、現在までの市内の同時代の遺跡の事例とほぼ一致し、宮古地方の平安時代の竪穴住居跡の在り方と一致するというか典型を示している。

次にこれら27棟の竪穴住居跡を出土した土器群から判明したものの所属時期を示したのが第11図である。まず一見して西地区では9世紀代でまとまり、一方、東地区は10世紀から11世紀代にまとまっている。時期を追って個々にみていくと、一番古い9世紀前半(I群)はHH04、HH07、HH13、HH14、HH16の5棟でこの内HH13とHH14が重複しているが、HH14の方が新しい。また、HH04とHH07で出土している砥石が接合しており、ほぼ同時存在の可能性が高い。9世紀後半(II群)はHH01、HH02、HH03、HH05、HH09、HH10、HH11、HH12の8棟になり、竪穴住居跡が急斜面部に立地するようになる。その傾向は前記のHH13とHH14から始まっており9世紀後半には定着しそして消滅している。この短期間だけに急斜面部に竪穴住居跡が立地している。10世紀前半(III群)になると東地区へ移りHH18、HH19、HH20、HH27の4棟となる。HH18とHH19は近接しておりあるいは重複関係にあったとも考えられる。また、土坑跡のHK04も当該期でHH20と土師器甕が接合しており同時存在と考えられる。10世紀後半(IV群)はHH21もしくはHH22が該当するが、重複関係が明確に把握できなかったものである。11世紀(V群)になるとHH08、HH23、HH25、HH26の4棟のほかHK03の土坑跡が該当し、ここで初めて西と東に分散している。

以上の変遷をみてみると10世紀後半に一時消滅？しかけるがほぼ9世紀前半から11世紀代まで継続して集落が維持されている。各時期の竪穴住居跡の数は9世紀代は前半の5棟のうち2棟は重複しHH16が離れているのが気になるが、実質は4棟で集落を構成していたと考えられる。そうすると後

半は8棟同時存在は位置関係などからみて無理があり、後半の8棟は2分され4棟ずつとなり、9世紀代は4棟で集落が維持されていたことになる。10世紀になるとHH18とHH19は近接しておりあるいは重複関係にあったとも考えられることから、実質3棟の集落となる。11世紀になると4棟となることから、結局は9世紀前半から11世紀まで3～4棟を一単位とした集落の継続があったと考えられる。また、竪穴住居跡の構造からみるとHH04、HH07、HH16の9世紀前半までは柱穴配置も明確でカマド跡も存在し比較的大型のものが多く、それが9世紀後半になるとHH07までは柱穴配置も明確で形状も整っているが、それが規模的にも構造的にもばらつきがみられるようになり、10世紀前半にはかなりのばらつきが顕著となってくる。これは、前記したように平安時代も後半になってくると、このような傾向が市内の他の遺跡でもみられる現象で奈良時代から続いてきた一種の統一性が崩壊していく過程を示しているものと考えられる。その背景には様々な要因が考えられると思われるが、生業活動の活発化や向上もその一因と思われる。

次に、9世紀の西集落と10世紀の東集落と完全に2分されている点があり同一集団の継続性だったのかという若干の疑問が提示できる。それは、西集落では出土遺物をみても鉄関連の遺物、例えば炉壁、鉄塊、鉄滓、羽口などが大量に出土しているが、東集落ではほとんど出土していない。鉄滓にしてもHH20の10点が最大で他は皆無もしくは数点である。羽口も同様で全体でも数点である。ただし、鉄製品自体は出土している。東集落の特徴としては、屋内外に土坑が伴うことや動植物の遺存体が出土していることなどが上げられる。この西と東の集落の性格の違いは俄には断定できない。例えば、仮に同一集団であったとすれば鉄関連の一種の職人的集団？であったが、10世紀になると半農半漁の生活集団？に突如として変化していることになる。あるいは西のHH11のカマド焼土から極く僅かであるが、イガイの破片が出土していることを考慮に入れると9世紀後半のいつかの時点で職人的集団での職人的部分を切り離し10世紀の東集落へ移行したということも考えられる。それが、逆に同一集団でなかったとするならばほぼ同時期に西の職人的集団？は何等かの原因、例えば、鉄関連の原料(砂鉄？や材木など)の枯渇などの理由で移住し、そこに東地区に半農半漁の生活集団？が移住してきたか、あるいは西地区の職人的集団？が分裂して職人的な部分だけが移住していったという可能性などが考えられる。確かに中近世以降では鉄製品生産の職人集団の移動ということが知られているが、それが平安時代までさかのぼれるかが問題となる。

以上、今回の調査で検出した竪穴住居跡の様相について私見を混じえ記述したが、これは、あくまでも今回の調査範囲内で偶発的に発生した事例なのかを考えてみたい。まず、当遺跡の範囲は更に南にまでひろがっており、西地区の南側の尾根上で実施された第2次調査地点からは9世紀前半の竪穴住居跡1棟を検出しており、それには西地区のような鉄関連の遺物は出土していない。また、当遺跡のさらに西側の尾根に立地する島田遺跡では10世紀から12世紀の集落跡が調査されており、やはりあまり鉄関連の遺物は出土しておらず、逆に東地区のような様相を呈して土坑跡からはマダラなどの動物遺存体が出土している。このことから考えるならば、今回の9世紀の西集落と10世紀の東集落への劇的な変遷？はひとつの遺跡の中、周辺部の遺跡群の中ということでみていくなれば、ひとつの象徴的な出来事であり、その中の一側面として西地区の職人的集団？、東地区の半農半漁生活集団？が強調された形で結果として表出したものと捉えていくべきものと思われ、そこからどんなこと、例えば平安時代の集落の立地、性格などが読みとれるのかということが肝要であると思う。

では、市内の調査された平安時代の遺跡を概観してみると、尾根上や洞(谷)に立地するもの一青猿

I、鯉沢、鉾ヶ崎館山、島田、長沢向(未報告)などーがあり、沖積平野に近い平坦部に立地するものー上村、赤前、近内中村(現在調査中)などーがあり、更に細越Iは河岸断丘に立地する。このような立地環境は、奈良時代の遺跡でもみられることであり特別な現象ではない。例えば、尾根上や洞(谷)ー狐崎、鯉沢などー、平坦部ー弘川I、上村などーである。そして、これらの集落では鉄関連の遺物を豊富に出土する遺跡とそうでない遺跡が混在している。例えば、青猿Iでは製鉄炉、細越Iでは鍛冶炉を伴う集落であり、上村や鉾ヶ崎館山ではほとんど鉄関連の遺物は出土しない。一方、急斜面部に立地する遺跡としては、当遺跡以外では鯉沢、近内館跡(未報告)、神田沢(未報告)の3例だけである。時期的には鯉沢で9世紀半ば以降から出現しており下限は近内館跡、神田沢の遺物整理が終了していないので断定しかねるが、出現期は9世紀半ば以降で集落の性格としても鉄関連の遺物が多く職人的集団?集落の様相が強い。現段階では人が立ってられない程の急斜面部に集落を形成したのは極めて鉄関連の職人的集団?によって形成されたものと考えられる。

長々と今回調査された竪穴住居跡から主に平安時代の集落についての駄文を記述してきたが、市内の遺跡だけをみても鉄関連に関しては所謂生産する集団と消費する集団が別個に存在している可能性が高いと考えられる。今後は鉄関連に限らず、ある集団がどのような集落を形成し、どのようにかわりあい、それが当時の社会情勢にどう反映しているのか市内にとどまらず、宮古地方そして岩手県沿岸部の在り方を通じ検討していくことが、今回の調査結果から得られたひとつの課題といえよう。

## (2) 土坑跡について

竪穴住居跡に伴うもの2基とそれ以外のもの15基の計17基検出したが、形態的には径1.5m~2.0m内外の円形状を呈するものが大半である。時期的にも竪穴住居跡と同じく平安時代の9世紀後半から11世紀代に所属するものである。HK16、HK17はそれぞれの竪穴住居跡の時期から10世紀前半、11世紀代と明確で、これら以外では出土土器群の様相からHK04は10~11世紀、HK03は11世紀代に所属し、その他は出土遺物が少量で明確ではない。17基のうち西地区では1基しか検出していない。ここでは他遺跡の類例も考えあわせてまとめてみたい。

まず、大きく分類して竪穴住居跡に伴うものとそうでないものがある。竪穴住居跡に伴うのはHK16、HK17である。また、それ以外としたもののなかにも竪穴住居跡の範囲内にあるが、竪穴住居跡の壁が流出してしまい新旧関係不明なもの(HK02、HK13、HK14、HK15など)があり、これらのうち何基かは竪穴住居跡に伴う可能性も考えられる。また、本文中にも記したが、HH20竪穴住居跡床面出土の土師器甕とHK04出土の破片が接合されほぼ同時期であることから、これらはセットとして機能していた可能性が高く、さらに論を進めるとHH20竪穴住居跡に生活した人々がHK04土坑跡の貝層を形成した可能性が極めて大きいと言える。

ここでは東地区内のこれら土坑群について考えてみたい。竪穴住居跡に伴うものとそうでないものに違いがあるのか考えてみたいが、伴うものは埋土などに焼土や炭化物が混入している程度で地山に近い黄褐色土や大礫がかなり混在しているとか、何かがまとまって廃棄されているとかいう状況はない。竪穴住居跡の埋没とともに同時進行的に土坑も埋没している。一方、伴わないものについては、本文中にも記したがHK03、HK04、HK07では動植物などの遺存体の大量廃棄やHK11では大礫の廃棄がみられるなど所謂残滓の廃棄穴の一面をみせている。しかし、厳密に埋土状況を見ていくとこれらも底面に一度土層の自然堆積がありその段階をすぎた中間部分に廃棄されているもので

あり、本来的には一度何等かの使用目的を有していたものの転用ではないかと考えられる。そうするとこれら土坑群は本質的には単に竪穴住居跡内か外に存在したという違いでしかないと思われる。単純に考えるならば根拠はないが、埋土状態から墓壙とは考えられず、少なくとも竪穴住居跡内のもは貯蔵施設の可能性が高いと思われる。外のものについても同様に貯蔵するものが違うために外につくったのかもしれない。

市内の調査例では細越Ⅰ、青猿Ⅰ、鯉沢、島田などがあり報告書未刊のものとしては近内館跡、神田沢、長沢向などがあり、いずれも平安時代に所属するものである。長沢向は竪穴住居跡のほぼ中央に深い土坑が伴い、近内館跡は当遺跡のような在り方、細越Ⅰは所謂カマド脇ピットの大型化したものと竪穴住居跡を切る単独のものがあり竪穴住居跡に伴うものの1基からは貝ブロックが検出されたものがある。青猿Ⅰ、鯉沢、島田は竪穴住居跡外に存在するものである。遺跡の性格としては細越Ⅰ、青猿Ⅰ、神田沢は鍛冶炉や製鉄炉？が伴い鉄関連の性格を強く有す遺跡である。しかし土坑内に鉄滓や焼土の廃棄はあっても当遺跡同様二次的に転用されているものである。

これらの例からみても少なくとも竪穴住居跡内のもは細越Ⅰのような大型化したカマド脇のピットがカマド脇から離れ深度も深くなった貯蔵施設と考えるのが妥当かと思われる。一方、青猿Ⅰ、鯉沢のように竪穴住居跡から離れ単独で存在するものについては、近内館跡、細越Ⅰ、神田沢、島田などでも当遺跡の自然遺物を包含する3基の土坑跡のように残滓を廃棄するために二次的な転用がなされている。特に、当遺跡の西側の尾根上に立地する島田ではマダラを含む土坑跡が検出されている。よって、竪穴住居跡内の土坑よりもこれらは最終的には廃棄穴として転用されてしまう確率が高いことが指摘できる。当遺跡のように時期的にはほぼ同時期なのに竪穴住居跡内と外に類似した土坑を形成しているということは、前述の繰り返しになるが貯蔵されたものの違いが考えられるのではないだろうか。

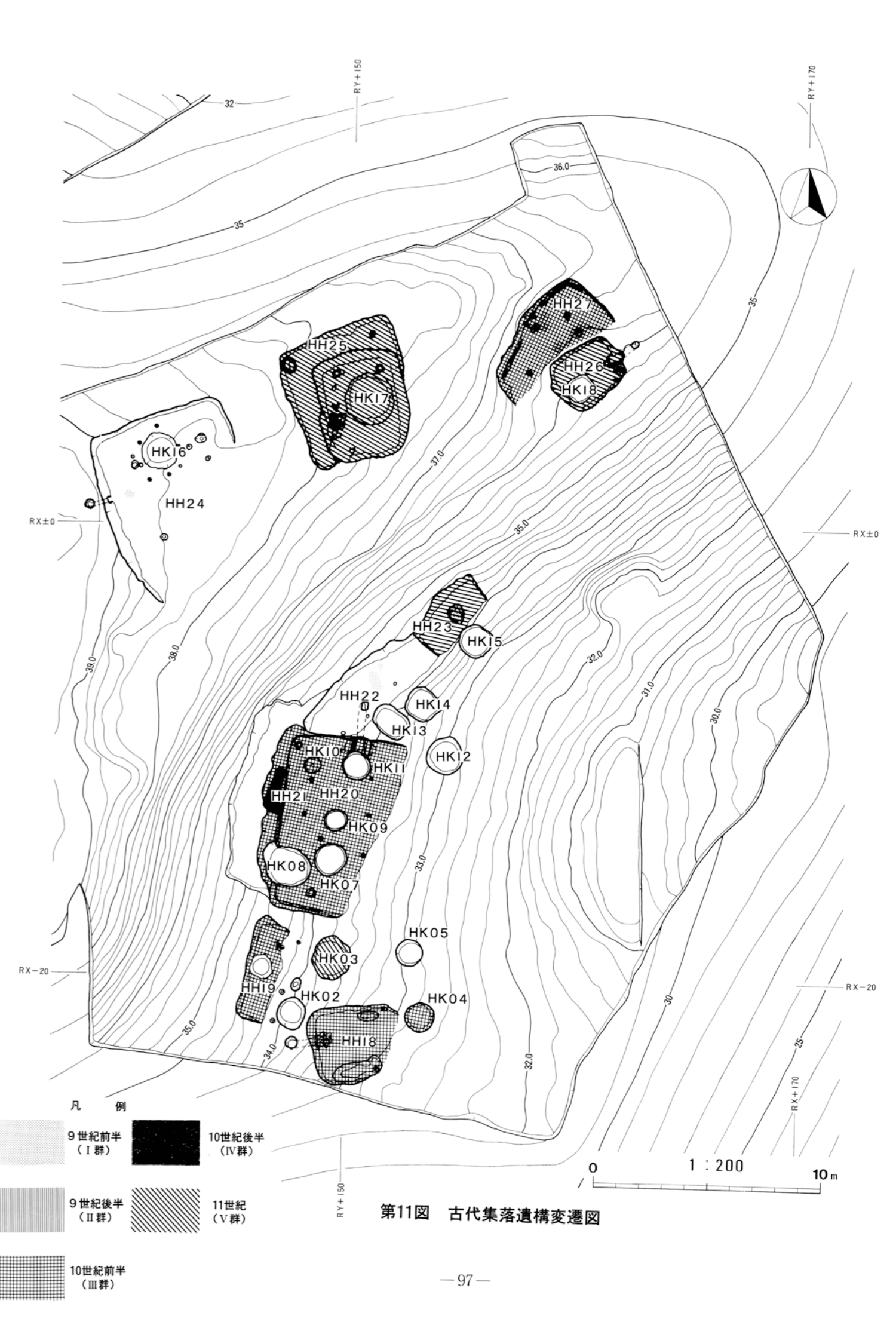
## 2 動物遺存体・植物遺存体

今回の調査では本文中に記したとおり平安時代の動植物遺存体が3基の土坑跡から出土している。時期的には共伴土器群から10～11世紀のものである。

### (1) 動物遺存体について

出土した動物遺存体の主体を構成するのはいずれの土坑跡もイガイ・ムラサキインコガイである。また、HK04からはコタマガイ・アサリ・イソシジミガイなどの砂泥性から砂底性の貝類も出土しており、岩礁性の海岸でしかも砂泥や砂底を伴う環境であったと考えられる。このような観点からみると確かに当遺跡の北側には八木沢川が東流し宮古湾に注ぎこみ、地元民の話では最近までは岩あり砂ありの海岸線を形成していたという(現在は埋め立て事業により人工改変されている)。もう少し広範囲に周辺的环境をみても2km北には閉伊川の河口部、約3km南には津軽石川の河口部が存在し更にはその間には通称一番岩とかいわれるような岩礁地帯も存在している。これくらいの範囲は当然当時の人たちの行動圏に含まれていたものと考えられ、その結果がHK03、HK04、HK07の動物遺存体に反映されていると思われる。

その内容を細かく分析するとHK03、HK07はほとんどがイガイとムラサキインコガイで個体の大きさもほぼ均一性がとれており目的的に採集してきていることが容易に想定できる。これらは潮



- 凡例
- 9世紀前半 (I群)
  - 9世紀後半 (II群)
  - 10世紀前半 (III群)
  - 10世紀後半 (IV群)
  - 11世紀 (V群)

第11圖 古代集落遺構變遷圖





間帯の岩場に生息しており、しかも年間を通じて採集可能なものであるが、HK04も含めて考えるならば、その出土量に層毎に多寡(各層毎の出現率、層の大小などという問題もあるが)が認められ採集時期に季節性があったことも想定させる。貝層の季節性については、HK04が好資料となりそうである。まず、イガイとムラサキインコガイ以外の貝類についてだが、コタマガイは河口から離れた砂底に生息しているもので、当然潜水行為を伴わないと採集できないものである。現代ではおもに夏に採集されている。イソシジミガイとアサリは河口部の砂泥に生息し、アサリなどは現代でも潮干狩などの対象となっているものでこれらは比較的容易に採集できたものと考えられる。採集季節は春から夏である。エゾアワビやカキ類は岩礁でも外洋性の岩礁に張り付くように生息し潜水するか特別な道具(現代ではアワビカギなど)が必要となってくる。現代の採集時期は晩秋～初冬である。オオバフンウニ科も外洋性の岩礁に生息するもので、当然潜水もしくは専用の道具が必要となる。採集時期は夏である。一方、僅かだが出土している魚骨に目を向けると、サケ科は川で産卵し海に下り回遊し何年か後に遡上してくるという習性を持つもので、捕獲時期は晩秋から冬である。タイ科は暖流系の回遊魚で湾内に入ってくることはない。マダラは深海に生息する魚で当然湾内に入ってくることはなく、現代でも沖合いに出なければ捕獲できないものである。捕獲時期は冬である。その他の魚は所謂根魚で海岸部に生息している。以上のことを考慮してHK04の貝層について下層の方から層位関係も含め分析するが、各層での出現率の問題もあるが、本文中に記した④GではS31層にイソシジミガイとオオバフンウニ科のピークがあり春から夏の季節が考えられる。よってS31層以下のS32～S34層もイソシジミガイやオオバフンウニ科が出現し始めていることからHK04の貝層の堆積は早くて早春の頃から始まっていると考えられる。次の③Gはイソシジミガイ・オオバフンウニ科が未だ出現しており、またエゾアワビなどが出現し始めており晩夏から初秋の季節が考えられる。次の②Gになると、S23～S25層にエゾアワビのピークがあり、またマダラが増加しS16～S18層にイソシジミガイが出現し始めていることから晩秋から冬そして早春の季節が考えられる。そして最後の①GではS14、S15層などからコタマガイが増加しており、またイソシジミガイが全く出土していないなどのことから④Gとは異なった在り方を示している。また、S2層でイガイとムラサキインコガイが増加しており、春から夏、そして秋までの季節が考えられる。以上をまとめるとHK04ではある年の早春から貝層の形成が始まり夏から秋、冬をへて次春から夏、そして秋までで終了している。よって、1年半にわたって継続して廃棄され形成された貝層といえる。イガイ・ムラサキインコガイは晩夏から秋にかけて採集されているようである。

次にこれら3基の土坑跡からの出土状態などから採集や調理方法などについて考えてみたい。イガイ・ムラサキインコガイについてはそれらに付着しているチシマフジツボ・チリハギガイがほぼ同様な増減傾向を示しており、岩礁からある程度の塊で採集しそのまま集落内に搬入していることが考えられる。しかも正確に全個体の計測値を出した訳ではないが、ほぼ個体に均一性が認められ意図的に採集していることがわかる。イガイはHK03、HK07では破碎されたものが少なくしかも熱変を受けているものもあることや同時にチシマフジツボも熱変を受けているので煮たり焼いたりして調理していたものと思われる。HK04では破碎されていないもののほかに細かく破碎された状態でも出土しており違いをみせるが、それが調理方法の違いなのか食後に廃棄する段階なのか、あるいは全く別個の問題なのかは今後の検討課題であると思う。HK04から出土しているコタマガイは形状をとどめたものが多く、その大半が焼けているので調理方法は直火焼ということになる。問題は採集方法

だが、貝殻自体には孔があるとか傷ついているとかいうようなことはないので、直接海に潜水して採集されたものと考えられる。地元の方々の話では現在のように海岸が人工改変される前までは中学生くらいの子供でも素潜りで捕獲したという話もあり、平安時代の人たちも素潜りで捕獲したと思われる。エゾアワビやイワガキ・マガキなども潜水捕獲と考えられる。ただし、岩に張り付いているので何らかの道具ではがしたものと思われるが、今回の調査で出土している刀子や幾分幅のひろい棒状の鉄製品などを使用していたと考えられる。次は魚についてだが、とくにマダラは湾内にまぎれこむことはほとんど考えられず、やはり舟で沖合いに出て釣りにより捕獲したものと考えられる。今回の調査では鉄製の釣針も出土していることも傍証になると思う。その他の根魚も岩場からの釣りで捕獲したものと思われる。

次に他の遺跡の類例だが、最近岩手県沿岸部の古代の遺跡から当遺跡のような事例が報告されてきている。まず、市内では調査報告書が刊行されている中では銚ヶ崎館山貝塚の平安時代の竪穴住居跡の床面近くからイガイを主体とした貝層が検出している。イガイのほかアサリやアズマニシキガイの貝類やアイナメやカサゴ科の魚骨が若干出土している。細越Ⅰ遺跡ではやはり平安時代の竪穴住居跡の埋土や土坑跡からイガイ・エゾイガイ・ムラサキインコガイを主体とした小規模な貝ブロックが検出している。他にもドングリの廃棄ブロックも検出しており、その中には貝殻やカニのハサミなどが出土している。細越Ⅰ遺跡は海岸部から直線距離にして約5 kmも山間部に立地する遺跡ということも興味深い。当遺跡のすぐ西側に存在する島田遺跡からは平安時代の土坑跡からマダラの魚骨やシカの骨が出土している。なお、調査報告書ではマダラをサケ類として記載しているがこれを以て訂正する。時期不明ながら下在家Ⅱ遺跡からも土坑跡からエゾアワビ・ムラサキインコガイを主体とした貝層を検出している。また、未報告のものでは近内館跡遺跡や神田沢遺跡から若干出土している。市外になると久慈市の源道遺跡、上平沢Ⅰ遺跡、大槌町の夏本遺跡からイガイ・エゾイガイ・ムラサキインコガイを主体とした貝層が検出されている。その他、幾つかの海岸部の遺跡からは断片的に動物遺存体が出土しているようである。

## (2) 植物遺存体について

オニグルミ・ウメ・メロン類・オオムギ・イネなどの植物種子が出土しているが、巻末に同定結果とコメントが付されているので、ここでは簡単にまとめる。

市内の遺跡では細越Ⅰ遺跡でドングリの廃棄ブロックからアワ？などの雑穀類の種子が検出されていただけで、今回のまとまった出土は注目される。特にイネの検出は当地方にも10世紀前半には農耕が行われていたことを実証するものである。集計が間にあわなかったので数量的なことは記載できなかったが、少なくとも数十個単位のものである。今までは市内の遺跡においては、農耕を裏付ける遺物、例えば赤前遺跡や銚ヶ崎館山貝塚の平安時代の竪穴住居跡から穂摘み具などの鉄製品が出土している程度であった。市外の遺跡でも断片的にはこのような雑穀を中心として出土が報告されている。今後は得られたデータを更に分析しどのような農耕活動がなされていたのか解明していくのが課題として残されたと思っている。

また、動物遺存体も含めて魚撈や農耕活動の在り方を追求し、更には他の遺跡のデータなども混じえ当時の生産・生業活動の一端でも復元・解明できればと思っている。

### 3 土器群の分類と編年について

ここでは磯鷄館山遺跡から出土した土器群について器形分類と遺構毎の組成について検討を加えた上で、関連遺跡との比較により年代的な位置づけを行ってみたい。

今回の発掘調査により出土した古代の土器群は、いずれも平安時代に伴うものであり奈良時代以前に伴うものは全く出土していない。

これらの土器群は土師器・須恵器・あかやき土器に大別されるが、各々の特徴は次のとおりである。

〈土師器〉 坏類—ロクロを使用した酸化焰焼成のもので、内面をヘラミガキにより調整するもの。

内面は黒色処理をするものが大半であるが、黒色処理しないものも稀に存在する。

甕類—ロクロを使用しない(非使用)酸化焰焼成のもの。

〈須恵器〉 坏類—ロクロを使用した還元焰焼成のもの。

甕類—同上であるが、大形甕などは口縁部のみロクロ使用となる例がある。

〈あかやき土器〉 坏類—ロクロを使用した酸化焰焼成のもので、内面がヘラミガキにより調整されな

いもの。製作技法は須恵器に共通する。

甕類—ロクロを使用した酸化焰焼成のもので、やはり製作技法は須恵器に共通する。

#### (1) 器形分類(第12図)

##### a 坏 類

坏の器形は上記した3種類の土器とともに共通性が強いために一括して分類する。

A類 底部から口縁部まで直線的に立ち上がるものをA1類とし、A1類に類似するが体部下半にわずかな丸味を持つものをA2類とする。

B類 底部から体部にかけて内湾気味に丸味を持って立ち上がるもの、口縁部は内湾気味や直線的なものがみられるが一括する。

C類 底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部がやや強く外反するもの。器高が高目で外傾率の小さいものをC1類、器高が低く外傾率の大きいものをC2類とする。

また、これらの土器の底部切離しはいずれも回転糸切りで、再調整の施される部位は次のとおりである。

- ① 底面の外縁付近のみ
- ② 底面全面
- ③ 体部下半(一部上半部におよぶものもある)
- ④ 体部下半から底面の外縁付近にかけて
- ⑤ 体部下半から底面全面にかけて
- ⑥ 無調整

なお、坏のほかには土師器高台付坏と耳皿があるが、出土点数が少なく、それぞれ一括する。

##### b 甕 類

土師器甕を次のとおり分類する。

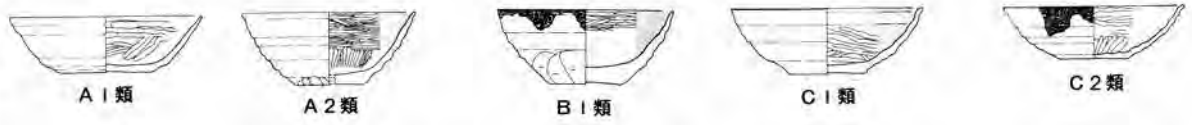
A類 口縁部の外反する長胴形を呈し、底部から体部にかけてあまり膨らみを持たずにやや直線的に立ち上がるもの。最大径は口縁部にある。

B類 A類に類似するが体部に明瞭な膨らみを有する。最大径はおおむね体部にある。

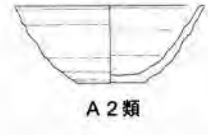
須恵器  
坏



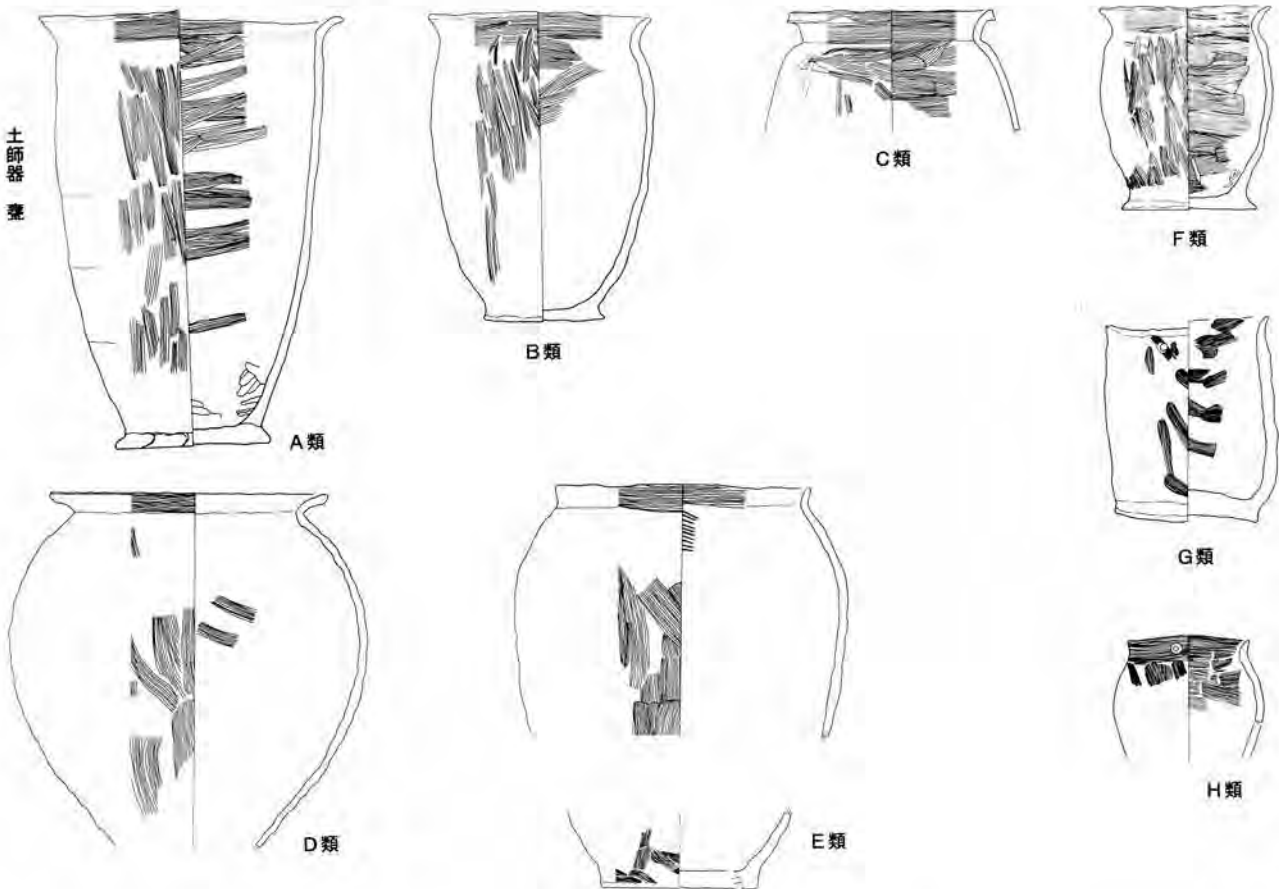
土師器  
坏



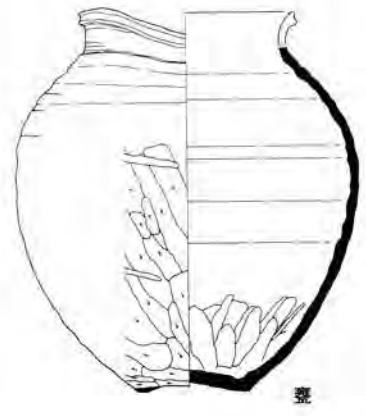
あかやき土器  
坏



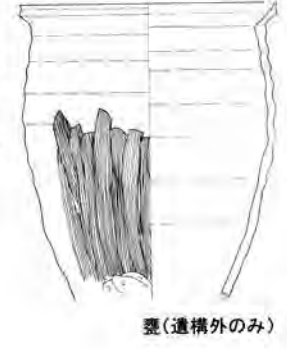
土師器  
壺



須恵器  
壺



あかやき土器



第12図 土器分類図

C類 全体の器形は不明であるが、やや胴張りの器形で口唇部が須恵器甕の形態に類似する。最大径は体部にある。

D類 体部のほぼ中央が強く張り出す球胴形を呈する。口縁部の外反～外傾するものをD1類、ほぼ直上に立ち上がるものをD2類とする。

E類 体部上半に強い膨らみを有し、ここから底部にかけて急にすぼまるもの。口縁部は概して短く、外反気味のをE1類、直立気味のをE2類とする。

F類 小形甕でB類に類似するもの。

G類 小形甕でほぼ円筒形を呈するもの。

H類 小形甕でE類に類似するもの。

A類・B類・F類については頸部に不明瞭な段や沈線を有するものを1類、無いものを2類とし、更に口唇部がやや厚手で単純なものを①類、口唇部にわずかながら玉状の膨らみを有するものを②類、頸部から口唇部にかけて急に薄くなるものを③類とする。

須恵器甕類は中形甕と長頸瓶を図示したが、このほかに大形甕の破片が出土している。

あかやき土器甕類は図示した1点のみである。

## (2) 土器群の類型化について(第13図～第15図)

前述した器形分類と個々の遺構毎の組成に基づき、磯鷄館山遺跡から出土した土器群を次のとおりグルーピングすることが可能である。

### ●第I群(第13図HH04・HH07・HH13・HH16)

HH04が比較的出土量が多くややまとまりがある。坏は須恵器と土師器の両者が認められ、いずれも底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がりながら体部下半にわずかな丸味を持つA2類を主体とするが、B類に近いものも認められ。土師器坏では体部下半から底面全面にかけて再調整されるものがある。

甕は土師器のみでありA類・B類・D類が認められる。A類・B類はいずれも頸部に不明瞭ながら段や沈線を持っており、口縁部はやや厚手である(A1①類・B1①類)。A類の底部には明瞭な張り出しが認められる。D類は破片資料につき全体の器形を明らかにし得ないが、口縁部がやや幅広で外反している(D1類)。これらの甕類は外面を弱いヘラナデ、内面を強いヘラナデにて器面調整される。

なお、これらのほかには丸底風の小形甕か鉢の底部と、張り出しを持つ小形甕底部が出土している。

HH04に類似するものとしては、HH14が土師器(A2類)と張り出しを持つ土師器甕底部が共伴、HH13が張り出しを持つ甕の底部、頸部に段を有する小形甕(G類、あるいはこしき飯か)、須恵器甕破片などが共伴、HH16が須恵器坏(A2類)、土師器甕(A1①類、D1類)須恵器甕破片などが共伴する例がある。

また、HH07は床面から須恵器坏(A2類)と須恵器壺破片が、埋土中から須恵器坏(C1類)が出土している。ここでは埋土資料まで同一に扱って良いか疑問があるが、少なくとも床面資料はHH04に類似する。さらにHH04床面とHH07出土の砥石が接合しており両者はほぼ同時期の遺構と考えられる。

### ●第II群(第13図～第14図HH03・HH05・HH09・HH10)

HH10埋土出土資料がややまとまっている。坏は土師器のみであり、底部から体部にかけて内湾

気味に立ち上がるB類を主体とする。また、高台付坏の破片も認められる。

甕類は土師器と須恵器の両者がある。土師器甕は長胴形と小形のものの2者が認められる。長胴形は体部にわずかな膨らみを持つもので、頸部には段や沈線を持たない。口縁部はやや幅が狭く強く外反し、口唇部はわずかながら玉状に膨らむ(B2②類)。底部には強い張り出しが認められるが、別個体では張り出しの弱いものもある。小形甕は基本的には長胴形に類似するが、口唇部は先細りとなっている(F2③類)。これらの器面調整はおおむねヘラナデを主体とし、一部刷毛目が認められる。

須恵器甕類は会津若松市大戸窯産に類似する長頸瓶破片(9世紀中葉か)とかなりゆがみのある中形甕が出土している。

HH10に類似するものとしては、HH03が内湾気味に立ち上がる土師器坏(B類)と口縁部が強く外反し底部が強く張り出す土師器甕(A2②類)が共伴し、HH09が土師器坏(B類)と土師器甕(B2②類)と須恵器長頸瓶が共伴する例がある。

また、このほかはあまり良好な資料ではないものの、HH01からは須恵器甕の器形を模したと思われる土師器甕(C類)が、HH02からは口縁部の外湾する土師器甕が、HH05は内湾気味に立ち上がる須恵器坏と底部が強く張り出す土師器甕底部が出土している。

さらに、HH11からは内湾気味に立ち上がる土師器坏(B類)・口縁部が外反する土師器坏(C類)・口縁部の外湾する土師器甕(B2①)が共伴している。

NH10・HH03・HH09以外はおおむね本群に伴うものと思われるが、一部第Ⅲ群に伴うものが含まれる可能性はある。

#### ●第Ⅲ群(第14図HH18・HH19・HH20(下層)・HH27・HK04)

HH20の床面から埋土D層にかけて出土した遺物はHH20にはほぼ伴うものと思われるが、出土量も比較的多く、まとまっている。坏はいずれも土師器で内湾気味に立ち上がるもの(B類)と口縁部の外反するもの(C1類)の両者があり、底部から体部下半にかけては外湾気味となる。また、特にB類については第Ⅱ群よりやや器高が浅くなる傾向がうかがえる。

甕類は土師器と須恵器の両者が認められる。土師器甕で器形の判明しているのは小形甕のみであるが、口縁部はやや幅が狭くなり先細りしながらわずかに外湾する。体部の最大径は体部上半にあり、底部の張り出しはやや弱くなる(F2③類)。器面調整は内外面ともにヘラナデを主体とするが、他の個体ではヘラケズリも認められる。

須恵器甕は口唇部を上方に引き出す口縁部破片とタタキ目を有する体部破片がある。

HK04はHH20の南約6mの位置する土坑跡で、埋土中にイガイやイソシジミなどによる貝層が形成された土坑跡であるが、両者の遺構間で遺物の接合関係が認められた。従って、両者の遺物を総合したものが本来の組成により近いものであると言える。

HK04出土遺物はあまり多くはないが、口縁部が先細りしながらわずかに外反する球胴形甕(D2類)と円筒形を呈し口縁部が先細りしながらわずかに外湾する小形甕(G類)などがある。

これらに類似するものとしては、HH18があかやき土器坏(B類)と口縁部が先細りしながらわずかに外湾する土師器甕(A2③類・F2③類)が共伴し、HH27が土師器坏(B類か)と土師器甕(A2③類)が共伴する例がある。また、HH19からはHK04に類似する筒形の小形甕が出土している。

#### ●Ⅳ群(第15図HH20上層)

HH20の上層(A層～C層)からの出土遺物は本来HH21、HM22に伴う遺物であると思われ

るが、両者の分離が困難であったために一括する。

坏は土師器と須恵器の両者がある。器形の判明するものはいずれも口縁部の外反するもので、やや器高の低いもの(C 2類)が多い。底部から体部下半は外湾気味となるものが多く、また、底径は前述した各群よりも小さくなる様である。再調整は全く認められない。

甕類は土師器と須恵器の両者が認められる。土師器甕で口縁部付近の形態が判明するのは小形甕のみであるが、体部に強い膨らみを有し口縁部は幅が狭く先細りとなりわずかに外反する。長胴形と思われる底部破片はいずれも底部の張り出しが弱くなる。これらの器面調整はヘラナデを主体とする。

須恵器甕類は高台を有する壺かと思われるものと甕が認められる。

#### ●第V群(第15図HH 0 8・HH 2 5・HH 2 3・HH 2 6・HK 0 3)

比較的出土量が多いのはHH 2 5・HH 2 6であるが、他の資料もこれらと極めて類似性が強く、斉一性があるために一括する。

今のところ坏類は全く共伴せず、土師器甕と須恵器甕(破片のみ)から成っている。

土師器甕は体部上半に強い膨らみを有し、ここから底部にかけて急にすぼまっている。口縁部は極めて幅が狭く先細りし、直上気味に立ち上がるもの(E 2類)とわずかに外反するもの(E 1類)が認められる。底部の張り出しは全く無いか極めて痕跡的である。

須恵器は甕の破片がHH 2 5とHH 2 3から出土しているが、いずれも破片であり本来共伴したものかどうかは不明である。

以上、磯鷄館山遺跡から出土した平安時代の土器群を5群に分類してみた。これに遺構の重複による新旧関係を加味すると、まず第I群を出土したHH 0 4が第II群を出土したHH 0 3に切られる。また、第III群から第V群への変遷は、HH 2 0下層(第III群)→HH 2 0上層=HH 2 1・HH 2 2(第IV群)→HH 2 3(第V群)となる。この結果として第I群から第V群までのほぼ連続した変遷が想定された。これは例えば坏類では第I段階の比較的直線的な断面形態から丸みを持つもの、口縁部の外反するものへと移行し、第IV段階では底径の小形化を見た後に第V段階では全く欠落してしまう。

また、土師器甕類では頸部に認められた不明瞭な段や沈線が消失するとともに次第に口縁部幅が狭くなり、特に第III段階以降は口縁部が先細りしながらゆるく外湾するものへと移行し、やがて第V段階ではE類のみ(あるいはE類に類似したもののみ)に収束して行く。更に、これに伴い底部の張り出しも次第に形骸化して行く傾向がうかがえた。

須恵器については決して組成比率が多いとは言えないものの、遺跡全体とすれば第IV段階まで安定した出土状況がうかがえる。

なお、あかやき土器については極めて出土量が少ない点を指摘できよう。

### (3) 土器群の編年的位置づけについて

今回の発掘調査により出土した平安時代の土器群は5群に分類され、ほぼ第I群から第V群への変遷が想定された。ここでは各群についての編年的位置づけ、特に絶対年代についておおよその検討を加えて見たい。

岩手県内の古代の土器については既に高橋信雄氏(高橋 1982)と相原康二氏(相原 1981、相原ほか 1983)両氏による編年案が提示され、大綱はほぼ確立したと言える状況である。まだこの後、八木光則氏(八木 1993)による県中部と県北部の編年案が提示されているので、ここではこれら先学の業績

を踏まえながら論を進めて行くこととする。

まず、第Ⅰ群は直線的に立ち上がる坏と段や沈線を持ち底部が強く張り出す土師器甕などを特徴とするもので、高橋氏のⅢ-1群、相原氏の第Ⅷ群土器、八木氏のFグループに相当する。年代的にはおよそ9世紀前半代に相当するものと思われる。

今回報告した本遺跡出土資料では須恵器坏が比較的多い点や既に報告済みの同遺跡第1号竪穴住居跡(註1)が本群に相当し、これに須恵器碗を模したそば猪口形の土師器坏が共伴している点は県央部との類似点として指摘でき、また、ヘラ切りが全く認められずすべて糸切りである点(註2)と、あかやき土器を欠く点では県北部との類似性が認められる。

このように該期では岩手県中央部と県北部両者との共通点が認められ、丁度両者の中間的様相を有していると言える。

また、本群ではロクロ未使用の坏が共伴していないが、周辺部の遺跡では上村貝塚N-2住(高橋(義)ほか1991)や小堀内Ⅲ遺跡(整理中)で確実な共伴例が確認されている。従来この様な組成は9世紀初頭や9世紀前半と考えられて来たが、八木氏はこれらをEグループとして8世紀末に位置づけておられる。

第Ⅱ群は坏がやや丸みを帯びてきて、土師器甕では段が完全に消失し短か目の口縁部が強く外反～外湾する点を特徴とし、口唇部がやや膨らむ点と底部が強く張り出す点がこれに追加される。高橋氏のⅢ-2群の一部、相原氏の第Ⅸ群の一部(?), 八木氏のGグループに相当する。年代的にはおよそ9世紀後半代に相当するものと思われ、本群のHH10から9世紀中葉とされた須恵器壺片(註3)が出土している点ともほぼ符合する。

本群の組成内容で特にあかやき土器を欠く点を考慮すれば、県北部との類似性が指摘できようが、前群同様に土師器甕底部に強い張り出しを有する点では県北部とも異なる地方色を持っているとも言えよう。また、土師器甕に県央部と類似する器形が認められる点や須恵器の出土量がやや多い点では県央部との類似性も指摘できる。従って、本群でも県央部と県北部の中間的様相を有していると言える。

第Ⅲ群は坏の口縁部が外反し、体部下半が外湾気味のものが主体となり、土師器甕は口縁部が先細りとなりわずかに外湾するものが多くなる点を特徴とする。また、底部の張り出しが次第に弱くなる傾向がうかがわれる。更に出土点数は少ないながらもあかやき土器が共伴している。高橋氏のⅢ-2群の一部、相原氏の第Ⅸ群の一部(?), 八木沢氏のHグループに相当するものと思われ、年代的には10世紀代でもおおむね前半期に相当するものと思われる。

本群はあかやき土器が少ないながらも確実に共伴しはじめる時期であり、周辺部では上村貝塚H-2号住などに類例を求めることができる。この段階は県央部、県北部ともにあかやき土器が急増する時期とされ、本群との共通性が強いと言えよう。また、これは時期を決定づけるものかどうか不明ではあるが、HK04等から出土している筒型の小形甕は県北部に類例を求めることができる。

第Ⅳ群はまとまった資料が少ないが、坏の器形は第Ⅲ群に類似しながらも器高がやや低くなる点や底径が小さくなる点を特徴とする。また、再調整は全く認められなくなる。土師器甕は確実な例は少なく、わずかに第Ⅴ群に類似する小形甕の出土が認められる。ただし、須恵器については坏、甕類ともに出土量が多い。高橋氏のⅢ-2群～Ⅳ群、相原氏の第Ⅹ群の一部、八木氏のIグループに相当するものと思われ、年代的には10世紀代、とりわけ10世紀後半期に相当するものと思われる。



本群は組成内容が不十分ではあるが、やはり県北部との類似性を認めるべきであろう。また、土師器甕が著しく減少する傾向に注目すれば県中部との類似性も認めることができる。

ただし、須恵器の出土量が多い点は両地方と異なる様相であると言えよう。

第V群はやや遺構数が多くなり、類例が増加する。坏は今のところ全く共伴せず、土師器甕は口縁部が極めて浅く、体部上半に強い膨らみを持つE類のみに統一されてしまう。遺構によっては少量の須恵器片が出土している例があるが、本来組成の一部を構成していたものかどうかは今後も十分注目して行く必要がある。本群は高橋氏の第IV群、相原氏のXI群、八木氏のJグループに相当するもので、年代的には11世紀代に相当するものと思われる。

本群に類似する資料は細越I遺跡(註4)、千徳遺跡A地点住居跡(註5)から出土しており、本群の在り方が決して特殊なものではなく当地方での普遍的な在り方だと考えて良さそうである。

このような土器群は県北部に広く分布しており当地方との強い共通性が認められる。また、県中部では坏類が確実に共伴し、高台を有する坏(椀)と小皿に分化する傾向が見られ、当地方や県北部とは基本的には異なった様相を呈している。

以上のように磯鷄館山遺跡から出土した古代の土器は5段階に分類され、およそ9世紀前半から11世紀にわたりほぼ連続して変遷することが確認されたと言える。ただし、各群における絶対年代については、紀年銘を持つ資料等が全く欠落していることからある程度の誤差を有していることは了解いただきたい。

宮古地方における古代の土器は、およそ7世紀代から出現しはじめ、8世紀前半では確実に遺構に伴った出土例が確認され、8世紀後半では遺跡数が増加する。また、この段階では今のところ沿岸部唯一の終末期古墳群である長根古墳群(註6)が知られている。

7～8世紀代では基本的に当地方は県中部や県北部との質的な差は無いと考えて良いと思われる。これは換言すれば、いずれの地域も律令制がおよばない蝦夷社会内での同質な在り方であると言えよう。

但し、『続日本紀』には靈龜元年(715)に須賀君古麻比留等が祖先以来国府に昆布を献納しており「閑村」に郡家を建てる様に要請し、許可されたという記事がある。この閑村を特定することは今のところ不可能であるが、少なくとも当地方を含む沿岸地方北部の蝦夷たちが律令政府とある一定の関係を結びながら独自の社会を形成していたと想定することは可能であろうかと思われ、これは長根古墳群の遺物出土状況とも符合していると言えよう。さらに、この様な状況は県中部・県北部に共通するものだと思われる。

8世紀末葉～9世紀初頭は県中部～県南部の蝦夷達が律令政府と盛んに交戦していた時期であるが、この頃に土師器坏類にロクロ技術が導入されたものと見られ、ロクロ使用坏類とロクロ未使用坏類が共伴している。やがて802年、803年と相次いで創建された胆沢城・志波城では基本的にはロクロ未使用の土師器坏類が無いか極めて少ない状況だと言える。

当地方でもロクロ技術の導入はほぼ同時に行われたと考えられるが、この段階の当地方では遺跡により須恵器にヘラ切り技法が認められるものと糸切り技法のみのものがあり一様でない点が指摘できる。

本遺跡の第I群はロクロ技術の定着した時期であり、9世紀前半代に伴うものと想定した。この段階では県中部は律令体制下に入り、県北部はその外に位置づけられる。当地方も県北部同様に律令体

制下に入らなかった地域であるが、前述したとおり土器群は県央部、県北部の両者に類似しながらも両地方と微妙に異なっており、両地方とはある一定のスタンスを保持しながら独自の地域性を持っていたものと思われる。

こうした傾向は9世紀後半と想定した第Ⅱ群までは明らかに続き、10世紀代と想定した第Ⅲ群・第Ⅳ群では次第に県北部に近い様相を呈する様になる。これらの段階は当時の政府が政策変更をしたため、律令制が地域的な拡大を止めて、次第に停滞に向かう時期であったと考えられ、県央部・県北部ともに質的には大差無いと考えて良いのかもしれない（註8）。

ただし、本遺跡ではこれらの段階で総体的には稲作農耕やタラ漁などの漁業のほかには鉄生産などの生産活動が依然として活発に行われていたことは指摘できる。

やがて安倍氏の時代とされる11世紀代に入ると、当地方は県北部と全く同様な土器を持つようになり、両地域が同一の文化圏に入っていたことが指摘される。

また、第Ⅴ群以降の様相については前述したようにF地区のMB 0 8から12世紀代の渥美産の甕片や12世紀末葉～13世紀初頭の常滑産の甕（常滑の第4段階に相当）が出土し、本遺跡内で依然として生活が営まれていたことが伺えるが、遺跡の立地環境や遺構の構成内容が一変していることが指摘できる。更に、この時期の類例としては、やはり掘立柱建物跡に伴い12～13世紀の片口（鉢）が出土した弘川Ⅰ遺跡（註7）を上げることができる。

最後に、今回の整理作業を通して解明できなかった問題点としては須恵器の在り方が上げられる。遺跡全体としては須恵器の出土量が多く、比較的安定した出土量を持っていると言え、特に10世紀後半代かとした第Ⅳ段階でも多い。

また、福島県大戸窯かと想定される比較的遠方から運び込まれる例や、かなりゆがみがあり窯体が付着したいわば粗悪品が出土している例もあり、他地域とは一風変わった様相を呈している。

今後はこれらの産地同定を実施しながら須恵器自体の編年を行い、土師器等とのすり合わせを行う必要があるので、これらの情報が蓄積された時点で再度検討を試みたい。

## 註 記

- 註1 第5図第2次調査地点（昭和63年度発掘調査実施）、1990 『磯鶏館山遺跡－昭和63年度発掘調査報告書』 より。
- 註2 上村貝塚N－2号竪穴住居跡、同0－2号竪穴住居跡、同J－1号竪穴住居跡には回転ヘラ切りが認められる。これ以外には今のところ確実な例は認められない。
- 註3 藤沼邦彦氏（当時東北歴史資料館）の御教示によると福島県会津若松市大戸窯産に類似し、9世紀中葉に伴うものかとのことであった。
- 註4 1992 『細越Ⅰ遺跡・芋野Ⅱ遺跡－農村課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書』 より。細越Ⅰ遺跡はおおむね11世紀代を主体とし、一部10世紀代のものを含む様である。また、この段階で多数の鍛冶炉が検出され、アワと思われる炭化種実などが検出されている。
- 註5 加藤孝 1980 『宮古市千徳遺跡発掘調査概報』 より。A地点の竪穴住居跡自体については写真が1葉提示されているのみで詳細は不明である。
- 註6 光井分行・玉川英喜 『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書146集 より。長根古墳群はおおむね8世紀代を主体とする群集墳で、和同開珎・直刀・

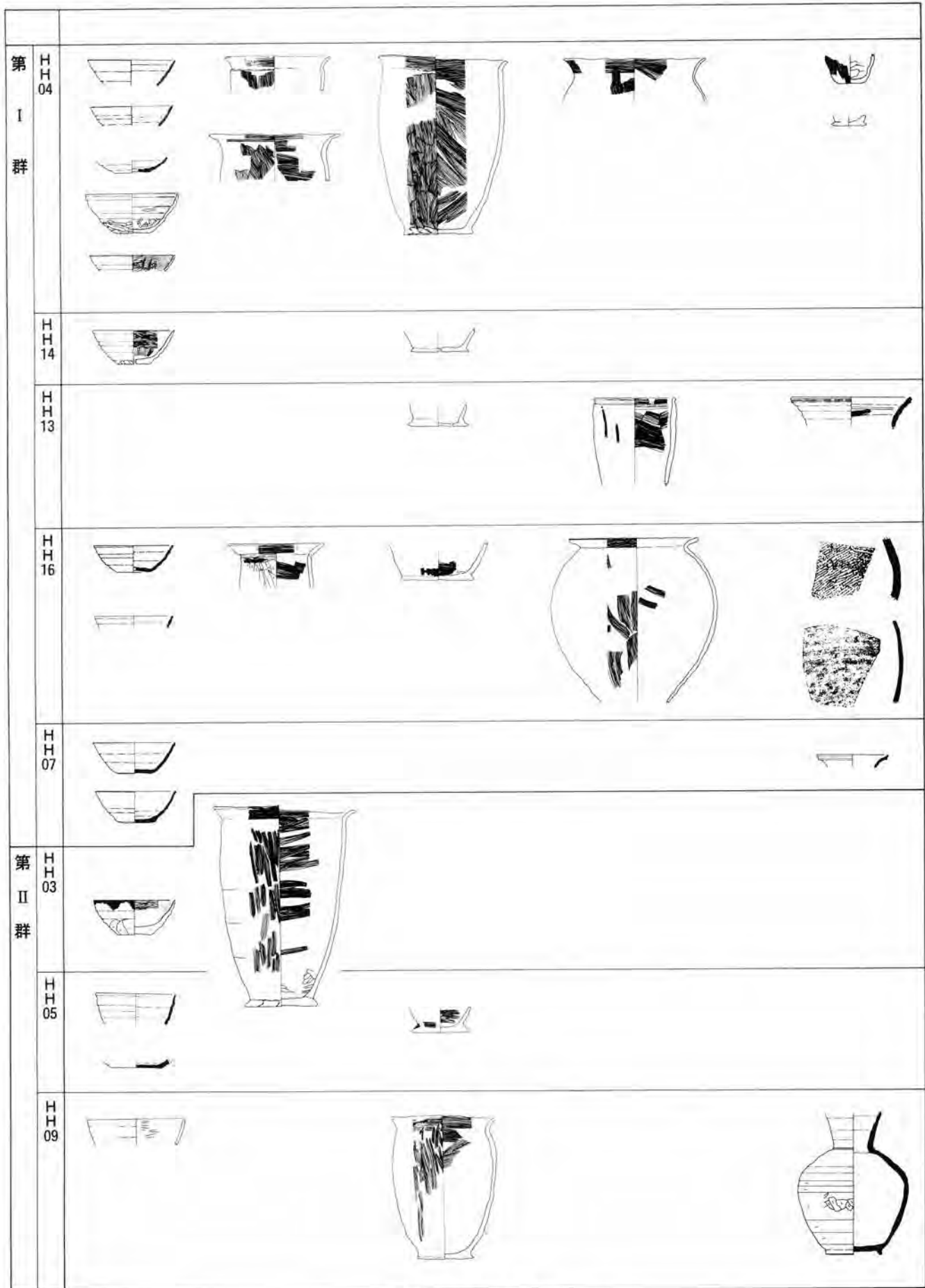
錫製釧・玉類の一部が当地方の外部(おそらくは律令政府?)からもたらされたものと思われる。

註7 1991 『弘川Ⅰ遺跡—平成2年度発掘調査報告書』 より。

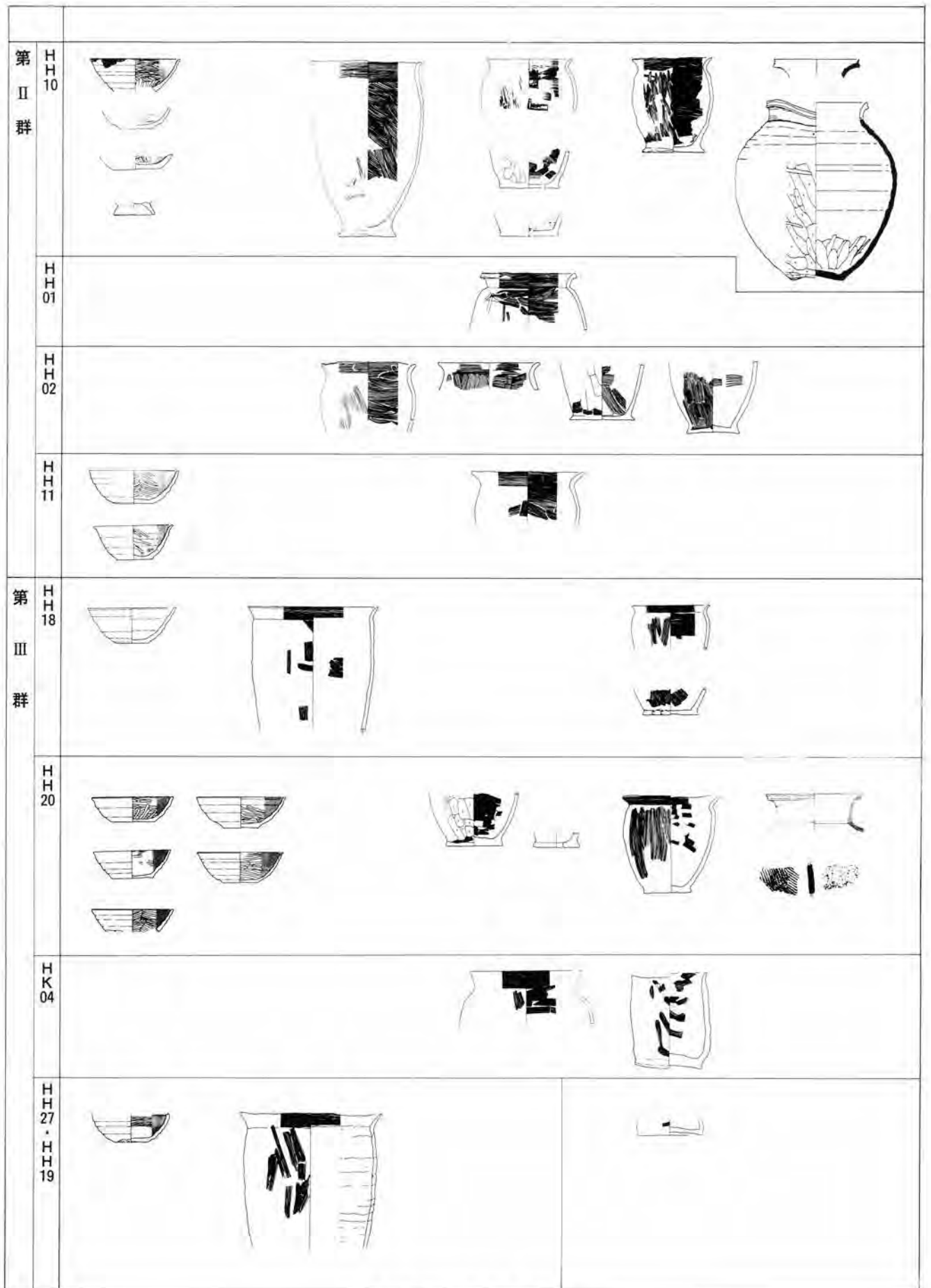
註8 本遺跡における土器群の組成内容等は前述したとおりであるが、近隣の遺跡ではこれと若干様相を異にする出土例も確認されており、これらの資料整理が終了した時点で当地方の土器様相について再度検討することとしたい。

#### 参 考 文 献

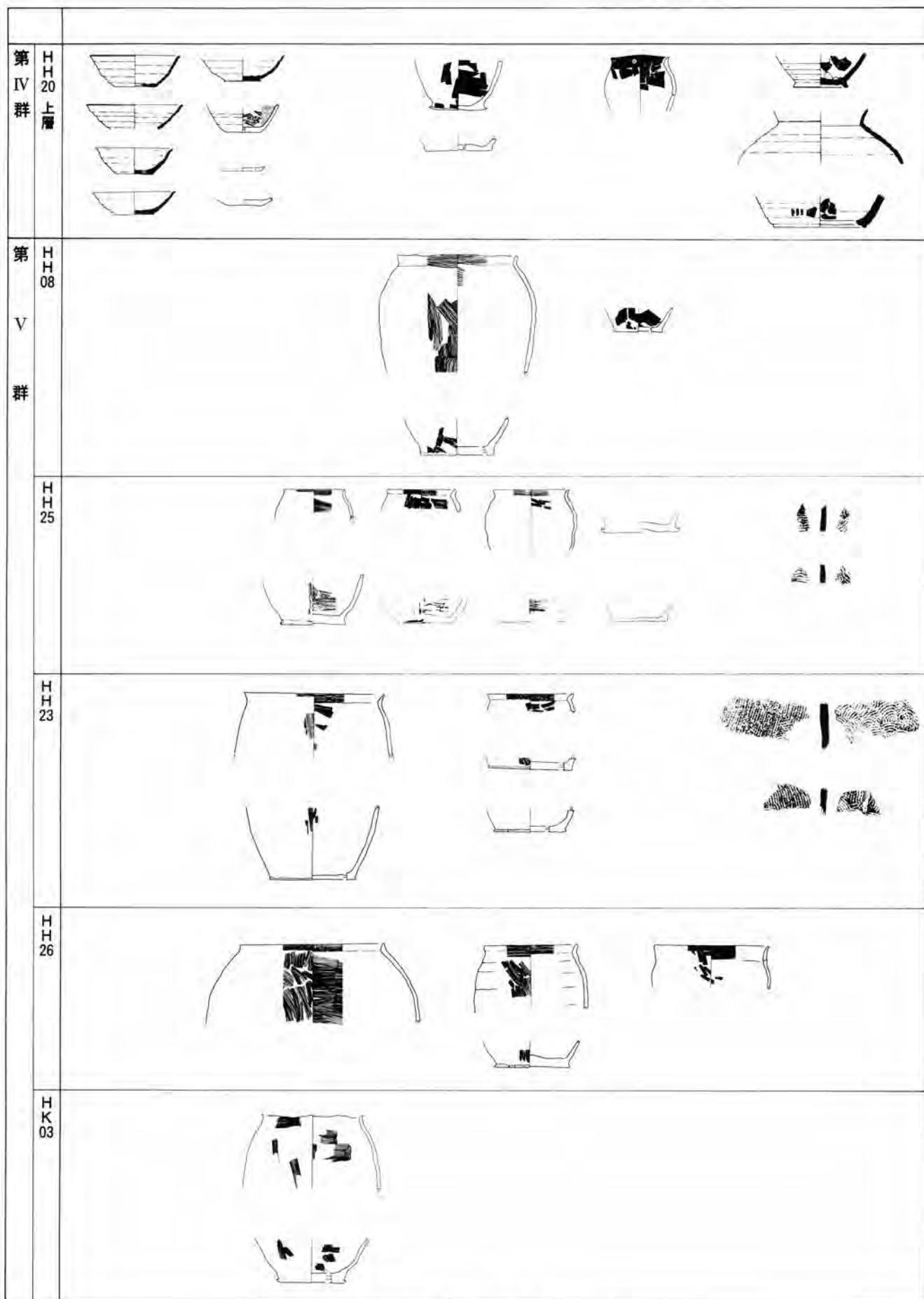
- 相原康二 1981 「岩手県南部における古代土器群編年試案」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 Ⅻ (石田遺跡)』 岩手県文化財調査報告書第61集
- 遠藤勝博・相原康二 1983 「岩手県南部(北上川中流域)における所謂第Ⅰ型式の土師器・前期土師器の内容について」『芹沢長介先生還暦記念論文集 考古学論叢』 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編
- 高橋信雄 1982 「Ⅳ 解説、3. 古代」『岩手の土器 県内出土資料の集成』 岩手県立博物館
- 八木光則 1993 「(2) 古代斯波群と爾薩体の土器様相」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会、特集シンポジウム「北日本における律令期の土器様相」』 古代柵官衙遺跡検討会
- ※なお、本書における土器分類と編年的な位置づけについては上記二者等の論文並びに八木氏の論文を参考させていただいた。特に各時期での細分や県中部や県北部との比較については八木氏の論文を大いに参考させていただいた。ここに記して感謝申し上げたい。また、比較資料としては次の文献を参考にした。
- 小田野哲憲・高橋義介 1991 『上村貝塚発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第158集
- 高田和徳ほか 1981 『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 I』 一戸町教育委員会
- 中村良一・光井文行 1989 『駒焼場遺跡発掘調査報告書 国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第133集
- 三浦謙一 1988 『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書 東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第120集
- 八木光則・千田和文 1979 『太田方八丁遺跡 昭和53年度発掘調査概報』 盛岡市教育委員会
- 八木光則ほか 1981 『志波城跡Ⅰ 太田方八丁遺跡範囲確認調査報告』 盛岡市教育委員会
- 〃 1982 『志波城跡—昭和56年度発掘調査概報』 盛岡市教育委員会
- 鎌田祐二・阿部豊 1992 『鯉沢遺跡—平成2年度発掘調査報告書』 宮古市教育委員会



第13图 土器集成图(1)



第14图 土器集成图(2)



第15図 土器集成図(3)

# 1 磯鶏館山遺跡土坑内検出種子の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

宮古市磯鶏館山遺跡は、八木沢川右岸の丘陵地に位置する。これまでの発掘調査により、平安時代の集落跡および中世の城館跡などが確認されている。今回の分析調査では、まず平安時代の土坑跡HK03・HK04・HK07の埋土中から検出された種実遺体について、その種類を知り、当時の遺跡に持ち込まれた植物について検討することとした。この土坑跡は、貝片なども多量に出土していることから、食料残滓の廃棄場であると考えられている。

## 1. 試料

試料は、当社に送付された時点で試料36袋に分けられており、各袋には単体種子が数点ずつ納められていた。送付された後に当社で試料を再確認し、種類数などを大別して4式とした。送付された種実遺体は、36袋すべて同定を行った。

## 2. 同定方法

肉眼あるいは双眼実態顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定した。

## 3. 結果および考察

以下に形態的特徴について記す。

- オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura クルミ科  
核が検出された。褐灰色。大きさは2 cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。内部は子葉が入るくぼみがある。
- ハシバミ属近似種 *Corylus* sp.  
子葉が検出された。大きさは約1 cmで球形。表面に維管束の跡が筋状に見られる。
- コナラ属 *Quercus* sp.  
子葉が検出された。黒色で楕円形。大きさは1.5 cm程度。表面に維管束の跡が筋状にみられる。
- ウメ *Prunus mume* Sieb. et Zucc.バラ科  
核(内果皮)が検出された。褐色。大きさは約12 mm程度。核の形は楕円形で、やや扁平である。下端についてはややとがり、丸く大きな臍点がありへこんでいるが、上端については臍はなくとがっている。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面には、不規則な円形のくぼみが配列している。
- タムシバ *Magnolia salicifolia* DC. モクレン科  
種子が検出された。縦軸8 mm・横軸7 mm程度で、扁平な楕円形。黒色で種皮は堅い。一方の面には深くくぼみがあり、もう一方の面はやや膨らむ。へそは、下部よりややくぼみのある面側につく。
- ミツバウツギ *Staphylea bumalda* DC. ミツバウツギ科  
種子が検出された。黄褐色で側面観は卵形、上面観は楕円形。大きさは5 mm程度。種子の表面はや

や光沢がある。種皮は薄いやや硬い。

●メロン類 *Cucumis melo* L. ウリ科

種子が検出された。大きさは縦軸9mm程度。側面観は楕円形、上面観はやや偏平な楕円形。表面は比較的平滑。

●オオムギ *Hordeum vulgale* L. イネ科

胚乳が検出された。炭化しており、大きさは約5mm程度。胚乳は楕円形で先端部は尖り基部は丸い。内穎が付着していた側には深い窪みが縦軸にそって1本見られるが、外穎が付着していた側は、丸くなっている。

●イネ *Oryza sativa* L. イネ科

胚乳が検出された。炭化しており、大きさは4mm程度。胚乳は胚が位置する部分は欠如し大きく窪んでいる。表面には縦軸に平行な隆起構造が数本認められる。

今回検出された種実遺体は、人間にとって有用な植物が大部分であり、食用とされた後に廃棄されたものと思われる。これらの種実遺体のうち、オニグルミ、ハシバミ属、コナラ属、ウメ、メロン類、オオムギ、イネは可食植物であり、とくにウメ、メロン類、オオムギ、イネは渡来した栽培種を含む。ウメは奈良時代以降、その他の植物については弥生時代以降において、各地の遺跡から出土例がある。(粉川、1988など)。おそらく、当時これらは一般的な作物であったと思われる。一方、栽培種以外の種実は、現在の植生で冷温帯に分布し、本遺跡周辺では比較的入手がしやすい植物であると考えられる。なお、ミツバウツギ・タムシバについては、当時の周辺植生に由来するものと考えられ、これは現在でも本地域の山間部に自生している。

〈引用文献〉

粉川昭平(1988)穀物以外の動物食・弥生文化の研究2 「生業」、P112-115. 雄山閣.



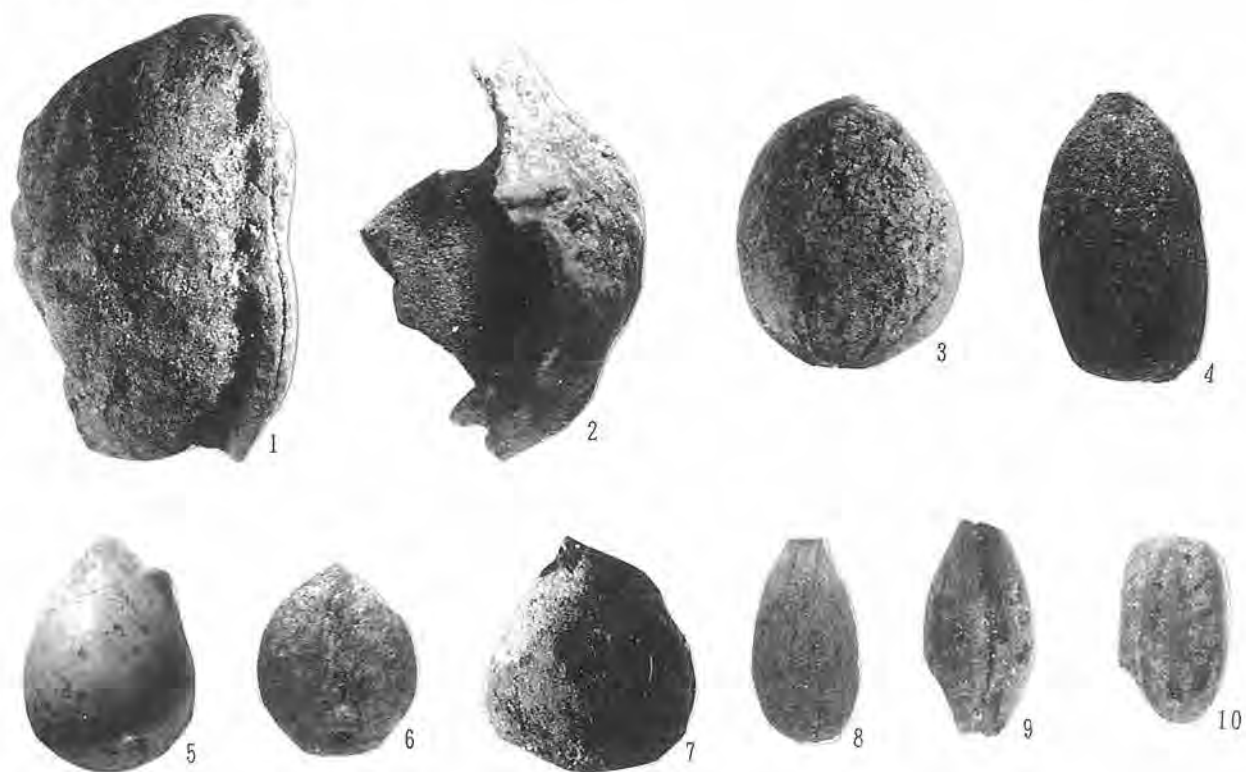
表1 種実遺体同定結果

遺構名	層名	同定結果	図版No.
HK03	不明	オニグルミ(1)	
HK04	S1	オニグルミ(26), コナラ属(1), イネ(7), ハシバミ属?(1), タムシバ(1), 同定不能(材の小片)	1-1,2,6
HK04	S5	オオムギ(1), イネ(2), メロン類(1)	1-8
HK04	S8	コナラ属(1)	
HK04	S17	コナラ属(3), イネ(2)	1-4
HK04	S22	イネ(2)	
HK04	S26	イネ(4)	
HK04	S31	イネ(2)	
HK04	不明	オニグルミ(23), コナラ属(10), イネ(9), ナラ類(1), ウメ(1)	1-3
HK07	S1~S2	オオムギ(1), イネ(5)	1-9,10
HK07	S1~S4	オオムギ(2)	
HK07	不明	オニグルミ(13), コナラ属(12), オオムギ(5), イネ(7), ハシバミ属?(5), ミツバウツギ(1)	1-5,7

( )内の数字は同定された点数で出土個体数とは異なる

※表1は遺構名、層名の変更に伴い、パリノ・サーヴェイ株式会社からの同定結果表を宮古市教委で再構成したものである。

図版1 種実遺体



- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1. オニグルミ(HK04 S1層)   | 2. オニグルミ(HK04 S1層)  |
| 3. ウメ(HK04)          | 4. コナラ属(HK04 S17層)  |
| 5. ミツバウツギ(HK07)      | 6. タムシバ(HK04 S1層)   |
| 7. ハシバミ属近似種(HK07)    | 8. メロン類(HK04 S5層)   |
| 9. オオムギ(HK07 S1~S2層) | 10. イネ(HK07 S1~S2層) |

1 cm

(1-4, 6-8)

0.5cm

(5, 9, 10)

## 2 磯鶏館山遺跡出土鉄器の金属学的解析

岩手県立博物館 赤沼英男

磯鶏館遺跡出土鉄器の金属学的解析結果を以下に報告する。

### 1. 金属学的解析用試料の採取

金属学的解析は、試料の形状を損ねることなく採取した微小な試料片により行った。

### 2. 解析方法

採取した試料片をメタノール・アセトンで洗浄し十分に乾燥した後、酸を使って完全に溶解し、全鉄(T.Fe)、銅(Cu)、マンガン(Mn)、りん(P)、チタン(Ti)、けい素(Si)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)を結合誘導プラズマ発光分光分析(ICP-AES)法により定量し、鉄器地金の製造に使用された原料鉱石の推定を行った。

### 3. 分析結果ならびに考察

#### 3-1 鉄器の化学組成

表1は試料片の化学組成である。一般にCu、Mn、Pの3元素は磁鉄鉱、赤鉄鉱中に各種の鉱物を鉱物として随伴することが多い。一方、チタンは砂鉄中に数%から数十%含有される。そこで化学分析により鍛造もしくは鍛造鉄器の地金の中にCu、Mn、Pのいずれかひとつが0.1%以上含有されていれば鉄鉱石、Tiが0.1%以上含有されている場合には砂鉄が地金の製造に使用されたとみなしてよいとする見方がある<sup>1)</sup>。本稿では上述に従って判定を行うこととする。

UK2-1小刀刃部から採取した試料片にはCu、Mnがそれぞれ0.097、0.701%、Me-F055穂摘具およびMe-F050刀茎部からはPが0.1%以上検出されている。上述の3点の鉄器のT.Feは57~62%の低いレベルにあるが、同じ埋蔵環境下であり、錆化も同程度もしくはより錆化が進んでいる他の鉄器からは0.1%を越える高いレベルのCu、Mn、Pが検出されていないため、3点の鉄器から検出されたCu、Mn、P分はもとの健全な地金中に含有されていたものとみなすことができる。この結果、UK2-1小刀刃部の地金の製作には含銅・含マンガンの鉄鉱石、Me-F055穂摘具およびMe-F050刀茎部には含りんの鉄鉱石が使用されたものと判定される。他の鉄器については化学組成でもって原料鉱石の判定を行うことはできない。

以上磯鶏館山遺跡出土鉄器の金属学的解析について述べてきた。磯鶏館山遺跡には、少なくとも含銅・含マンガン、含りんの鉄鉱石を使用することによって製造された2種類の地金を素材とする鉄器が認められる。ここで問題となるのがこれらの鉄器の由来、すなわち製品として搬入されたものであるのか、外部から供給された鉄素材を使って製作されたものか、あるいは遺跡内において原料から製品にいたるまで一貫生産されたものであるのかについてであるが、この点については鉄器中に残存する非金属介在物組成と鉄器とともに検出された鉄滓の解析を行い、それらの結果を総合的に検討して慎重に判断する必要がある。

註1) 佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、1984年

表1 磯鷄館山遺跡出土鉄器の化学組成(%)

資料名	化 学 組 成 (%)									
	T.Fe	Cu	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V
Me-F064	57.17	tr	tr	tr	tr	0.016	0.002	0.005	0.001	tr
Me-F037	62.07	0.006	0.001	0.051	0.002	0.385	0.037	0.103	0.011	0.001
Me-F019	64.66	0.007	0.001	0.012	0.004	0.044	0.004	0.002	0.001	0.008
Me-F040	60.87	0.005	nd	0.010	0.005	0.341	0.007	0.019	0.003	0.001
Me-F055	61.28	0.006	0.002	0.138	0.004	nd	nd	nd	nd	nd
Me-F050	59.93	0.009	0.004	0.112	0.024	0.919	0.066	nd	nd	nd
UK2-1	57.05	0.097	0.701	0.017	0.003	0.623	0.063	0.091	0.018	0.001
UG1-395	60.16	0.004	0.002	0.014	0.012	1.195	0.031	0.391	0.028	nd
H-0043	59.01	0.004	0.001	0.027	0.011	0.163	0.013	0.023	0.006	0.002
H-3006	52.19	0.008	0.004	0.059	0.073	nd	nd	nd	nd	nd
H-2008	56.74	0.007	nd	0.007	0.003	nd	nd	nd	nd	nd

ndは検出されず、trは痕跡を表す

資料名	出土地区	層 位	器 種	図版番号
Me-F064	F 地区	MB08建物跡検出面	錐	第98図-23
Me-F037	F 地区	第 IV 層	刀 子	第98図-20
Me-F019	F 地区	第 II 層下部	釘	
Me-F040	F 地区	第 IV 層	鏃	第98図-18
Me-F055	F 地区	MB08建物跡検出面	穂 摘 具	第98図-19
Me-F050	F 地区	MB08建物跡検出面	刀 茎 部	第97図-11
UK2-1	中央地区西斜面	表 土	小 刀	
UG1-395	中央地区	B 1 層	刀 子	第78図-5
H-0043	空堀跡	埋土上部	釘	
H-3006	空堀跡	第 II 層	半円状鉄製品	第78図-17
H-2008	空堀跡	第 II 層	鏃	

### 3 磯鶏館山遺跡出土砂鉄の成分分析

本遺跡から出土した砂鉄について、以下のとおり成分分析を行った。試料は平安時代の堅穴住居跡から出土した砂鉄と、この比較試料として遺跡内から採取された自然堆積の砂鉄について分析した。

- ・試料1～HH16 堅穴住居跡 K層上面出土砂鉄
- ・試料2～遺跡内採取自然堆積砂鉄

試料1は、鉄滓、羽口、炉壁などが含まれるK層の上面から出土したもので、この面では鉄あるいは鉄製品の生産等に関わる作業が行われている。試料2は、砂鉄が他地域から搬入された可能性があるか否かを検討するための比較試料とした。なお、試料は磁選したものであるが、試料中に残存する砂粒の割合は異なり、試料1は2に比べ選別度が高く、精選されている。試料の選別度の差異により、試料中に残存する砂粒の量に多寡がある。したがって砂粒の鉱物組成に起因する成分については、その残存の割合に応じて成分組成に影響が見られることになる。

分析の結果は下表に示すとおりである。SiO<sub>2</sub>、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、K<sub>2</sub>Oの成分で組成差が大きく、TiO<sub>2</sub>にも組成差が認められるが、他の成分ではほぼ類似した値を示している。組成差は、試料中の砂粒の鉱物組成に起因する部分もあるとみられ、その成分を特定する必要がある。

砂鉄の品質は、一般に酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)の含有率によって評価され、これが少ないほど良質とされる。TiO<sub>2</sub>/T.Feは試料1で0.014、試料2は0.019の値を示す。他の地域での分析結果では、大槌町の砂鉄が0.026、以下住田町0.072、内野(岩手)0.041、斐伊川(島根)0.076となっており、本遺跡から出土した砂鉄はTiO<sub>2</sub>の含有率が少なく、良好な品質を示している。

なお、この成分分析は新日本製鐵株式会社釜石製鐵所釜石試験分析センターによるものである。

参考文献 田口 勇「鉄の歴史と分析化学」『検証 大槌の鐵』第10回大槌町文化財展資料1993

件名	一般分析：磯鶏館山遺跡砂鉄の成分分析		受付番号	93-2217
分析結果			単位：%	
成分	試料名		分析手法	
	試料1	試料2		
SiO <sub>2</sub>	2.11	4.77	JIS-M8214 二酸化ケイ素重量法	
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.24	2.34	JIS-M8220 原子吸光法	
MgO	0.19	0.24	JIS-M8222 原子吸光法	
CaO	0.34	0.44	JIS-M8221 原子吸光法	
MnO	0.23	0.23	JIS-M8215 原子吸光法	
TiO <sub>2</sub>	0.93	1.30	JIS-M8219 ジアンチピリルメタン吸光光度法	
K <sub>2</sub> O	0.019	0.077	JIS-M8208 原子吸光法	
P	0.111	0.106	JIS-M8216 モリブデン青吸光光度法	
S	0.006	0.007	JIS-G1215 燃焼・中和滴定法	
V	0.15	0.15	JIS-M8225 原子吸光法	
Cu	0.002	0.002	JIS-M8218 原子吸光法	
T.Fe	67.26	67.34	JIS-M8212 ※ <sub>1</sub>	

※<sub>1</sub> 塩化すず(Ⅱ)還元ニクロム酸カリウム滴定法

以上

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	そけいたてやまいせきはつくつちようきほうこくしょ							
書名	磯鶏館山遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	竹下将男、高橋憲太郎、鎌田祐二、阿部豊							
編集機関	宮古市教育委員会							
所在地	〒027 岩手県宮古市新川町2番1号 TEL0193-62-2111							
発行年月日	1995年3月24日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
磯鶏館山	岩手県宮古市 大字磯鶏 字第8地割 中谷地 第11地割岸ノ前	03202	LG34 -2155	39°37'11"	141°57'33"	19840918 \n 19870110	30,400	・港湾埋立に伴う土砂採取 ・学校建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
磯鶏館山	城館	中世 (13世紀 15世紀)	掘立柱建物跡 空掘跡、土橋 切岸 井戸跡	青磁、常滑、渥美 瀬戸灰釉陶器ほか				
	集落	平安時代 (9~11世紀)	竪穴住居跡27棟 土坑18基ほか	土師器、須恵器 鉄製品ほか		土坑から動植物の遺存体出土		

宮古市埋蔵文化財調査報告書 43

# 磯鶏館山遺跡発掘調査報告書

— 本文編 —

1995. 3

編集・発行 岩手県宮古市教育委員会  
〒027 岩手県宮古市新川町2番1号  
TEL(0193)62-2111

印刷所 ショウジ印刷株式会社  
製版 電子製版部  
〒027 岩手県宮古市末広町4番10号